

申ければとかくの詞なくして時服とあたへ給ひぬ

〔四百二十七〕 京極 刑部少輔高和播州龍野を領せり國用甚乏しかりければ公儀乃事ハ堀田若狭守ヨ計リ藤堂大學頭高次高和の長臣岡七郎兵衛定次相加りて評義し新參の士に年々限りて永く暇を出すべしとの事なり佐々九郎兵衛長光年老ぬれども思慮ある者として呼れければ江戸へ行藤堂堀田に相會す評議の始終書記して佐々に見するは是は存寄ざる事なり是非新參の面々に暇を出して賑ざるを足んとならば祿多き者然るべしかく申佐々一人が祿數十人より多し流浪すともさのみ艱難にも及ばじ小祿の人々は道路乞食せん是不仁の至にて行ふべき事よわらずつぐ論せられよと諫む佐々が思慮と問るゝに高次五百貫目を取次で貸れんには五百貫目ハ臣歸路に京にて借求んされども爰に一つの大切の事あり幾度かくすとも殿の能舞妓鷹狩屋敷の設衣服器物萬事ノ費をなし國の長臣其職有もの身がまへしてわらは何の益かあらん此練言は外威どいハ大祿なれば高次の任なるべしといふにより一座感じて佐々が言と用ひ暇を出さる者一人もなしさて長光定次に向ひて此事一旦評義に及ぶとも國の長臣として狼狽順從して一言も争はず不忠なり世の國の長臣となる者其身の饒なると省に食する心より其主君ハ缺古より軍に隨て死するは多く諫て席上に死する者は悲し成難きをなすをすぐれたりとす何ぞ諫めて死せざるべき大かた財用の乏しきに及てよその金銀を借求めて 忽 困窮に至りては士の祿をばさど

り約束の詞を違へ非義不道の事を申行ふも成ぬるぞかし常に儉ならで足ざるよ及て俄に患るとも其本正しからずは武備と全うせんともいへどもいかで事よく成べき君臣とも國都を盗み祿を竊ひの兇賊なるに其恥べきを取とせず是非なき事ならずや汝其職に居てかゝる心なきいかにといへば定次一言の答もなかりけり

〔四百二十八〕 加賀中納言利常の士不破彦三四千石の祿を受けて武名を知られたり其子も同じく彦三といふ性質愚鈍よ見ぬて常よ怠がちなる事多し是を諫る人有て時節といふ事有といふ悦入候といひながら聴用するしも見ぬされば又いさめたり其時不破あざ笑ひ才覺ある御身五百石我愚なれども四千石さのみな誹られ候ひそといへを色を變じて人の勝る劣る祿の多少よよるべきや何とてさほき理の不通あるぞといふ不破うれい我も知ぬ今の詞ハ 戲なり亡父常に我を誦めて小ざかき利根だてなる事ゆめしすべからず人の心よ入んとてかりそめにも諷ふ事有べからず唯守るべきは義の一筋なり汝武勇の身なり士の義を忘れされと申おきたりしよ違はんかと日夜是を勤るの外他事なし衣食の美を好まず從者と艱難を同くせり日本第一の大家なる加州の士中我と祿同じき者多しくらへ見られよ人馬のすくやかなる武具の揃ひ整ひたる我に勝る者有とも覺はず又利にたよりたる事やなしたる踏ひたる事や候偽と申たる事や候平生日々身に省みて弓箭の家を生れし職をゆるがせにせば御身の亡父と親しき人なりし故かく諫めたまハ

る事も悉くよろこび存るなりされども正しき道に教へ玉えるべきに只時々見て世に從へども
實の本意は非るべしさらば言ふ從ずして本意に從んば如何候らんと答ふれば諫し人大に心服
またりけり

〔四百二十九〕 井伊直孝大坂冬の軍に物見二騎をやるに雨に霑て歸合ければ則ち若られし小袖
二ツを脱てあたへられけり扱安藤藤帯刀の許より小袖をもらひて鳥の小袖草袴にて 兩御所の御
前に出られけるとぞ直孝の領地近江の彦根は湖上より船を泛べて都へ行に甚近し太平に及て
や、若藤の風俗となりて彦根の士も都近ければ衣服美態になりけるを直孝戒ずして儉約にす
べき道をはかり江戸より歸る時木綿の衣服を供する士の敷密に用意して彦根に着く時俄にくば
りて着せられけり彦根の侍衣服とかさりて迎へける供の士皆木綿の衣服なり彦根の人々身
と省て美服を裂たてありしとて一事の法令をも出さず彦根のおごりやみてけり
戦國の時衣服質素なる事論ずるを待て瀬川左近將監一益關東の管領として鹿橋に至る時諸將
對面の爲來りしに只今一ツ有衣服の垢つきたる濯ぎて赤裸にて候程に暫く待て給はれとい
ひし事語り傳へて直孝の衣二ツ物見の士にわたへて替着のなまりしも皆符合したり泰平に及
てや、衣服の美に成じかども寛文の頃まで尙其遺風あり然れども金銀利倍の物語する事は
士の恥と心居たりけり酒井雅樂頭忠清大老たりし時江戸の殿中よて春の末にや休所よて下

比着たる服の汗づきたるを欄干にあげたるが所々つきたてたるが見ぐるしきと歸りて語られ
しに其事と司りし老女の時移りて君の奢り玉ふにこそわが一生は今の如くならんといひし
事あり此事は 嚴有院殿の御時より古の武士は大やう無用の奢侈を縮めて用ふべき事とは
客ならざるしなり關ヶ原一戦の後成瀬吉右衛門は伏見に有其子隼人正駿府に有けるが折節父
の許に金と贈りけり居間の天井に釣置て客來ればあれ見玉へ肴を調味せよとて隼人が贈りた
る金なり是を見れば美味に勝れりとぞかたりける大坂冬陣和平の後隼人が子何某祖父の所ふ
來りければ此度は事故なけれどもやがて事あるべし其時よき馬をもとめよ江戸廣じといへど
も金二拾枚の馬はさのみ多からむこれをとて二人の孫に 各金二拾枚をあたへしとなり昔の
士風想ひ見るべしにや

〔四百三十一〕 永井信濃守尙政は執政の職を仰出されし時井伊直孝に對面し不肖の身かゝる任
受甚恐懼に及び候教訓を得て其職に居候ばやと申されければ直孝尤の事に候我をしへ申べ
し身を潔くし明朝來られ候へと有ければ辱きよしいひて沐浴し禮服して其明の朝行きしか
を直孝出わひて世の諺にゆだん大敵と申候事定めて知れたるべし萬事の危きよ及ぶ事皆是ゆ
だんより破る、事の候此事あたく忘られよといひけり
〔四百三十一〕 青蓮院の宮よや 幼き宮よ中院 内府通茂公後見たりしに常に其双六を制せら

れけりある時公参られしに將棋の盤の有しと見て家司坊官と招き兼て申せしにかゝる物を何とて置たるぞはしたなき業は素よりあしけれどもたどひ有ても年の長じて心づきの有てやむ事もあるなり是等の類はさしも悪事にあらざる故其事は慣空しく月日を過ぎ學問の志怠るものなれば第一のあしき物にこそあれとて浪出せられけり又ある時其宮に参る人尺八の名管を持來れり重器なりとて人々玩びける時公参りて是は誰が業ぞかやうの物とて柱に打わて、碎れけりかの主の甚重器と思へるよかく計ふなしてゆゑにせんといひけるに其主來り事のよしを聞て誰某が持たるぞ内府の聞し召れん事恐しく候にそれとしらぬ申さぬは大なる幸に候と云けるとぞ

〔四百三十二〕 松平伊豆守信綱出仕の時裏付の上下着る事なし屋敷に有ても是を着られず常よりはれし人の心衣服よりて變ず出仕して恭敬を存せざしては忠を盡す事を得難し先衣服より心を付て恭敬をわするべからず我ふおいてはかくの如くつとめざれば忠勤を成しがたしと云れけり

信綱實は大河内金兵衛元綱の子伯父正綱の嗣となる幼名長四郎とぞ申ける 嚴有院殿御誕生有し時より御家人よなされ御あろび相手にて候ひける大殿の御寢殿の軒に雀の巢をくひ子と産たるを若君こなたより御覽じて長四郎よ成てまゐらせよと仰けるに年十一歳なればいかん

もかなふまじきよしを申す晝は晝きて飛去もやせんよく見置て日暮てこなたの軒は梯あして登り忍び行てとるべしと有る人々進めけれバ力をく日暮忍びのぼりやうくつたひ行けるがふみ損じて御蓋の内にせうとかつ 大猷院殿御刀とらせ給ひ障子ひらかせ玉へば御蓋所ともし火とつて出させ玉ひ御覽するふ長四郎にて有けり 大猷院殿汝何ゆゑ愛には來れるぞと御尋有しよけふの晝御殿の軒にすまめの子産たるをみて餘りのほしさにとりに参りて候と申すいやく己が心にかゝらじ誰かをしへけるぞとさまく御推問あれども幾度もあるそひぬ年比にも似ぬ不敵なればとて大なる袋の中へおし入て口を御手づから封じ玉ひ柱に掛させ玉ふ事の上しを有のまゝに申さざらんほどはいつまでもかくて候へど仰けれども惡調とあるへす夜既にあけて常の御座と出させ玉ふ御蓋所は早く心得させ玉ひてかれが幼き心にて身の悲しさと願はず 竹千代君の仰なりと申さる事を深く感じ玉ひ女房たちも仰有て朝飯をゆしてたべ候へとて賜をりて又口を封じ玉ひてけり晝ほせ玉ひて又御推問あれどもつひに其詞屈さず御蓋所御わび言ありしかばさらば重てを懐めよと仰有て御許しあり御蓋所に向はせ玉ひかれが今の心にて生立たらんには竹千代殿の爲には双なき忠臣にてある候はめと殊の外によろまばせ玉ひけるもかやされ諸國の大名の代々奉せし人質とかへし殉死を禁せ大佛を鑄て錢とし明曆の火災東都の城郭を始めこまなく灰燼となり諸人焦爛にくるしむ殊

に去年由井正雪の遺徒のさわざ有し後なれば人々必安からざりしは信綱事も臨みてたち所に
とり行ひし事皆其所を得てはさなく世の人心も静まり昔に替らぬ時もありぬる事いよしへの
賢輔にも取へからずと申傳ふる所なり

〔更増〕 加藤清正蔚山籠城の時漢南の蠻兵十餘萬寄手の明勢を助けんとて蔚山より北ふ方れる
高山の頂に陣と取り城中を眼下に見おろして扣へたりしに或夜清正兵卒三百餘人引具し城中
を見廻りしが二ノ丸と三ノ丸との間なる廣き平場も出て陣屋の指揮なきしてありけると山上の
漢南人遠目に見付けしよや其間六七町も隔りたる山の上より西洋炮とドツと打ちかけたりしか
ば何かは以て堪るべき清正が士卒忽ち胸中を打ち抜れ或は半身を粉も碎かれて死せる者三十餘
人よ及びける清正令して少も動くことあるべからず其儘折しけやとて鳴を静めて潜み居り
し程に山上の漢南勢城中静まりて音もせぬ筒先の下りて的ざるにやと少し上よ向けて再び撞
と放つに三ノ丸の芝原へ打込たり清正尙ほも令して汝等少も動かす息を詰めよ我れも亦命は
惜きぞと堅く制して音もせぬ程に漢南人猶ほも筒先や下きとて又上の方へ向けて放ちければ此
度は空を打ち通りて更に城ふの中らざりける清正此時大音に令して今ころ騒ぎて引取れやとて
小踊して本丸指して入りければ兵士等一同ドツと喚きて皆我れ先きよと引入りける漢南人城
中の騒動せる有様を見て是れが能き圖に當りたりと覺ゆるうとて三番四番打續けて放ちけるに

彈丸は空中と飛びて更よ人よ當るまどなかりける是れ清正が智術の深きによるとて城中舉て驚
動せり

〔更増〕 朝鮮の役小西行長宗義智平壤城に籠りける明軍大に至り如松小西門と攻め如栢大西
門を攻め吳惟忠駱尙志北門を攻め祖承訓南門を攻めたりけるに承訓は前きよもろくも大敗を取
りて大に取辱を蒙りしまどありければ何卒して這回は奇功と立て前敗を償はんと欲し種々工夫
を凝し遂に奇計を思ひ出たりそを如何と云ふよ日本人屢々韓人を敗りけるをもて之を易ること
甚だし承訓之を知るが故に其部下の兵士として皆韓装を尙へ故らば躊躇して進まざらしめけ
れを行長以て韓人となし此手は敢て奮戦防禦するに足らずとて専ら西北を拒ぎ自ら銃手を率
お導て如松を卻けしるよ如松益々大礮火箭を放ちけるに毒烟城を蔽ふ行長の勢殊も死戦して
之を拒ぎける承訓此の體を見て須破時こそ善しと則ち上に被れる韓装を脱て捨て明甲を露し敵
諜して登りける程に行長大に驚き急に兵を分けて之と拒ぎける間よ西北即ち陥りける承訓其戰
功は他人に奪はると雖も其所爲は奇妙にして人をして大に感せしむるものあり

〔更増〕 朝鮮の役加藤清正益々進んで兀良哈よ入り一城を攻めけるに手強くして中々に落し難
く見おける折から清正の勇臣森本義太夫貴田孫兵衛木戸際に進み乗入んとしけるよ城中より
大の男二人さびしく踵ふて衝出たり義太夫飛びかゝりて一人よ組合たり孫兵衛は今一人の敵に

向ひ大身の鎗を引絞り唯だ一突と撃てかゝり半時斗り戦ひしが孫兵衛一足踏込と見えしが彼の
大男の綿齒を鎗先白く突抜たりしかば何かは暫しも堪るべき仰向に倒れさま手に持たる劍を孫
兵衛に投付けて死したりける去るまでも運の極めの哀しさに投げたる劍孫兵衛が左の肩より
と立て痛手なれば同じく倒れ臥してぞ死したりける此間に義太夫は敵と組みふせ首を取て立上
ける

〔四百三十三〕

細川忠興に胃の物すきといかにせまかといふ方の有しに詳に書しるして使に
わたへられけり使立物の下地桐の木どかき玉へるは折やすきものにていかゞ候らんとはいへば忠
興色と變じ汝は弓箭取の使とも覺へぬなり軍に臨む者誰か生て歸らんと思ふべきニツなき命だ
まじかり何條立物の折るを厭ふべきかろきこそよけれ立物の折るばかり又働きたらむ何れみぐ
るしき事あらんひと面目よてまをあれといはれけり

天正元癸酉年七月信長淀の城と攻落されしに岩田主税助を細川藤高の士下津楯内打取し時忠
興八ツの年なりけるが長岡監物が清にのりて監物がす物鹿の角に取つき見物して興に入たり
と人見後年の生さきをわしはかりける也

〔四百三十四〕

細川忠興豊前に在し時同州竜王の城より飯河豊前宗祐縁三千石岩石の城より長岡肥
後宗信縁六千石宗祐の子寵せられて長岡の姓を興へられしに父子とも罪有て慶長十一年七月

一日二人とも謀せらる宗祐は河北石見逸見治左衛門と討手とし宗信と増田藏人を討手とせらる
宗祐散々と戦ひて死傷多し宗信が妻は米田助右衛門是政が女なり宗信と睦しからず對面せざる
事三年に及べり忠興是政が後實の尼雲仙院といへるをよびて豊前肥後罪有て誅すといへども汝
が女と孫の女も罪なし密に告知せて命を助けよとなり後室の尼聞て肥後が妻常に中よからず然
れども夫をすてゝかゝる時ふのがれんとは得こそ存まじけれと仰の 忝きをば告げ申さんとて
交して告やりけれを誠と仰は 忝けれと今ハのさばよ夫をすてゝ遁れん事人道よあらず女子を
東西をわさまへざる者なれば養育して給はれとて使につけて尼のもとへ送りけり宗信是を聞て
大に悔み我過と謝し終に共に自害したりけり

〔四百三十五〕

黒田長政の嫡子満徳丸とて四の歳袴着の祝ひ有母里但馬はひき目親にて常に
いとなつけれしが其時但馬満徳丸の髪をかきなでゝとく成長して功名し父上よりよくしたまへ
と申ければ長政何といふ事ぞや我武畧をさみするか若き時は汝又備後山栗とも相謀り朝鮮よわ
たり又關ヶ原の合戦も皆汝等が扶よよらす大敵は勝たり其後世太平なれば立べき武功もなし満
徳いかにふもふとも我を越る事存もあらずとて膝立直し但馬をよらされしかば人々汗を流すと
ころに但馬かたへに向ひて故なき怒かな人の子に功名し玉へと云はひが事かどて物どもせざる
体よで長政の方を見向せせず長政いや父よりまされとはいかふも怒られしかば但馬打わらひ心

と静めて聞玉へ武功は幾度事にあひても仕すまじたりと思ふ事はなく度おとに不足なる者に候
 他人はたぐひなしと褒めたつれども黙して過候よき軍兵を引具し地の利よく幸に勝玉へると
 自讃は以の外のひが事よてこそ候へ今まで勝軍になれて毎度斯の如くならんとならば必敗北
 あるべし味方崩れたる時一足も引す討死の殿の得ものなり其は大將の道にあらず候味方討せず
 軍に勝を良將と申候殿の武畧進む一途は得ものよておはせせも進退圖に中る一途はかけてお
 はじまし候此是非の論は備後老功の者にて候間時よとせ給へ満徳どの只一人かけ出て討死す
 る事を選武者の業なり死ぬやうに軍に勝と大將の道よはする事候此詞よく覺てとくより能
 し給へと髪をなで、長政の怒と物とも思はぬけしきなり備後守次の間に酒宴して有しが聞つけ
 て銚子かはらけ取持て走り出長政の前に跪き憚も願すす、め奉り候とて盃を差置若
 き時如水公の小姓たりしかば御酌のいたしならひし小笠原の神義存出し候とて酒をすくめけれ
 ば長政うちとけ盃をかたひけられしかばそれを但馬に賜はり候へとて氣ちがひよろれへ罷出
 よといひければ但馬す、みより其盃を載きて三度引うけ飲て後殿はよ一なきに怒り給ひ今日
 の祝ひも興さめ候少し酔玉へと云しかば長政も又盃に十分引受られし時但馬いさ着よとて田
 村をうたひ出し舞すまじたり鬼の如くなる男の稽古せしか拍子も耳目を驚かせり皆一同に兵
 のまごはりとうたひて酒宴盛にをりければ備後守高聲よ若き人を能聞れよ必掛の深きも殿又思

慮なきも殿なり大たのけを但馬又たのもしきは但馬なり黒田の家の武勇目出度時すよとみな
 く酒と酌るをし事有ん時給と合せなすべし事をなし世時は何事もゆるし玉ふぞ人々うたへや
 舞やとて酒宴やみてけり又長政或年の春嵐初の祝ふ栗山備後守がもとに行れし酒宴あり四ツ
 比に及んで長政われ居たらは若き者ども酒おもふほど得飲じあどにて打どけて酒もりせよとて
 歸られしに但馬今少し居て若きもの共に懇に詞よかけ人々悦ぶやうにこそ有たけれとかく我
 まの直らぬ殿なり頂よ大なる灸をしてこそよかりなめと大音にて云しと長政聞ぬ体にて歸
 られけり

〔四百三十六〕江戸の石壁をきつゝある、時淺野長辰仰を奉りて龜田大隅高綱を奉行とす石壁
 成て後崩る、事三度に及べり、台徳院殿打廻り御覽して何とて崩れしやと仰有しに龜田謹で
 其事に候大隅軍の時嶋の帯の鎧を提げ先かけ候陣つひ崩る、事はなく候石の無心ものにて
 せんかたなく候と申す事終りて鹿毛ぶちの馬を大隅に賜ひけるに士の二毛の馬に乗ことや候お
 げたる事もなく候に口惜く候といふを土井利勝申上られしかば別の馬を換て與へよと仰られけ
 り龜田大剛の者にて十文字の繪下坂忠親が造にてさやは嶋の帯に造り栗色にぬり縹螺鈿の柄
 なり

〔四百三十七〕慶長年中禁裡に猿樂の有し時貴賤郡参しけり吉岡建法といふ染物屋劍術の妙手

にて有しか無禮の事有しを難色得ければ建法外に樹羽織の下に脇差とかくしもとの所に入先の難色とたゞ一打も切て夫より縦横にかけ廻るもとよりあくまで手き、なり手負敷をじらす板倉伊賀守勝重日の御門に有しが眉尖刀の鞘をばつし向はれしを太田忠兵衛何條手おろさせ玉ふ事やあるとてかけ行を勝重此長刀よてとてあたへられしかば太田吉岡より向ひ悪逆無禮のものを首とのべきと走りか、れば吉岡は紫宸殿の階に息つき居しが我は太刀打せん者汝ならではといひて階を下りて立向ふ太田巳に眉尖刀は無益なりといふま、よ刀をぬく吉岡走りか、りさまに倒れけり太田大音わけ倒れたると切は、士の取なり立て勝負せよといふ吉岡立あゝる所を飛か、り一太刀も切殺しけり勝重悦びて太田に膝を増し、盃をあたへて後吉岡が倒れたると切さる、は勇敵有といへども氣に驕の失あるに似たり吉岡商賤しき身なれども劍術のいかなる人も及びかたし倒れしは天の與へなり然るを切さるを虚を打の理にくらしどもいふべきにやと云れしに太田仰誠よ辱く候こゝよ一ツ存る故の候多く敵の倒れ候とおこしも立す打んとする故に身を忘れ脚と切れて倒れたる者の勝になり候倒れ候に虚實の二つ有吉岡が倒れ候は虚にて候有聞たどひ實に倒れ候もたやすく斬る、男にむらす倒れも時の身を防く事虚に似て候へども近付ならば切んと存るは實にて候虚も實も倒れ候もの、立揚らぬといふ事はなく候其立あが、る時は躬を防ぎ敵をきりばらんと存るは虚になり候こそを打てたやすく切とめ候ひき誠よか

ゝる小き業匹夫の事よて殿のしろしめす理よても候まじされども陣とわゝち軍する道にも相かなひ候事もやと、憚と省すして申よて候といへば勝重大よ感せらる

〔四百三十八〕 柳生但馬守宗矩は大和國にて世々柳生の庄の地頭なり關ヶ原の戦の後徳川家よ仕へ奉りて父より劍術を受傳へ無双の妙手と聞てけり、大猷院殿御年わか、りしより此技を好ませ玉ひ宗矩御師範に参りて御心を盡させ玉ひ、頗其妙と得させ給ひけり只此藝によりて其人を信じ敬せさせ玉ふと人々おもひけるは實に其技によつて治平の政事と諭し申けるにや常々御側の人々よ天下の治め、但馬守よ學びてゑる其大体を得たれと仰られしとを聞ける宗矩年、老病重かりし日も、辱くも家に入せ賜ひら正保三年三月終に空しくなりけるに其ころためまなき贈位の事を執し仰られ従四位下にわけさせ玉ふとのや宗矩死せし後事よふれて生て世あらば尋問べきものと深くしたはせ仰られしは誠の有がたき事なりし其中一事相傳ふるは島原に凶徒の乱江戸に聞えし頃は十一月十日也宗矩有馬玄蕃頭豊氏の家よ猿樂有て行向ひしよ家獄尋來て但馬守を呼出し肥前國島原よ土民相集りて楯籠り候ひぬ是切支丹宗門の者にて松倉にらむき候ての事なりと早馬來り板倉内膳正追討の御使を承りはや御發向候とぞ申ける宗矩さらぬ体よてもとの所に歸り坐し用人に向ひ急て宿所よ歸るべき事出來ぬよ、御馬をかき玉といへば心得たりとて馬に鞍置て牽たつ宗矩打乘て品川にはせ付板倉は如何にと問は通に過させたりと

答ふ川崎に馳着て問ば今は二三里も隔りたりと申す日已に暮に及べば引返して御城よわがり近侍の人々を以て申べき旨有て伺候し候ひぬと申せばやがて御前召て何事にやと仰有宗矩畏り只今承候へを九州よ切支丹宗門の逆徒發起し内膳正重昌追討の御使を承りませ向ふよし仰と稱しおしとまじべきと存追かけ候へども追つかず候此よし申さん為なりと申す何故にかしとやめんとは思ふぞと御尋ありさん候君はひたすらの土民ばら立籠り候と思召て追討の御使かろくこそ候へ宗門に付て起る軍は大事のものにて候重昌一定討死仕申べしいかにもはかつてとやめばやと存候ひしし申す以の外御氣色損じ御座を立せ玉ふ宗矩猶夜ふくるまでも退出せず此よし聞召又御前に召て重昌討死すべき子細いかと御尋あり宗矩さればこそ兵の道は勇と先とす勇士は死を悲す三軍みを恐れざる事は今の名將の專一とする事にて候凡愚の輩宗門と深く信じ其法とかく守りて死と以て身の慨とす百千の人死と恐ざるの勇士となり候事を宗門の故よてよそ候へ織田家の武威を以て一向門徒に勝事能はせ天子の命を假て和平よなり候ひぬ三河國の一揆も近き御家の事にてこそ候へ大坂の時重昌年わか候へども數十萬人に撰ばれ唯一人大事の御使承りたる者なれば是等の土民打亡すべきよ何事か有べき誰のは其下知を背くべきと思召たらんは事の違ひにて候べし重昌位高く祿も有て年頃重き職を司つて常に人の敬ひ候はんには然るべく候今の重昌が身にて城を攻候ひなんに西國の諸侯いかは下知に従ふべきや

もふにも似ず攻めくみていひなんふは又御一門の人々をあらすは宿老の内重ねて追討の御使下され候べししからを重昌何の面目ありて生て再び關東に歸るべきわたら人を土人等に打せ候ひなん事誠に口惜くこう候へ是は御家の恥辱とも申べきをや御ゆるしを蒙て候へ追付参りてとかく押へとやめて具えて歸るべき物とぞ憚る所なく申ければ御後悔の色あらとれさせ玉ひしものそれも叶ひがたくや思し召けん夜も更たりとて入せ玉ひしかば宗矩も退出しひろかに人よかくと語りけるどるや誠に宗矩が計り事學をさすがごとくなりしかば尤深計遠慮ありとぞ申へき

〔四百二十九〕 島原にて寛永十四年切支丹一揆の時討手に石川主殿昭忠綱板倉内膳正重昌なるべしと云けるを石川聞て我年老たり板倉其器に當れりといひれしが重昌仰を奉り肥前に趣き城落ざりしかば又討手れ大將と下さるべしといふと石川聞て我始に其機にあはん事とさのみ悦むざりき今思ふに泰平の世も徒に死んも志も非ずあそれ仰と奉りて西國よ趣かばやとぞいはれける重昌筑紫に向ふ時京都よて所司代板倉周防守重宗よ對面ありて今度の仰を承る事辱き由を語られけり重昌既よ京都を立て後重宗重昌がもふ所を察するに必討死すべし再會是までなりといはれけり松平伊豆守信綱肥前に進發せらると聞て重昌城を攻て討死せられたり人重宗よ其いひれをとふ重宗城にこもる者は百姓の身なる故に内膳正忽攻落すべしと思へる

色あらはれたりたとい此城を攻落すとも一揆の奴原さのみ功名ともいふべからず只今四方無事の
の時一揆たのみなき城に籠りて降参するとも悉うち殺されん事を知て其心一和すべきたやす
く落べからず日敷を經ば又他の大將と指向られんに内膳何ぞ生て歸るべき吾是を以て討死せん
事を知ぬといはれけり

〔四百四十〕 細川忠利の士川北九大夫といふ者あり川尻の代官を勤めよとなりしに出陣の時供
よ連られなば代官の職つとひべしといひければ尤として出陣の時供すべしと定めらる天草のや
くもすれば一揆をなす所と西國の人のいひける事なれを心よかけて川尻は海邊船の着く處にて
細川家の米藏あり天草へ海上七里と開ゆ川北兼て地鉄砲の敷をしらへ置けり獵帥の事也天草の
一揆起ると聞て川尻の海岸より一間に一木づ、竹を立させ一本おとに火繩をゆひ付五本より一人の
地鉄砲を配りけり後天草にて生ざられし者のいひけるは其夜川尻の米と取ん爲に船をおし出
して見らし川尻にいくら共なく鉄砲を備へて見えたる故さては熊木より軍兵のはや川尻に來
れりて船をもどしけるとなり川北あかりせば川尻の米と取れ天草の城たやすく破れまじかり
し川北が謀にて天草の糧はやく盡てけり

〔四百四十一〕 天草の一揆を圍み攻らるゝに城中糧米既に乏しくなれば夜討して米をとらんと
本田但馬が謀にて先諫早口の堀の外の水を汲せける時鉄砲をならべて寄手にみせたりかくする

事三度よ及て後には漸々遅く夜に入て汲せけり是の夜討に出る時の鉄砲の火を見答めさせじ
との事也其後毎夜堀裏にて切支丹のどなへこと天帝といふ事を數千人一同にをめぐ是も夜討に
出る時の物音をまぎらひさんとの謀ありかくて寛永十五年二月廿一日の夜五百人ともて黒田
忠之の陣所におしよせ二陣の兵二千八人を二手に分ち細だすきして額にはくるすを鉢巻にして相
辭は丸か丸と定か首なりとる食物をとり來ると第一の功名よせんとして下知し諫早口より出て出郭
のかたへなる有江口へ退入べしと定め陣屋を焼ん爲に檜の木を削りかけにして腰にさ、せ丑
の刻をかり月もおぼろよくらかりしを便に黒田の陣所に押寄同時は陣の聲をあぐれを城中よも
陣の聲をあはす士大將黒田監物しよりぎはにありて父子とも面もふらず支へ戦ひしが流れ矢
に中りて討死まければ從兵四十三人枕を並べて討れけり一揆大に勇み進みしかども黒田美作入
道睡陣物しよて柵壕さりの守りかたにくためらふ中に黒田市正高政鎗を提出あひ二三人突伏せ小
性よ首とらせ市正こゝにあり一足も引なきたなきふるまひせを軍神も照覽われ斬て捨るぞと呼
はる聲を一揆聞て爰は破りがたしとて寺澤兵庫頭忠高の陣所に進み行三宅藤右衛門支へ戦ひ痛
手負たり一揆又鍋島勝重の陣所の井樓に火とかけたりしに松平信綱より夜廻りの士岩上覺之介
危子八郎兵衛紀州の使者山中作右衛門と打連て來りしが山中は銀の冑にて十文字の鎗を持さん
くに相戦ふ鍋島の軍兵馳集り入たてじと防ぎけるに竹把に火も付て白日の如く一揆かなは

で引かへず時四郎矢倉に有て勝開をつくらせよれより城中静まりけり其後水野日向守勝成島原
より着陣し黒田睡馬よ夜討の有様かたらせ聞てむかしより四方を固く取まかれ竹把を付欄の木二
重三重にゆびたる寄手の陣に討て出たる事を聞ず古今無双の武略をしたらる一揆也されども一揆
を一等超てはたらかんはわが士卒なりと云れたり

(四百四十二) 同し城攻め鍋島のしより堀二三間ばかりに竹把と付寄せ軍兵ひしと押寄居ける
よ城中殊の外に静なればひそかに堀の内をさまのぞき見るよ一揆一人もなし士大将鍋嶋安藤是
を聞堀裏とさしのぞく其有様只今攻入べきけしきなりしかばわはやと云程こそあれ我先にとか
け集る鍋島の陣に附られし神原飛彈守の士ども竹把を付習ふとて毎日かはりくよ來りしが是
を見ていざといふまゝに押寄る神原の嫡子左衛門佐真先かけて乗入ければ戸田左門氏鐵の陣所
に諸將集りて軍評定有し時なるに井樓より鍋島の軍兵只今城に攻入候と母はるさらばとて諸
將陣を密に攻落されけり其後勝重に今度軍令を背き城攻有し事と問るに勝重承り神原父子先
がけして乗入候うへは目附を討せて叶ふまじと不意に攻入候と申さる神原に問るよ嫡子にて
候苦き奴軍今を忘れ先がけしける故恩愛にひかれ子を眼前よ討せ候ては生がひなし父子は同罪
と存つゝいて攻入候と申されければ鍋島も神原も門をさびてかひ込れ三十日過て御ゆるされぬ
り勝重人よあふぶぶとに筑紫にて卒忽の城攻せし罪ゆるし玉はり 忝きよまいはれしかば江戸よ

て城攻の卒忽人よとて勝重の通らるゝを珍しげに観けるとなり又神原申されけると若き者ども
に竹把の付やう習せ度候攻口四五間分ち給はれとなり皆くるしう候はじと云けるよ勝重聞入
すわが攻口を人にわくる事やある一寸も叶ふまじと答へらるよ神原しひられしのは飛州の士
とわが士共にさし加へられよといはれけり此時一丈にてもわけたらば領地と削らるべきよし
あるけるよ勝重の遠き慮なりし故よ其事やとなりしと人々のひけるとぞ

(四百四十三) 黒田忠之天草丸を攻る時本田恒馬さびしく防ぎ支へて先陣攻入得ざりしかを忠
之直はだよて進まれけるを黒田睡馬物具持むにたらぬとい申せども大軍を下知し給ふ身ふ胃を
着さればうらたへたりと人々嘲り候べしといひければ忠之物具とつて肩にあげ胃をば着す手ぬ
ぐひにて鉢巻し走り出わが士ども年比吾家の思よみちし奴原けふはいかにして進まざるやわれ
此處を一足も引まじきとて鎗の筒と地よさしとみ折しきてすよ者共と下知せらる雨の如く
打出す鉄砲に打すくめられたためらへり睡馬は是を余所よ見てひかへ居しかば忠之何とて一方を
下知せざるや年老て老耄したるかとお音わけ齒がみして罵られしかども少も嘘がすいまだはや
く候としづよいへば忠之いよく怒り罵られしを弟市正彼入道の物にして候またせられ候
へといふ所に睡馬つと立上り魔と取てか、り候へといふ詞の下より軍兵一同にぞつと進みて天
草丸よ乗入攻取たり後に忠之睡馬と近付軍兵我下知を用ひずして汝が一言にて忽城を攻破り

たるはいかなる故ぞと問れまにすべて城攻に四方より押寄せ先陣ひしと攻つむる時を見はかりて無二無三に進んで手負死人を願ふ乗入候へば攻破り候事を得候四方の味方いまだ押寄せ一方より攻破らんといそご候へば城中も外の防をすて、先きびしく攻るかたを支へ候もの外の持口よりも防ぎ甚つよく候其ひまよ一方より攻入候時は容易く撃破り候早過たる方は却て手後する事常の理に候臣このわきまへをしりてしつもらせ候へと申せども殿いそがせられ候故味方に手負死討多かりきと申ければ忠之高政とも大に感せられけり

〔四百四十四〕 島原を攻落す時水野美作守勝重を江戸にて賜りたる白川月毛といふたくまじき馬に乗月田氏鐵の陣所よりわが陣所も乗切て歸られしに勝重の軍兵ども金の束のし馬じると見るより我先にといさみけると勝重馬上にて背を取て着武者奉行河村新八士大將上田玄蕃も向ひわが下知なき以前にかゝるあらば軍神にかけて斬棄よと大音あけて呼はり魔を拔出し軍兵とす、め塀を破りをめきさけんで攻入けるに自分馬より鎗を杖にして本丸を目にかけて進まる、嫡子伊織十四歳眞先よるけ出るを祖父の勝成後陣より見て本丸をうち破れと下知せらる本丸にたてこもるもの共數千人けふを限と思ひ定め防ぎ戦ひければ討るゝ者多し鍋島の軍兵ひるみて見えし處を水野父子横さまも面もふらす切かゝりて三の丸より本丸へ逃入一揆と討取る事敷としらす本丸の石壁より打出す鐵砲の玉燧の飛ちるが如し石壁を五間七間斗も高く登り乘たる

處に水野父子大音あけて今日本丸を攻とらずは生て離れる面を向べき死やくと聲々に呼はりうてきも射れきもひるますわれ先にと攻あゝる旗奉行神谷奎之丞旗十本の内一本持せ來りて自竿に手をかけ本丸に入んとす繞奉行進藤七兵衛小野田正太夫金の束のし馬印をふりかたげ來りて松の丸に押立しかば神谷も旗を入水野父子の兵念なく石壁と登り本丸に攻入たるを勝成二の丸より見やりてわれ今生の思ひ出なり美作は大坂にて武功あり伊織はけふを始めの軍なるに本丸を攻取し事家の面目なりとよろこべたり有馬左衛門佐康純の嫡子藏人永純と寺澤忠高の後陣なりしが唯一人從者に鎗をもたせ寺澤の先陣をかけぬけて天草丸の方へはせ入本丸に進んで五間斗の石壁を登り今日本丸の一番乗有馬藏人なり心ある士はよく見候へと呼る處に勝重の士鈴木半之丞取たる首と石壁の上に置て息を繼居けるが此聲を聞て鎗を横たへ藏人に向ひ只今こゝも來り一番とは何事ぞや本丸は水野美作守攻入旗馬印入置ぬ二番とならば是へ上らせ候へといふ藏人聞入られ唯一鎗にとおもへるけなきなる上に水野の旗本丸に建しと見てさうらバ美作守につゞきては藏人なりといはれしかば其時鈴木半之丞美作守父子の外大將たちいまだ本丸には見えませぬきき二番よて候とて手と取て石壁より引わぐるに永純つめの丸くひ違ひの處に進み行美作守のいづくにやと問ふ神谷美作守は腰郭の上よ居て爰は旗と入候と答ふ永純聞てさては美作守は我より後にてこりわれといはれたり永純本丸に押入たりと勝重聞て使と

たて只今攻入られしよししくるわ有所にありもし夜に入で一揆討て出る事もあるべし爰に一所よ
 有て下知せられ候へとなり藏人聞もあへず作州はわれより後に攻入れしよ藏人は一寸も敵近き
 所を好ま候はせに後へは引候はじ一揆打て出るとも藏人爰にあらば危き事候はずと答へられけ
 り勝重よししく詰の丸より切て出ば敗北すべしとて士三十人計鎗を横たへ鉄砲と前よ並べたり
 藏人の鉄の楯を取寄前に押立て夜の明るまで待かけられしかども一揆討て出ず信綱下知して勝
 重も鍋島の陣に入かはられしかども永純はしりぞかず使度とに及て引かへされけり落城の後三
 月朔日永純勝重の陣所に行本丸の一番の藏人にて候といふ勝重年若くて左の給ふ本丸の奴原命
 を限に防ぎ候ひしを美作守父子かし寄討破りて旗を一番に入し事誰かわらそひ申べきと答ふ鈴
 木も進み出たれを永純また鈴木が申せし言もいゝで忘れ候べき作州父子は一番とおもひて藏人
 二番と申せしも分明なりされども旗入置れし所に行てみしに夫よりはるかに跡にひかへてこそ
 おいしたれ鈴木も旗を證よして利口を申たれどかく一番は藏人候と云れければ勝重たどへ
 陣所ふ在たればとて旗を一番に入しは是軍の法に於て誰かは一二と論すべき父子が兵ども身を
 棄て力攻に乘取し本丸と他の一番に定めん事思ひも寄候はず能思慮し給へど答へられし永純
 旗の前後と論せず候將たるもの、先がけは藏人が外誰か候作州は跡より使を給はり候へば一番
 の藏人なりと怒られまかを勝重只今のあらそひ無益の事に候軍に留たる物しに問て一二を定め

られ候へといはれまのば永純打とけて小姓と呼び茶と飲て出られしが鈴木に向ひいかにも詞和
 らるに云て歸られしかば藏人もなみくならぬ人なりと譽あへり

〔四百四十五〕 一揆の長四郎が首を細川家の足輕陣佐右衛門取けり二の丸にて鉄砲にあたり倒
 れし者の首を斬しに忠利前髪ある首を取り出させ報よて彼首とさし四郎が首ともおぼしきよ誰
 か見知たると問須佐美權之允四年以前に四郎を召つかひし事の候紛ひなき四郎なり左の耳の下
 に瘡の候是はしるし也とて生捕たる四郎が母に見すれば吾子なりとて泣倒れしのは忠利使とた
 て、首と石谷十藏の方に送られけり後陣に千石の祿を與へらる

〔四百四十六〕 島原の城攻に細川家の士大將松野龜右衛門井樓より見るに本丸と二の郭の間に
 坂有て人集る中に大紋の羽織着たる者あり松野指さして鉄砲にて打たるよ五町ばかりにてた
 中にあたりてけりうれより空箭なく打しかを彼坂を夫より後たま／＼通る者身をかめ走り通
 りけるとぞ松野は鉄砲の妙手留刑部一火に學びて妙と得たり

熊本よて一匁の筒をみがき居しに庭の南天樹の實とひよ鳥の來て喰けるをかなものしはめて
 薬とこみ目的と見ず筈よて火をさして打よ中らざる事なし島原の前に事なりしにや細川家の
 長臣南條大膳恨をふくむ故有て細川家と傾ん事と謀りけるに其比深く鑑する事ありて泄
 せば細川家の禍なる事と知たりければ先切支丹の事訴へけり江戸より南條をめす細川家驚

きたれどもせん方なし松野我にまかせられよとて囚人なれば厚き板よて詰牢をつくり醫者一人に密談と云ふくめ熊本より出るに天氣と待とて感々舟をどめ日と經る内よ人參入たる藥とわたへ朝夕の食物まで人參湯よて飲食させけり南條と氣の鬱したる上人參數百斤飲たりしかば心狂乱したりけり松野江戸に打具し至りて南條は數年狂氣の者にて候とて出しけり切支丹 訟の事を問る、に狂言のみなりとて熊本に歸すべしとて松野に返されぬ此謀たる醫一人のぞ知たりと云り

〔四百四十七〕 元和五年藤堂高虎領國阿濃津にて俄に勢揃をせられけり人或は怪しみ或は高虎何事か謀反すべきや方に一もの心あらむ事を密にすべきにあらはに人のおどろくべきやうになしたるは子細あらんといひしに福島左衛門大夫領國と削られけり

〔四百四十八〕 福島左衛門太夫正貞は關ヶ原の軍功によりて尾張國清洲より安藝備後を玉はりけるが物荒く政悪きのみならず多く無罪人を殺し且 東照宮よ對し奉り無禮多かりければ元和五年 台徳院殿御上京の時領國と削られけり

本多上野介正純も就て廣島の城池を浚ふべき旨を申上げべきよしを答たへられしが御上京の事繁きにまされて其事なかりしに廣島の城普請の事を聞え召怒らせ玉ひしよ正純其時驚きて正則の書翰と出されしよ禮文の出し後れとて聞し召入られずともいへり

二條の城にて土井大炊頭利勝藤堂和泉守高虎をめして此事を仰出され議決せり

板倉伊賀守勝重此事の井伊掃部頭直孝を仰聞られよとて直孝を召御前に參りて福島左衛門大夫國を召放たるべき事故召れ候やと申す其事なり誰か使よせんと思ふぞと仰あり直孝京都よりの御使ならば江戸に残れる者は是程の事辨へざるやと申事も候べし只今江戸に罷在る者に仰出され然るべし又正則を京師に召れ罪の趣 仰出され申譯有か又は國に引まもり思慮せよと仰られ候ても然るべく候事により直孝罷向ひ打破り申べしと申和泉守若き掃部頭より似合たり但福島もさすがの者にて剛に者餘多れば小路軍になりていかよあらんと申直孝和泉守は何方にて小路軍をしたるぞや直孝が家よは武功の老武者多し古き戰の事を聞しに今川氏眞の許にて濱松の城主井伊隼人を氏眞の城下へ召寄誅せられし時小路軍になりて殊の外むつかしかりきといふ誰一事を聞たりといへば和泉守詞なし 台徳院殿いはれざる小路軍の論をて先退出せられしが井上主計頭を以て再び直孝を召仰にはわが思ひたる所も汝が言のおとし人々皆口々にいひて一同せず掃部頭存る旨に従ふべしとて誰とか使にせんと仰なりしに直孝の様の使久世三四郎坂部三十郎兩人よかりなんと存る也と申せ是も符合せりとの仰にて兩人使たりるくて酒井雅樂頭忠世太田善太夫を近付福島左衛門大夫領國を召放たるべきよし仰出されたり福島はさるものなりといかある事とか仕出すべきと危て思ふなりと語られければ

太田いや何事かいたすべき事もなげ云い酒井又いつものわうちや人なる詞かな危き事と思ふ也と申されければ太田ならざる事をする福島よあらず候すへをしらざる者こりさへ候へけれ福島は非道不仁の男なれども勝負の理をよくしりて候男なれば何事も仕出さじといひしが果して一言にも及ばず仰の旨を奉りたりき

六月に福島領國と削らる、旨廣島へ聞ければ福島丹波守諸士を皆呼集め預置れたる城なれば公方の仰なりとも渡し難し又備後守殿爲なれを渡すべきかと評論す上月文右衛門進出て人はいかにもわれ我は本丸を預りぬる上は命あらん限は人よ渡すべからずと申切たり丹波心得ざる氣色なり村上彦右衛門聞て福島上月兩人の思ふ所に同心の面々別々に判形せられよとて二通書て指出す酒井主膳とて丹波が従子なるが座と立録田主殿を呼いかにおもふ丹波は伯父なれども上月がいふ所尤なりといへば主殿も上月に同心して判形をしたりければ皆是に同心しけり其時上月人々皆かくの如くなれば丹波が妻子と本丸に入らるべきやといへば丹波即妻子を本丸へ入られよりわれ先にと妻子をぬめたり城を受取べき爲に諸將うち向はれれば丹波吉村又右衛門水野治郎右衛門二人と使として左衛門大夫領國召攻たれに候より仰の旨は謹んで承り候然れども主君領置れし城と證據とすべき書簡あくて渡さん事は人々の存る處思ひやられ候次に領國よ入玉はん事おなかの若き奴原無禮の恐れ有領國をさけられ候へと申送るさらば左衛門大夫

は程遠し伏見にある備後守の書簡を證據にせんやと云せらるに父子たる事は論なしといへども備後守が領國にも城よあらず備後守が言は用ふるにたらずといふ所に正則が書簡來りしかば城門の大手よて書簡を受取ぬとて廣嶋は船入二所あり人多くさわびしくて士どもの妻子退去る時争あるやの恐れも候とて一方とば人とどゞ一方の口より退散す城中士は門の左よ付禮服して並び居城受取の使安藤對馬守重信は城門の右にそひて城に入れけり

安藤城門に入時並び居たり人々よ向ひ左衛門殿事申べきやうもなしと詞をかけらる其時禮せしに獨茶釜髪にてしかみの撞木杖とつさて對馬守禮を聞かたはらを見て禮しける山崎甲斐守見てなみくならぬ人なりと知て姓名と問ふ長尾出羽と答ふ山崎退散の後家族を養ふへし又他國に行中寓居せられよとて使をもて云せられしに出羽甲州の御事を承り及びたり

丹波と文右衛門とは密に相計りて初よりたてこもるべきといひて同心する人なき時は別よすべき道なき故に事を二ツにして士の心と試みたるありと其比いひあへりさて後城を守るふ決せし時丹波上月に向ひ吾と文右衛門腹切たらば何事も外よすべき事なしといひしとかや

左衛門太夫罪せらるゝと聞て腹を亡たる士三十人ばかりありしかば狭間くゞりといはれけり妻子と本丸へ入けるは諸おもりと名付妻子を城外に出し其身のみ城を守らんといひしは片

籠りといふ後、京都耳塚に禮と立三色に分ちて姓名と書て世の人に見せしゆゑさまくまりの面々は餓死及びぬといへり上月は祿五千石大將たり正則上月が志を感賞去書簡とわたへらる今度我等事御預に成候是に依て城を枕と存候よし心感察入候然も存寄有之候間早く城相渡し可申候貴殿志之段不淺過分之至に存候とぞ書れける大崎玄蕃長行も福島家の士大將なり同じ時大崎は備後柄の城より秋田不總も同じく柄より有しが大崎を廣島にやりて己一人にて柄と守り討死して名を賜ばやと思ひけん大崎に向ひ江戸より城と受取べき使近き内ふ着陣有べしとく廣島にこもられ然るべからんと云大崎聞て殿の下知なくて城を出んこと思ひもよらずといふ秋田城中を廻り防戦の支度専らなりし大崎の柱よりて眠る外なし人々大崎をそしりたるに大崎あざ笑ひ秋田はかくゆゝしく防戦の用意するなるべしわれは思ひ定めたる事有て萬事ひまなりといへば其子細を問ふ大崎此城と守り日本國と敵よなし萬に一も勝べきやわたら人々の徒よ殺さんいかになりわれ一人大手の門外へ出て城代大崎玄蕃と申者なりとて腹切ん後城を受取給へ城の人々残らずたすけられよと云て各たちの命は換るべし何の用意の有べきといひけりかゝる所に正則の證書來り事故なく城を渡せしかば大崎と村上彦右衛門眞鍋五郎右衛門と同じく紀伊の家より仕へけり大崎は若き時木村常陸介郎春に奉公之後正則に仕ふ鬼玄蕃といはれしものなり關ヶ原の時尾州清洲の城に大崎を置れけり石田三成大

垣の城より入て使を以て福島家は太閤の恩篤き人なれば今度無二の味方候清洲を明られよ兵を入なんとぞたばかりける津田備中繁元へげにもどかもひて同心すべきに長行事はいかにもせよ殿の仰なくて他國の兵を城にいれん事存もより候はずしひて兵を寄られば一軍せんともを見出して使を罵り追返しけりかくて大崎門々を固く守りさまくばりしてかくと小山よ告たりしかば正則悦ばる 東照宮正則は清洲の守りに誰有と仰わり正則大崎玄蕃と留置て候と申處に斯と告來りければ聞し召大崎は世にほまれ有者なりさざあらんと仰られしが其後も清洲を敵にとられざりしは大崎が功なりと度々仰わりしとなり紀州にて安藤帶刀大崎村上眞鍋に逢て武功を問たりしは眞爲は十四の時より軍をし數度の功名をかたり村上も十四竹子の軍より壬生川の先駈等をいひしに大崎はわれ木村が許に小祿よて有しが 士大將にあり又福島の家よても士を下知し候へば左のみよふうも候はせといへば帶刀犬よ感じけるとなり又一説も福島正則流罪藝州へ聞けければ長臣の者ども福島丹波がもとに相集り城を渡すべきや否やを論ず村上彦右衛門通清殿流罪たりとも御存生に於いては御判形を見て國を引渡すべし御判形來らずは此城を枕にして討死の外他事なし但本丸は上月文右衛門預りたれば上月に談合然るべしといふ上月聞て御判形を見すしていかで本丸を渡すべきといふ備後三次に尾關石見備中境東條ふ長尾隼人一勝備後三原に大崎玄蕃長行有しを石見集人をつばさせ廣島三原の兩

城り守り各人質と城に入天守に燒草を積大手搦手の控口を定めたり安藤對馬守永井右近大矢
 中國西國の軍兵を率の備中の笠岡に着陣あり丹波吉村又右衛門大橋茂右衛門を使として主君
 の判形と見すして城を渡す事迷惑なりと竹中采女へいひ送り上使聞て狀を取寄べしと返答
 有て笠岡に滞留の所正則の狀倒來す丹波已下是を見て城を渡すべしと相定む笠岡より尾道へ
 八里初は陸路と定められしを安藤船にて行べしとなり加藤嘉明聞て上使は船にて早く惣人數
 は陸よて遅からん上使より遅くばわれらも男とすてなん是非陸をとす、めらるれども安藤聞
 入す船の事を峰須賀阿波守に相計らる加藤も船を用意したりせめて某の船も乗れよとす、め
 此船に乗て上使尾道より到り人數は陸を廻りけり大崎玄蕃使を以て主君の狀廣島より來る上は三
 原も相違候まじ然れども三原へ狀來らずきて城は明渡し難しと竹中のもとに云送る安藤聞て
 跡先の思慮にも及ばず無二無三に城へ乗入上使討死の時爰に有城の門際にて上使討死せば續
 く者なきといふ事有べからず只今まで笠岡に滞留し又爰に日數を送るべきにわらずと云切た
 れば加藤 尤然るべしとて子息式部少輔の先陣とはや押出さんとする處に三原の城へもはや
 正則の狀來りければを藩事故なく城を渡したり城に入て見れば士足輪の名を替付てるまご
 とに配り置城の隅々まき掃除して坐敷ふは釜お湯と涌し茶をひかせ置たり翌日廣島に著けれ
 ば丹波今日渡すべきに城中掃除未だ終ら、下々の荷物ものけ兼たり明日までまたれなんやと

いふ永井聞て我兼て聞つる來有城和平になり渡すに及て下人の荷物を片付兼たり一兩日また
 れよといひしを荷物に札を付て大手搦手其手より出さるべし相當のあたひも買取んとて城と
 取受たりし其翌日寄手の大將頓死しぬ城中のいひにまかせを城を持かへす變も計りがたし危
 き事なりと云傳へたり唯一刻も早く受取んとて大手へ進行て繪圖を抜き城内の物主どもと呼
 集め番所寄口を渡し濟城へ入て飛脚を以て此旨言上ありけるとなり古き人の詞に城の受取渡
 は互に證據ととり唯今事に臨むが如く心得べし城主進退窮りたるなれを慎むべきなりとい
 へり

評註 常山紀談卷之三

〔四百四十九〕 正則配流の時正則の邸表の門前に蒲生下野守忠郷裏門へは鳥居左京亮打向ひ昔士卒物具したりけり芝の邸へは最上源五郎義俊打向へり蒲生の士ども正則公命と承たりと聞ていろど邸を出らるべしといひ入れれば正則仰にも及はずとて信州に趣くべきにて候とて熊澤半右衛門守久上月新八郎兩士をよび奥筋の風俗常にかさつなり蒲生鳥居の者ども門内へこみ入に於ては吾士ども無禮と咎めて事の破も有べきなり汝兩人門内ふ有て理を盡すしそれとも聞入すばかけ來りて告知せよ自害すべしといひ入れしに半右衛門は畏り難き仰をも承りけるといひも果ぬに正前我今日公儀に背きかく成果し故おのれさへあなどるやと大に怒られしに半右衛門驚かず新八に向ひて只今仰のびとく出羽奥州の風俗のがさつなるは勿論なり立向ひいかに理を云たりとも聞入へからず其時のけかへりなを追立られ逃入たると同じ事にて未の世までも恥辱なるべしさらばこみ入奴を腕の力のつゝかんほを切わひてうれと注進なし其後殿はいかにもならせられんやと云けるに新八ももとより同心に候と答へしに正則悦で打うなづき二人のいふ所尤至極なり幾重にも穩に理を盡し承引せずば志のおとくせよといれしかば兩人畏り承り候とて坐と立て門内に出ひのひけるも事故なりしかを正則信州に趣れけるとぞ〔四百五十〕 正則常に物あらく人を誅する事を好めると世の人もいひあへり或時近習の士少の

答わりて城内廣の橋に押しこめ食物とわたへず餓死せしめんといはれし其士の恩と受たりし茶道坊主罪なくてかゝる有様をいたみ潜に夜焼飯を携へ行たり彼士われ罪ある故も斯成たり汝只今のふるまひを殿聞し召れおわれよりも罪重からん又飯を喰たりとて命助あるべきにあらざればとて歸れといひしに茶道云けるは同じ罪も行ひるゝとも後悔なしわれ先も既に殺さるべき事の有し君の救ひにて一度たすかり候ひぬ恩をうけて報せざる人よあらずこなたも又よわげなる心おはまて吾志を空しくし給ふ事こそ口惜けれといへば彼士悦んでさらばとて是と食す夜おとよかくの如くしたりけり程經て死したるならんとて正則矢倉に行れし顔色少しも衰へず正則さては飯を送りたる者わらんと怒られしに茶道來り某こそ送りたれと申す正則はたどにらみてれのれ何故よかくしたるや頭二つに切りなると膝立直されし時茶道少もさわかず我昔罪を得て既に氷せめにわひて殺さるべかりしは彼人の申ひらきたりし故今日まで思ひかけず命存らへ候ひき其恩を報ぜん爲毎夜しのびて飯をはこび候といふ正則怒れる眼涙と流し汝が志感するにあまれりるくまそ有べけれ彼士をもゆるすべしとて其ま、矢倉の戸をひらきて罪を宥め茶道をも深く賞せられけりされば暴悪の人と世は稱しけれとある義に感ずる事の切なる故も士のれもひ慕ひて力を竭し正則の爲に身をすて、奉公しけるもげに故ある事にこそ〔四百五十一〕 台徳院殿諸大名をぬし土井大炊頭利勝をもて來年嗣君よ世と譲らせ給ふべき旨

仰出されしかば皆祝し奉りたる處よ井伊直孝默然として有しかば利勝かたへに招きいかなる事
 ぞと問に天下亂の本たりと存すれば目出度事とは存もよらすと申す子細はいかよと問ふされば
 其事に候大坂の亂幾程なく江戸石壁のいとちみ日光の土木天下の諸大名以の外に困窮せり又世
 を譲らせ給ひなば諸大名獻上奉る物に費多く 將軍宣下の饗禮を取行ふべし愈困窮及び下
 と利民を苦むるの外更にせん方なからん是民のなげき亂のもと、存るなりと申されしかば利勝
 尤なり此旨ありけま、に申へしとて直孝を御次の間にともなひ利勝御前より参りてしか、のよ
 し申たりければ 即 直孝を御前に召れ汝が申所尤なりされども既に仰出されたれを易難し猶是
 より後憚る所なく申せと仰られしかば直孝臣が申むね然るべからずと思召候により聞し召入ら
 れず候か臣が言尤 思召なを御用ひなからん事仰とも覺候はずと申されけるに暫く御詞な
 かりければ利勝臣既に年老ぬ壯年の者直言を申候事治世長久のものと候明日諸大名を召掃部頭
 申旨尤なるにより相とめらるべきよしを仰有て然るべう候ものをも申されければ 台徳院殿
 則諫に從はせ給ひけり其時直孝臣が申旨用ひさせ給ひ 辱さ旨謝し奉りて退出せられけり 台徳
 院殿の諫に從はせ給ひし事直孝の直言美と盡せりと人申れり
 又一説に 台徳院殿世上太平といへども嗣君いまだ幼穉よおはしすす總郭を築るべしと仰出
 されしに直孝一人とかくの詞をりしかば 各退出の後いかなる故すと問せ給ふお申の旨心

得むたく候嗣君幼穉にかましま ども治平の時なれば一郭滅せられ候てこそ人々安堵いたす
 べけれ嗣君幼穉より郭を培れなを人々危ふむ心を生せん事必然なり且御上京も候て過分
 の財用を費し五三年も儉約たらざれば償ひ難く有べきに又費を多くなしたらんよ郭は堅固
 に成候とも武備有まじく候と申されければ翌日諸大名を召掃部頭申旨尤なるより昨日の
 仰出されは相輟らるゝのよしを仰出されたりといへり就れか是なる事をしらす
 〔四百五十二〕 大猷院殿の御時國姓爺日本に援兵と乞ければ諸長臣を御前に召出され是を捨置
 れをば日本の恥なり援兵とつかはさるべき旨仰られしに小事たらざる故に 各とかくを申出か
 ねられし處に稻葉丹後守正勝援兵の事然るべからざる旨再三申されければ色を變じ内に入せ給
 ひけり明日又召出され昨日申せし處思召にかなはざりしかつく、御思慮有しに申所 理なり
 援兵に及ぶまじき由仰出されたり
 明の末鄭芝龍といふもの萬曆年中日本に來り肥前松浦の平戸にあり又長崎にもありて崇禎年
 中に明帝より召返されけり平戸に在し時妻とりて子を生む其子を鄭彩といふ芝龍宮を得て長
 崎の奉行に告て妻子と迎ふ公に申てゆるされと蒙りたり明滅し時大祖の苗裔を福州に建て元
 を隆武と号す清と度々戦ひに及て勝難き故に援兵を乞たりしなり明帝朱姓を賜 けれ心國姓
 と稱し爺は老成を尊むの詞なり芝龍が事明末の書に詳にしるせり

〔四百五十三〕 正保元年は明の崇禎十七年なり明朝亂れ陝西の李自成などいふ者盜賊の長となり一揆と起し北京へ攻入明の天子も自ら縊れて崩じ給ひけるに福建の鄭芝龍書簡をさへげて加勢を乞けるに依て紀伊大納言頼宣卿異國より加勢と頼み申事日本の武威四海にかやくとも申へし諸浪人と集め候ひなんには數十萬も有べしそれに西國中國の大名小名差加へられ然るべからん拙者に總大將仰付られ候はゞ何事の悦びが是ふ過ん異國へ攻入おもふまゝに日本の武勇を見せ申べしと願ひ奉り玉ひけれども御加勢の事やみければ兼て仕へ申せし武功の物しども清兵と一軍して老後の思ひ出にせんといさみける人々殘多き事よといひあひけるとかや

〔四百五十四〕 大猷院殿の御時晴の猿樂有んとする前夜に大雨にて御前に見しわたるべき塙の白土壞れしよ

一説に朝鮮來聘使者出べき夜櫻田の矢倉の窓の白土やぶれたるともいへり
 いかゞせんと人々いひける處お松平伊豆守信綱白き奉書の帯と以てはらせられしかば皆其捷智のほどを感じあひける處に酒井讚岐守忠勝 利勝ともいへり伊豆守に向て讚岐守が存る所は貴人にはならざる事はならざると知せたるがよき仰出されんに何事も仰のまゝならんと思召れんに驕奢とみちびき奉るよてこそわれ其時はいかゞし給はんといわれしに信綱ふかく心服せられけり

〔四百五十五〕 江戸の黒田河橋なかりしを酒井忠勝申て橋と掛られけり要害の時あしかりなると云人あり忠勝天下を治むるに人々以て要害とせし人苦んで何の益か有べし人を苦めて要害とせば江戸は一日ももちこたへ難しと答へられけり

〔四百五十六〕 板倉周防守重宗京の所司代たりしが江戸より下りける時松平信綱對面を公方にも政事に御心を盡され候京都の事も委細に聞し召度候是より後は同職にさし越れ候書狀京都の事詳に記され候へといひしに周防守の百二十里の行程隔りたる事何程に聰明なれとしますとも及びおしなる事は得知し召れし其故に周防守を京に指置れ候事なれば申上るに及ばずと答へたるとさては周防守は致身ものなりと感せさせ給ひけり

重宗の父を伊賀守勝重といふ初は四郎右衛門とて祿五百石なりしよ京都の所司代を仰出され二万石賜はりけり是は本多正信が薦め申せし故となり勝重仰を奉りて佐渡守に向ひ重職の任を身にうけ候事に候程お歸りて妻なるものに相談りて若同心せずは職を固辭申上べしよし申けるに正信打うなづく勝重家に歸りてかゝる仰を奉りしなり重き任おられ内縁と頼み訴する者あるべし公私よ付て口をそへられずば仰を畏り奉らんも少しにてもいろいれんとならば只今其よし申て京には趣き候はじといはれられたこはいかなる事をのたまふぞ仰をかしくまらせ給へ女の身にかで公の御事にたづさはり申べきといそれしかばさら

とて出る時はかまの腰をねぢられかてきられしをそれはいかにといはれければ勝重さればよ
 かくあるべしと思ひし也とて重々にいまして後仰を奉りたりと世にのいひ傳へたり勝重
 尾張の惠阿寺といふ曹洞宗の長麻和尚が弟子にて長祐といひしが還俗して四郎右衛門といひ
 けり勝重嫡男を重宗次男を重昌といふ二人とも江戸にあり或時 大猷院殿訴訟をひとつ巧に
 構へさせ給ひ二人とめして判断せよと仰有けり重昌仰と奉り理非分明に決定して退出す重宗
 や、久しく思慮して後重ねて決断の旨を申上候はばやとて退出し二三日也て後御前に参り判
 断の旨を申たるに弟の重昌が申たるにも相同じ人々兄よまさりたる重昌也とほめあへり其後
 勝重京より江戸より下りし時 大猷院殿かの 訴の判断の事詳とよ示させ給ひ重昌が才器を御
 感わり勝重承り内膳正はわか氣よて思慮なく候周防守は國家の政事と取候とも其任に叶ふべ
 し其故は訴を判断する事は政事の一つの餘目にて候政事は至て重き事よて一言を以て天下の
 利害よか、り候 荷にきはめ申すべき事にはあらず候政事は大事とくりかへし思慮いたしへ
 ば重宗は政事をとり候とも仕損ずまじく候只打見たる所を以て已が智慧を人に見せんぞ存ず
 る所は重昌がわる氣と申物よて思慮なく候と申ければ御感減からざりしとなり其後伊賀守年
 老たり所司代の職に任ずべき才をねらび候へ汝が替りにせばやと仰有えに勝重子にて候周防
 守所司代の任よかなひ候よし申たりけれと内々其ごとく思召れしと仰有けり周防守ハ斯も

しらで御小性にてありしに父伊賀守がかはりに仰出されけり周防守上 京せられしに伊賀守
 衣服をわらため左右の職に居る人と並べ置記録をも 悉く取出し周防守を上座にまねき
 で江戸靜謐の事と窺ひ今日より所司代なれば萬事引渡し候といふ周防守只今まで御側に仕へ
 奉り世の有様ゆめく存候は、仰にも父を見ならひ候へとの事なりと申されしは伊賀守いや
 く其職に居るべき者なりと擇出されし故か、る重任の仰の奉りたりと覺ゆるなり人の心
 は面の同じからざるが如し我み付ろひ居たれとて我にひなる、時は自ら決断するより外の
 事なし汝が不才を隠しなば五畿内はいふにや及ぶ西國までも 禍有べしちつともかざる事有
 べからず只不才とあらはすと第一とすべし不才としろしめされなば其任に當るべき人を擇ば
 れて仰けらるべし更し恥辱にわらず今日より所司代の職に居るべしといはれしかば周防守其
 詞よ 隨れぬ勝重ハ町家をかり置たるがること引移り基を打て口ずさみよ今度の所司はきび
 しいものよわれとあひしらひたるが如くならば必罪せられなんどて基を打ありしとて
 〔四百五十七〕 周防守重宗京都の職に有ること凡三十餘年入敬ふ事神明の如く愛する事父母に似
 たり父子誠に同じ名臣とぞ聞えまされば重宗は寵恩も殊に厚く從四位上ふのぼり官左近衛少將
 にすまけり重宗職に任じて後毎日決断所に出る時西面の廊下よして遙に伏拜心奉有て決断
 所に出此所に茶磨一ツすゑ置あかり障子引たて、其内に坐し手づのら茶ひきて 訟と聞人皆不

審しあへりけるに遂に年経て後問人有しに重宗答て先決斷所に出る時西面の廊下にて遙に拜する事は愛宕山の神を拜する也多く乃神の中殊も愛宕は靈驗新なると聞し程に所願ありてかくは拜しぬ其所願は今日重宗が訴をことわらん心及ぶほど私心有らば若わやまりて私の事わらば忽ち命をめされ候へ年頃深く頼み奉るうへは少も私心有らば世にならへさせ給ふなと毎日祈誓するまで候又訴をわかつ事の明かならぬ我心の事よふれて動くが故なりと思ひなしぬよき人へ自ら動あざらんやうにこそわらぬ重宗それまでの事は及び難く唯心の動と静なるを試るには茶を挽てしる心定りて静なる時は手もそれに應じて磨のめぐる事平かにしてきしられておつる所の茶いかに細やかなり茶のこまやかに落る時にいたりて我心も動かぬと知り其後やうやく訴をわかつ又明陰子をへだて、訴を聞事は凡人の顔のたちに打見るよりよくさげなるをわはれましきとあり誠しき有かたましきあり其品多くしていくらと云敷をしらず見る所の誠しきと思ふ人のいふ事は眞實をきかれかたましきと見ゆる人のなす事は何事もみな偽と見ゆわかれましき人の訟は枉られたる所有かと思われにくさげなる人の争ひはひが事ならんと覺ゆ是等乃類は目に見る所よ心のうつされて彼詞を出さぬうちにはやわが心の中に邪ならん正しからんよからん直ならんどもひ定むる程よ訴の詞よ及びては我おもふ方に聞なす事多し訴のなるに至てはあはれましきに憎むべきありよくさげなるに隣なるあり誠しき

に詐有此たぐひ殊に多し人の心の測りがたきかたちと以て定ん事叶ふべからる古の訴訟と聞には色を以てすといへどもそれハ重宗が及ぶべきよあらず又さらぬだに訴の庭に出んはれとろしかるべきにまして生殺と司れる人を見てはいぶせて自いふべき事をも得いばで罪にも科よもあふ人あらんと思へば所詮互よ面を見も見られもせぬにしかじこれもひてかくは座をへだつるにてこりわれと答へられしとぞ

神佛に所願を掛くることは評註者の大不好なる所にして人の所願する所を聞見すれば唯冷笑するの外他事なかりけるが本章板倉重宗の愛宕山に所願を掛くることは至極味ひありて之を讀むことを喜ばしむ又貌を以て人を取る孔聖も子羽も失し司馬遷も亦留侯に失す況してや其以下凡人に於てをや如何に誤ることなきを得んや是れ重宗の障子と隔て決斷ける所以よて後の法官に宜しく服膺すべき所なり

〔四百五十八〕 板倉内膳正重矩のいはく

重矩は伊賀守勝重の孫にて鳥原よ於て討死有し内膳正の子周防守重宗の従子なり膳にて長身く以の外見ぐるしき人なりしるども有徳賢才のきこわありて寛文二年祿二萬石増賜はり大坂の御城代たり寛文五年大雨にて雷天守よ落て火出て焼上りしかば大坂のさわぎ大かたならず萬治三年雷火有し時拘捕の藏ふ火入て死人多かりし事を聞たりし故なり内膳正町奉行彦坂



壹岐守石丸石見守兩人に鹽硝の皆濠中へ入たるよしふれさせられしかば驥を静まりけるどが
 内藤正 豫 警衛の備かたく下知し置れし故尼ヶ崎の青山大膳亮人數をひきの大坂より來り其備
 を見て深く感せらる此旨江戸へ聞はしかば御書を賜り稱美ありければ内藤正即ち家士を集
 め是皆汝等が功なりと讓られしとぞ同年の冬江戸よめし一倍の祿を増玉はり執政の職を仰
 蒙られけり同八年京都所司代牧野佐渡守正親のかはり仰出さる、内まばし内藤正をもつて京
 都の事を司らしめ給ふ上京の後參内の事あり此禮儀御簾と半卷上らる、例なれども内藤正
 恐懼すべし事なれど天顔に咫尺したるの名有て其實なし御簾と高く卷上られ候へど奏聞有し
 に尤なりとて勅にて御すだれを高く捲上らる、事内膳正一人なりしとぞ其後又一万石増賜
 かり下野の鳥山の城主たり重姫若きより詩歌に心をよせ學問と嗜み熊澤伯繼が門人にて嘉言
 善行多かりき京都よて加茂川洪水の時白川より加茂川四條の間へ堤をつかせまた鞍馬の往來
 市原といふ所に水泳れ往來の 困なりしかば田地ともめ川筋を除き山路を開かれしかば内
 膳死後に及て此地の百姓ども仁徳と慕ひ如意谷に内膳正の位牌を設け跡をとふらひしとなり
 財寶と奪ひどる若をむかしより 盜と名づく我つらくおもふ大名は 盜多し下士民の善あ
 るをわけずしてすつるは是人の善を盗むにわらずや親族朋友にも善あるを稱せずして過るは是
 も人の善と盗むなり中にも君たる人への下の善とあぐべし職は有是天より命さられたる任なり人

の善と盗みて天命の任をかゝるは盜の大なるものなりわれもし人の善を盗んや、是のみ心と盡
 すよと語られたける又伯父周防守が語りしよ人の生質さま、有中に見たる處のにくき者あり愛
 すべき人あり此にくき人を見ては善言もゆしさまに聞えずぞか、況や直言をいへばいよく憎
 むものあり又愛すべき人のいふことはよからぬ事もよく聞なすもの也これ心得べき事なりと父
 なりし伊賀守常にいましめられしと格言なりと又語られしは儉と吝と相似て其本大異な
 り儉は事の費をいとひて奢侈ならざる用ふべき事、財と用ふるといふ吝は是非の論なく一向に物
 を惜むなり又戒められしはわが心よ叶ひたる者のいふことは何事もよく聞か行路はよからぬも
 心づかば又我事を憚る所なく直言する人は道理の至極せるをも外になし其詞の無禮を罪とす是
 皆事を過つのもとなりと其前一萬石の中甚貧しかりしよ新に儉約の法を定め先自らの事を第
 一に守られし時の歌

もとめなき心もことまたのつうら任せて通る身こそ安けれ

〔四百五十九〕 關ヶ原亂の後毛利 森とも記 豊前守勝永は土佐へ流罪せられしに大坂より事起ると
 聞成夜妻にいひけるは我罪有てかゝる所は居住し汝にも斯うき事を見する事すとよされども我
 志あり詞よあらはしがたしと語りければ妻のいはく世の變はいかなる人もはかるべからずか
 く成はてたりとも更も悲しむべきにわらず妻は夫に従ふ道とこそ聞て候へ其御志を承らむや

といふ勝永云我武名を傳へて數世に及びぬるにかく沈み果なん事口惜き事なり命を秀頼公に奉りてんと思へども我愛と忍び出なば愛がうへにも溜う事や御身の上に添らんと涙を落しけるに妻つくくを聞て打笑ひ弓箭取の妻となりていあでかある事と記それなんやとや此曉船に乗て武名を潔くし給へ君のため家の悦び何事かこれにしかんよわらはが事を思ひ給ひろいにもなり給ひたらば此鳥の波に沈み候へし運命めでたく願て逢奉らん急ぎ給へといひければ勝永悦んで小舟に取乗大坂に至り籠城しけり其後山内野馬守より豊前が妻を固くいましめたきかくと告られしかば 東照宮聞し召勇士たる者の志感賞すべき事なり豊前が妻罪する事有べからずと懇に仰有ければ豊前が妻大坂の城中に入けるとぞ

一説に父壹岐守勝信も土州より流されしが病死しぬ勝永土州に有て年月を送りけるが時其從士宮田甚三郎を大坂にやりて其從弟なりし大野修理亮が方まで秀頼の無事を問せけりかゝる所に大坂より秀頼兵を起すの旨告りしかば勝永土佐守忠義を歎き關東へ忠を致すべし先非を改め舊領を復せん志なりと云て土州より船に乗んとしけるが甚三郎を呼て我大坂に着たらば嫡子式部次男藤兵衛ともよ山内家より殺害すべし如何をべきといひしかば宮田夜に入て陸に上り式部が乳母の子小原文右衛門と相謀り難なく式部藤兵衛をつれて舟に來りければ勝永悦んで船を出しとも打つれて大坂に至れりといへり

〔四百六十一〕 池田左衛門督忠は 東照宮の御女北條氏直の北の方にてればしけるが北條家亡びて後國清公に再嫁ありて生れ給へりしかば 東照宮の御外孫なり大坂冬陣は十六才なり一旦和平に成て師を返され、後陣に従ひし士ども寄集りて物語する時一人の云若き殿の此度の軍より比と大よ違ひて諸事の下知兎角いはん詞もなし中にも今まで詞に出さぬ事一ツあり仕寄場にて寒氣はげしさにさぞ苦勞ならんとて小の手樽酒を入て給はり又綿入の肌着と王り此事ゆめく人にな泄しとぞ仰られし志の 忝と忘れがたけれと語るを仰ありし故今までは泄さまりしといへば一座十四人手を打てわれくも其道をりき我一人のわひしらひなりと思ひしに皆斯の如きためしすくなき事なりと感じあひけるぞ

〔四百六十二〕 大坂冬の城攻め興國公の攻口は天満橋の邊なりしに先陣の士大將波多野掃部須加左京竹把を付るに兵少くして夜にならではいかも調ひがたく候日のうちとならん兵を増給はり候へといひしかば其様を見て來れとて芳賀内藏允先陣に行芳賀は茜染の羽折着たり先陣の兵も家屋の焼後土藏の蔭に扣居て橋より上よしるしの株の候見られよといへば芳賀す、み行芳賀近頃寵せらる、者を武者ふり見よといひあへり芳賀馬よりふりて徐に川岸を歩むを城中より打出す鉄炮川水にひきわたれり芳賀ちつともさわがす足の敷をかぎへて歸りいかにも兵少くではあるあひ候まじというて旗本に歸るこの芳賀はもと祐筆なりまが岐阜落城の日國清公勝

軍の書を芳賀に書せられし時麓に將机に倚ておはす芳賀其前ふ跪て在しに城中の焼たつる火
撞破の庫よ入て其香山嶽の崩るゝのどとく敵押寄るかど騒さしよ方賀が筆把て書し様少しも駭
く体なりしかば事よよせて試らるゝに器量大なりければ頻に用ひられて祿二千石玉はり後國
政と執しに度々直言を申諫め争ひてことよく治りけり

〔四百六十二〕 大坂冬陣に佐竹義宣今福口を攻る士大將薩井内膳先陣しての木を打破る佐竹
ふ付られし軍の目付安藤治右衛門屋代越中守先がけして安藤さそやかに物具せしを柵の木の
より鉄砲よて冑の上を打かす安藤折しきたれば頻ふ打のけて立上り得ず屋代父子伊藤右馬允
かけ來りいかよ安藤日比は年若しとて自慢せしよはたがへりといひて柵を打破る木村長門守重
成城より助け來り柵を隔てよらみ合たり木村は黒き平袖の羽織を着し柵に取付ておはれ鎗にて
た、き崩さばやといへども鉄砲の足輕ちり亂れて來らざりまに井上忠兵衛といふ者鉄砲持せ馳
來りければあの鳥毛の羽折着たる敵は物しよ打落さ候へど下知して柵の木よ鉄砲をもたせて濫
井が胸板を打通す木村ためめてかゝり寄手と追崩す平塚五郎兵衛濫井が屍をふみこねしと木村
か從者首をとらんとすれば平塚其ひねたる首何よせんといらて敵を追たつる義宣使者と上杉景
勝に遣はして加勢と乞れしかば杉原常陸横合に兵を出す杉原は大坂よ師を出す時吾物具以外の
ふるくて日本國の弓取は笑はるべしとて猿樂の半臂と用意せしが其日物具の上に着て塵の緒と

腰に結びてさげ七百計をひきめて川の中の洲に進みしかども水深かりしかを玉藥と惜ますこみ
かへく城兵を打しらす軍兵を下知するに進退思ひのまゝなり杉原が士卒を下知する有様を
諸將の陣なりを續めて見物す譬へば馴たる雀の子と呼に似たりといひあへり 東照宮遙に杉原
が出立を御覽じ上杉が家は古風なるゆゑ鐵直垂と着たるなるべしと仰有しは半臂を造く御覽有
ての事あり其後上杉家の士大將よ御威狀と玉はる杉原御前にて謹で上を包みたるよとき讀終
り始の如く包み本多正信のかたを見やりて感じ仰候詞殊更よ忝く覺候景勝武功と賞せさせ
給ふゆゑよ倍臣までかゝる仰を承る事諱信弓箭の遺風と天下よあぐる所よ候といひて退出した
りけり

〔四百六十三〕 志貴野にて上杉景勝先陣柵をやふり井上五郎左衛門を始として敵百計打取大和
川まで攻入る時景勝直江を呼て城兵援來るべま先陣はいかよと問直江先陣は士卒少く候へども
安田上總介二陣は隅田大炊介長則よ定め候と申すいやく隅田を先陣にして二陣を安田よ録か
へよと下知せらる是敵の道なるべしかくて安田は先陣を二陣よくりかへられ口惜き事なりと齒
がみをなし隅田が軍兵わ安田よ踏て功名せんと勇み兩陣とも勇氣倍しけり廿六日 曙に隅田押
寄多切豊後守眞先かけて首を得北條清右衛門等も討死し遂に打勝て井上五郎左衛門を討取柵二
重破りたりけるを城中より大軍我先にとりせ向ひ大野修理治長木村主計頭宗重渡邊内藏助亂竹

田永翁等競ひかゝる隅田は百挺の鉄砲と一の水戸口に立固め打たてさせけれども城中よりの加勢黒に成て切てかゝるを半時計さへて戦ひ鉄砲の物主石坂新左衛門一足も引ず討れ終にたし立られぬ二陣の安田は兼てよりかたへに陣をおし出せし故隅田か士卒景勝の旗本前へ崩れける景勝三陣の士大将杉原常陸親憲金の輪抜の立物打たる肩を新金の鎧の馬印と取て大将の仰を隅田人敵兩方へわかれ候へと呼はりて馬しるしと打ふりて下知しければ隅田か兵忽ち兩方へわかれて引取り杉原敵をおもふ様に近々引受て前より立ならべたる鉄砲を雨の降おとく打かけまかば安田二町あまり脇にひかへたるか横あひに鎗を入る隅田も忽ち返り返し城兵を退崩す隅田は初に討負たると口惜くおもひて従者五人よて敵の中より紛れ入首二ツ取て歸る景勝進んで押詰んとみえしかば入世三四郎乗來り俄に城を攻ば死傷多からん後陣の堀尾山城守忠晴と入かばられよと仰候そといふ景勝聞もあへて弓射の先とあらうふ時一寸ましといふ事あり今朝よりはげまぐ軍きて取敷たる所を人に譲りて退く事や候とて少しも動かず丹羽長重景勝の陣に行てみれば景勝將机に依て城中をはたと睨み物具もせずして青竹と杖につき左右に軍兵三百計鎗と横たへ跪きて紺色に日の丸の旗吶の文字の旗二本に淺黄の扇の馬しるし押立しつかりかへりて長重を見ひきもせず長重も勇將なるが後に人に語りて景勝を譽られけり

〔四百六十四〕 東照宮志貫野よて功名せし景勝の士大将に御威狀を賜はりしに安田主總介は横

鎗を入れて城兵を打破りし功大なりといへども直江と不和なりし故に其功上に達せず御威狀玉らざりしかば其後人よ向て此度御威狀と拜受し給ひて目出度候上總一人は申立る人なくてさばかりの武功むなしくありて候されともおさし事ハ候はず是ほどの事武功は中達するまでもなし且殿の御爲に命を捨て軍仕候露ちりばかりも公方のためにする事に候はず是より後殿とこそ大事よかもし候へ公方の御威狀向條面目よ存べきやと語りしとぞ

〔四百六十五〕 大坂の事起りし時井伊掃部頭直孝を召て兄右近太夫直勝出陣代とぞ仰出されける

直孝は直政の二男にて母は松平周防守康親の従者の女なり直孝六ツに成し時母の方より直政に送りけると百姓の許に置れけるが十三の時民家に盗の入てさわぐを聞かけ出て暗夜の事なるに盗山へ登りけるを追かけて高股を切て落されけりかくて人あまた來りて盗を打殺しぬ直政も申せばよび寄て冬の事なるに北よ向たる座敷の雪の入る處に跪かせて置れたり雪ひさを降うつめともちつとも動かず直政悦んで呼入られ犬の子とあたへられたり十四の時直政病重くて死に及ぶ時其生さきやしるかりけん塵に甲を添てかたみよあたへらる直孝は上州にて一万石を賜はり大番頭と命ぜらる直政の長子父の跡を嗣といへども多病にて公事勤勞しがたしと入り

直孝まばらく仰に任せまじつ宿所に歸り彦根の長臣を集め仰はしかくなれども各我下知に従ふべしと陣代を勤むべしと申すは仰を固辭し申べしといへば皆いかでの下知に背くべきといふを聞て後仰に仕せて陣代仕候へしと申されける井伊の家に兵庫といへる物しの年老たる有しを直孝呼出し汝日比軍術に長せりと聞相傳ふべき事やあると問るゝに兵庫年老候て今日をしらざる休戦場に打出ざる事遺恨に候とて懐より一卷の書を取り出し大將たる人志と決断して狐疑なく下知あるべきかと問直孝聞て教はいかにも我思ふ處に他岐なく決断すべしと答へられければ兵庫臣が年比思慮せし處只是のみにて候兩端と持して兵の道行るべからず外に申べき言なしとて其書を焚けることぞ

元和元年の春直政の領國直孝相嗣るべき旨仰出さる安藤帶刀もて再三辭し申せども許されず十八石を分ちて直勝に三萬石直孝に十五萬石玉はりぬ其後五萬石増與へられ 臺徳院殿 大猷院殿五萬石ツ、まじ玉はり中將に任せられけり

〔四百六十六〕 越前忠直大坂に帥を出す時士大將本多伊豆守僧を集めて聯白しけり將机によりて聞居しが勇將麾下無二弱卒一といひしにかたへより高祖帳中有二張長一といふを聞く門出の目出度さよとて打出けり

〔四百六十七〕 大坂冬の軍に 東照宮は茶臼山 台徳院殿は岡山に陣所をうつし替らるゝ事あり

諸將も城近く陣を取る時若騒ぐならば城より驛て出る事わらん陣を整へしつまり候へと五の字の御使番乗めぐりて仰と傳へし處に井伊直孝陣所と替ると鉄炮と押ならべ城中に打かけ開の聲とわけ只今城に攻入ん体なりしかば 台徳院殿直孝兄が陣代となり人そばへしけるよと怒らせ給ひ本多正信を 東照宮の陣に使を命せられけり御前に参り未詞に出さる處に直孝の父の子なりけふ陣所を換る時味方を競はせんとして鉄砲をうたせしよと仰られければ正信承りかくまで思召の同じきと申もわやしきはどに候直孝がふるまひ感じ思し召参りて其由を申せと仰候ひきと申て出にけり

〔四百六十八〕 大坂にて城兵千波と焼ける時後藤又兵衛備前勢必つくべし若き人々待伏して功名あれといひければ後藤が詞たがはじとて待伏しける所に敵つけ來らず後藤が功名たてと嘲りけり後藤積りも時らはたがふ事あるもの也備前勢付ざるは花房助兵衛をたかがらへて居るならんといふ

按るに此時備前は池田左衛門督領せさせ給ひたれば花房が事と司るべきにわらず若や花房もて付給ひしかそのいはれしらす

此時戸川肥後守達安を始として畑まざれにつけんといひしに花房聞て城中に後藤といふ功者あり必兵と伏置たるべしと止めて付さけり畑消て見れば花房が云しごとく果して故待かけ居

たり其後和平に及で肥後守が弟彌左衛門後藤に對面し様々の物語する時千波の事と云出し備前勢の付ざるは如何にと問に兩人のばかりし事更にたがはざりければ人々聞傳て稱しけり花房助兵衛職之は秀吉の心に忤ふ事ありて佐竹が許に流され居けるに東照宮御心を付られ花房の子を武州長樂山本門寺の上人に預け置しを後に榊原康政養ひて飛騨守といふ助兵衛老衰席上にも人を扶けらるゝほどなりしに東照宮の仰にて大坂の軍にも従ひたり乗物にて攻口に向ひ軍急ならむ吾乗物を敵に向てすてよ爰々墓と思ひて出たりとぞ云ける東照宮御打廻りの時道のかたへに乗物を置其中に隠居したりしを戸川肥後守かくと申しかば花房大事の時とれもひ武を好む事老ぬれども志はかどろへす誠に大丈夫なりと仰られけり

〔更増〕片桐且元は誠忠の士よしして如何かして大坂は良き軍師を得んと種々心を碎き終に眞田幸村が關ヶ原合戦の後浪人して紀州九度山に隠れ居ることを思ひ出でたれば九度山近くに行き其身は扣へ先づ富田采女を使者とし幸村が館に趣かしひ富田は早速に支度と整へ到りて幸村に對面し片桐が使者の旨云々と申ければ幸村片桐殿には何用ありて某々招きけるや采女答へて此度且元某を使者として貴殿へ申し送るやうは貴殿には先年昌幸殿と俱々故大岡の高恩を厚く思ひ遣れ専ら秀頼公の御爲めを心に掛けて往年關ヶ原の一戦より身の辛苦をも厭はず二君に仕へざるの節義を全ふなし斯る山間に整居せられし段實に天も感動をす計りのことに候へを斯る忠

臣を空しくせず願くは大坂に來りて大元帥となり偉功を奏し給へるやう致し度とのことなりと辯舌滔々として述べければ幸村は大に笑ひ借ても片桐殿には人の氣を知り給はざることを哉某上田開城の後の早世の念と絶ち寧ろ身を保つるの策を案じ見らるゝ如く農事を勵み鹿衣にて日を送り唯だ開日月に觀樂を盡し居ることなれを何とて再び軍三昧のことに從事致すべきや此事好きなに反命中されよと富田が再び物言んとするとも聞き入れず幸村は袖を拂ふて其儘奥にぞ入るにける左れば富田は幸村が返答の意外なりしを大に怒り立歸りて此由逐一に且元へ語りければ且元之を聞き嗚呼吾れ過てり實に左様にてありつらめと云ひたる儘外に仔細をも語らざれば富田は最と不審に思へども問ふも流石にて扣へたり斯くて且元は其夜徒者とも召連ず自身九度山より立越る案内者に連れられて山又山を分け登り東か西かを見しうちに十四五歳ある小童髪と亂し徒既にて風と傍へ寄り如何に爰へ來られしは片桐東市正且元殿にては在まざるやと聲掛られて且元は不審なし道は怪しむらぬ小童なる我れ今爰へ來ることは誰とて是を知るべきやうなし汝幼稚の身を以て此山路をも厭はず剩へ夜に紛れ我れに尾さ來るは是れ曲者にぞありつらめ其分は尤差置き難し覺悟となせと云ふまゝに刀の柄に手と掛てアハヤ抜き放さんとなしけるよ小童は少しも憚るゝ色なく否々小童は左様の者にはあらざるなり我れこそは眞田左衛門佐幸村が一子大助にて候なり父幸村兒に申聞け候え今日且元殿の使者を返せしに就きては今夜且元殿必ら

す尋ね來ることあるべし然らば汝道に出迎ひ随分心付け伴ひ來るべしとのことに付先刻より此處に待受居りし所案に違はず君の來られしに因り御姓名と呼び候なりと外鹿の鼻きにも似げなき語遣ひの鋭敏なるに且元は流石名將の兒の奥ゆかしと暫し感涙を流し且は幸村が鹿略ならざる心底に驚きつゝ遂に大助に伴はれ其が館へと入りにつける幸村は且元の入來るを見て禮と厚うし奥の上座に請待なし纏て其座に立出で互の口儀も最悉々しく稍々ありて且元言葉を更め今日富田采女と以て云々の儀申入候所餘り情なき取合は如何と問ひけるに幸村の答へに這り關東への憚あるを以て白晝大坂の使者に善く取合ふこと思ひも寄らず然しながら貴殿我が心を悟り夜陰に紛れ一人來り給はんを察して斯くはなせりとありけるに且元も亦同想にて先づ陽に使者を差越したるを關東の隠を探偵に幸村大坂に従はざるを示し置き其後一人潜行して萬々の譚り致さんと計りしなりと名將れ計る所期せずして符節と合せり

〔四百六十九〕 大坂にて 台徳院殿諸將の攻口を御打巡りありて有馬豊氏が陣所にて井様に上らせ給ふ時御馬馳を城中より見て火矢大銃を打かくる井樓と下させ給へと申せども聞ゆ体にてまします所に水野日向守参りて物見と巡見とは別に子細の候陣々悉く御覽あるべければ一所にのみましますべき様なし志貫野と御巡り然るべしと申せば 則井樓をかりさせ給ひけり

〔四百七十〕 大坂にて 東照宮志貫野を御打巡りあり上杉の攻口にかゝらせ給ふ時鉄砲をなら

べ立たるが一同に城に向て打かけたり大將巡見の時の故實なりといへり景勝攻口の陣所道筋に砂を盛り水と酒ぎきらびやかに掃除して景勝直江只一人打具して平伏して御目見申たりければ 東照宮いかにみれ骨折たるがと御詞をかけられしに童部いさかひにて骨折候事もなき旨答へ申されけるとぞ

〔四百七十一〕 真田が丸と攻る時小田切所左衛門

一説に嘉兵衛といふ後齋伊豆といひ又道仁といひ武者執行して名高し長久手にて直はたのはたらきわり松川の軍にも武功あり加賀利常に仕へて大坂の軍にも従へり

城きりに近く寄たるが鉄砲にあたりたり其玉をとり出し脇に並びたる平野彌次右衛門に見せて打笑ひ物語する体平生のおとし又玉一ツ額に中るを取出したれば血流る、に胃は大事の物に此胃は信玄公の許に有しありといひて少しもひるみたる色なかりしとなり平野も小田切と相ならびたる武者ふりと敵味方ともに舉わへり平野が従者五右衛門といふ者矢面にたち鉄砲頻に打かけしかばかすり手十八まで負たる大剛のふるまひと城中より高聲に稱美して姓名を承らんといふ平野 則五右衛門に吾氏と譲りわたへしかば五右衛門大音あげて平野彌次右衛門が下人五右衛門といふ者是まで付たる褒美に只今氏を譲られて平野五右衛門と申なりと名乗けるとぞ

〔四百七十二〕 十二月四日雪深く真田が丸へ加賀の陣も井伊直孝も攻寄ける事軍令を背きたれ

ば如何すべからん 臺徳院殿仰有しかば先伺奉り然るべからんとて本多正信 東照宮の御陣に
参りけり 東照宮いかに今朝は將軍にも悦びに有べきよ掃部頭堀原へ押詰め敵に威を示して味
方を勇め立たるよと仰有しかば急ぎかへりてかくと申す頼て御本陣に御出あり其道筋掃部頭陣
を打過させ給へば直孝出向ひたるにらみて進らせ玉ひぬ孕石備前にかくと告れば孕石問もあ
へず其ごとき物お心得ざる大將お此方よりもさつとよらみかへすが然るべく候といふ程なくか
へらせ給ふ時直孝出向ひければ今朝の軍賞譽の御詞有て打過させ給ふを孕石問て合点のさたら
んには其等の事なりといひけり

はじめ陣を移しかふる時井伊家鐵砲をうたせし事ありし時本多正信申せし事と相同じ一事と
二事を云傳へたるなるべし

〔四百七十三〕 大坂冬の陣に堀右衛門重之阿波蜂須賀の陣所に夜討せんとばかり

堀右衛門は遠江横須賀の人なり加藤明嘉に奉公して祿千石足輕と預りしに關ヶ原の時嘉明堀
に下知してそびき來れといはれしに堀行て見るに諸將みな陣々と整てひかへ居たり君命と
はいへども敵に後と見せん事口惜く思ひ種ヶ島の鉄砲をならべ散々に打立て歸りければ嘉明
汝は勇のみ有て進退の理を辨へず大將と成て士卒と下知する事は思ひもよらず汝を遣したる
は我過なりといはれければ堀敵弱ければ詮方なく無理なる答と蒙り候とて夫より怨とふく

み伊豫を出奔しける時其家の中に 遂不_レ留_二江_一南野水_二高飛_一天地一閑_レ鷗といふ二句を大文

字よ書たり嘉明怒て堀が行先の奉公をかまはれしかば堀所々よて落ぶれ後には京の妙心寺大
竜和尚の許に居て僧となり名を鉄牛といふけさの上に刀を横たへ鉢を招く人或はにくみ或は
誹りけるが遂よ秀頼よまねかれたり

年十六才已上五十已下の士八十人をすぐり出す從者各一人と定めたり堀と御宿越前と門口よ
鎗を入まじへて一人づゝしづかに出しけるが鎗と取とて從者をよびさわがまければ堀怒りて刀
にてせよ何鎗とる事やある首を取て敵の旗を始として武器を奪ひとれと下知しとて押寄たり
蜂須賀至鎮の士大將中村右近白小袖を着肩ばかり着て馳合せけるを木村喜右衛門突伏し稲田
修理透聞なく走り來り木村と突合寄手斬集り防ぎ戦ふ米田監物は池田左衛門督の陣所を押へ居
しがこれもかけ來りためひて攻入しかども寄手おひくかけ集りしかば引返す生駒又右衛門
首とりて大野主馬か許に持せやり進んで中村が倒れたると見て首をとらんとする所を修理が
子九郎兵衛十五才なりしが生駒と討取たり

此夜討の前蜂須賀の士大將堀口内藏助今夜々討入べしといふ若士ともいひかして見定めた
るやとさやく所に中村右近もちとやきて振廻んとて内藏助をかたへに呼入何とて夜討有べ
とやと問ふ内藏助さればとよ城の橋残らず焼落したるに本町口の橋ばかり焼ざるは夜討すべ

き爲なり今日狭間より外をのり見る体見ゆるゆゑ夜討入べしと答ふ皆さあらんといふ隣の陣小屋稲田修理に餅とふるまはんといひ遣す修理其まゝ来る道はまはるなれば七八十間もあるべきにとく来られ候といへば修理間のしきりの板ある所にわらとこみおかぬれをばつして来りたりと答ふ果して其夜半夜討入たり右近眞先に出る修理おしつゝさ出たり右近は胃ばかり着たるに従者物具を持来りて着せたるともいへり右近刀をふり廻し敵の鎧を切拂ふ修理大音あげて右近と、もにはたらき右近は鎧七八本にて突伏たりといふ説もあり右近が子若狭の阿波の留守に残し置れしに其宵右近修理に向ひて若狭此度戰場より出ざる事を口惜くれもひ度々来るべき旨いひふこせしを軍法を破る罪をおそれ呼よせずと語る修理尤にこそあれいひやりてとく来られよと告べしといふそこにてとく若狭を陣屋近きあたりに来りてかくれ居一がばよび入て其夜手に逢たり右近父は次郎左衛門とて信長の扨從阿波守につけられて祿千石士七十人添られけるとぞ

塙のゐて支度して夜討の大將塙團右衛門と書たる木札を道々にまかせけり和平の後今福口の南に長二尺あまりの木に塙團右衛門と書て建たりまを人々あやしみに塙加藤嘉明我とにくみさがし出して誅せんといはれしと聞ゆる討手待といへり塙が好ある面々あまた訊来りけるに永野勝成の士黒川三郎右衛門尋来りしかば過し昔の交りをおもひ出して来られしころ悦びなれ

林半右衛門は日比親しみ深かりきいかにして一度の音づれもせぬよやいふかたさといひければ黒川聞て林の池田の家にて奉公して今天満橋の陣所より有かくと尋て見んとて歸しが林にしかくといへば林さればよ我塙と相約せしはたとへ大國を領すも手づから鎧を提おもふまゝに軍せずは男子よあらじといひつるゝ塙夜討せし時橋の上に將机は腰かけ馬は返し押立障を取たりと聞年四十八老たりといふべきもあらずむかし相約せし詞よたがひたれば使をも遣さりきといふ黒川又塙か方に行かくと語りければ塙林がいふこそ理なれされども我嘉明に士卒を下知せんことおもひもよらずと罵られし事口惜く一度塙をとり軍と下知して嘉明にしらせばやと思ひて其夜も手づから鎧を横たへ突てかゝり度おもひしかどもさはせざりき既に志を遂たれば重ねて軍のあらん時に鎧刀の折るほど戦はんといひまどかや

〔四百七十四〕 塙が討死の木村喜左衛門畑角大夫田屋右馬助牧野湖太四人鎧を合せしは田屋は薙なり田屋をば鎧といふべからずといひしに御宿越前聞て鎧も薙も柄は櫛の木よても同じ事の形の少たがひたる故に名も同じからねども薙刀は短ければ敵の近き事鎧より一等近し鎧といはんは何の子細の有べきと秀頼に申て四人とも鎧を合せたる感状を與へられたり〔四百七十五〕 大野主馬が組の士此夜討に功名有木村長門守を頼て感状を賜へらん事と申す木村聞て上にもよく聞し召たれば感状においては定めて下し賜はるべし但し感状を拜領しに誰よ

披鎧せられんや一本鎗の士あらば又他國の主君に奉公せん時の眉目にすべし大野兄弟は大坂の長臣たる身君と存心^{うんしん}を共^{とも}すべき人の何のためか感状をよといひしに主馬^{しゅば}恥て詞^{ことば}なかりけり〔四百七十六〕東照宮後稻田に御感状を賜ふ太平の後御旗本の人^{ひと}稻田に逢て大阪夜討の時事語られよといひしに九郎兵衛聞て十五の年の事隔りてみな忘れたりとて強て問せも一言もいはず公方より賜りたる感状の詞をとへども存寄^{ぞんきよ}ざる賞^{しょう}得深く^{とく}さめ置再びみたる事なければこれ^{これ}も忘れたりとて語らざりしとなり

〔四百七十七〕細川三齋病を養ふとて吉田に寓居せられける時渡邊^{わたべ}蘆花^{あしな}勸兵衛^{くわんべい}訪て物がたりする時大坂まで塙が夜討せし時蜂須賀の士に感状と玉^{たま}なりたるの如何なるもるにや夜討を虚^むを見て討つ事古今同じ虚有て討れしに賞有^{しょう}はいぶのしくこそといふ三齋聞て夏又事有べきに遠く慮^{あやま}らせ給ひて諸將の軍兵をす、めりげまされんとの故なるべきにやといはれけり

〔四百七十八〕大坂和平破れて後秀頼軍評定の時第一坐に長曾我部次小真田其次に毛利豊前守列坐せり秀頼大野修理を以て今度の合戦各所存を問れけり真田先長曾我部に申され候へど辭し申ければ長曾我部聞て真田殿ならでかゝる圖を申出さるべき人有どもおもはれじまづ中され候へと答へたり真田さらば申て見ん去年の軍は城固く兵糧も又多かりき日敷を過は必西國の内^{うち}に心とよする人もあるべきか寄手の中^{なかつ}心替^{こころかへ}も有べしと何れも存寄^{ぞんきよ}たる處にたもひの外

和平よ及で惣堀はうめられぬ今度は守り遂べき道有べしとも存せず只打出て軍する程ならば君御出馬候ひて伏見の城を攻落し即御上洛候て洛外をば焼はらひ宇治勢田の橋と引落し所々の要害をあたしく守りまづ洛中の政と御沙汰有べし其後勢ひよよりて合戦の謀候べし祝は申納めぬ若御運盡させおひしまし候とも御上洛にて一度天下の主を號し奉り洛中の御政務を執行はれんにおいて後代の名聞是には過候まじといひしに長曾我部を始としてみな然るべし同心しけるに修理秀頼公の御旗を出されん事かろくしきに似たりとて肯ぬ色を見て修理が母の人質に出し置ぬぬかなる所存にやと人々疑ひて議決せずしてやみけり、る所に修理が母の人質に出し置たるも返し玉はりぬすで又關東の人敷伏見に着を聞ぬしかば秀頼又諸大將を集めて再び軍の評定よ及びけるに長曾我部また最前のごとく真田にゆづりければ真田駿河大御所の軍だて常よはやりたると承り候に少しも違はず覺候其故は昨今伏見へ着陣して軍兵の疲をも休めずはや茶臼山にかし寄べきと申沙汰のはやり過たるに候はずや伏見より大和路とおさむ行程十三里なり彌疲れ候べし明夜は軍兵いかに存るとも胃を枕として一ねふりせぬ事や候べき一夜討すべき圖よ中りたると存候左衛門佐罷向て一舉小勝敗を決すべしと申ければ後藤又兵衛いかに此謀然るべら存候されども真田殿をもて夜討の大將とせんに萬よひとつも討死あらん時人々力を失ひ候なん今度國々の諸浪人馳集る事偏よ真田殿一人を目あてに仕候夜討を

かく申す又兵衛退向ひ候はんといへば、堀田とかくわれ退向ふべしといふ後藤は有無に後日の合戦大事なれば、真田殿残りともまられよと争論して終に一決せでやみけるとなり

〔四百七十九〕大坂夏の軍に水野日向守勝成、大和口先陣の大將と命ぜらる堀丹後守直寄松倉豊後守重政、大和口に向ふ五月五日夜ふけて勝成敵よせ来ると見にて松明多く見ゆ懈るべらざるよしを諸將にいひ遣はす丹後守出でて日向守ハ物になれたると聞しに功者ともふもはれず寄來る敵何す松明多くともさんや敵よはあらじといふ處、日向守又使を以て松明みを消たり敵よはあらじと告知せられたれば丹後守さては敵なり何と、乃もなく火をともしつれたるが功者ありて消させたるをらんといはれしが果して後藤又兵衛ありけり

〔四百八十〕松倉豊後守重政、後藤又兵衛が陣を切崩す松倉が士山本權兵衛義安十八歳よて鎧を合せ首をりりけるひまに鎧を敵よとられたり其鎧じるし敵の中に見えしのは今は是までなり討死せんと云すて、敵の中へ入鎧と取返し其鎧にて又敵を突伏せ首と取て歸りけり

〔四百八十一〕大坂冬の軍に池田左衛門督の使番毛利孫左衛門先陣に行し、村山越中毛利に向ひ我今朝より敵近く居てつかれたり指物を散々鐵砲ふ打破られぬといふ毛利我五百人の士の中より撰ではると許されたり汝ふ証かされんや汝竹把の外に出ずと覺ゆ指物の先のみさけたるは其證なりといへば村山答ふる詞なかりけり

〔四百八十二〕穂原助右衛門は井伊家の士大將にて軍奉行あり大坂夏の軍に五月六日に道明寺に向て先陣たり井伊家の士大將川手才水成次は去年の冬より直孝を怨むる故有て討死せんと思ひ定めたり出たちける日父子最後の盃したりとかや金の嚮口の指物にて眞先にかけ出る山口伊豆守重信

山口修理亮重政嫡子伊豆守重信二男長次郎弘澄は御勘氣を蒙り塾居の身ながら井伊が陣をかりて忍びて出たり
遠山其次郎鷲坂彌五郎満座七郎右衛門もおとらじとさきかけす

一説に内藤新十郎佐久間藏人山口左馬介三百計面もふらず切か、り井伊が先陣を押し崩す此時井伊家の剛の者ははれなる鎧を合する士ありといへり山口伊豆守は川崎和泉守を討取たり木村重成は田の中なる小高き處にひかへて下知しけるを山口目よのけ畔をつたひよりて沼の有けるにふみ入て畑の上なる重成と鎧と合さ山口愛まで討死しけるといへり

木村長門守重成が一陣鎧の鎧を揃へて待かけたれば川手を突伏たり穂原は提の上にて折敷て居たるが川手が倒る、時腰にさしたる金の塵のひらめくと見つと立わがりか、り候へと下知する詞の下より八田金十郎走り出眞先あけたる味方の斬伏られたる屍をふみ越て大音あげ一番鎧と名乗鎧を入れるを敵三十八餘り取巻たるにわいくと呼はり面もふらずた、きわひたるか故巻れ

廿一ヶ所甲冑と笑さるれ既よ討死をべき所ふ戸塚左太夫を始として冑のしころをかたむけ黒じ
むりを踏たて、井伊が軍兵一同にどつと押かゝり木村が陣を切崩す菴原は十文字の鎗をよこた
へ進んで木村と目あけて立向へり木村菴原を二鎗まで突たりしに菴原鎗のしは首へ握り珠敵
と手に懸たるが念佛をどなへて野猪のあれたるが如く木村が鎗の下に走り入て突伏たり安藤長
三郎かけ来りて其首給はらんやといふ菴原聞て大坂落城日あらし敵の大將の首とる事易からじ
わたゆるぞといへば安藤木村が首と取菴原おろかけたる武者と討取て其首に母衣絹添て奉る事
軍法なり

大御所の賞賜よそなへんよ母衣絹につゝまれ候へとて母衣絹を安藤に與へしかば菴原が從者母
衣の出もしたる白熊金のぬち竹は菴原が許にどゞめけり

一説に陣所に馬盗あるべしとかねて警しに安藤長三郎不敵者よて用心もせず馬を盗まれ
翌日の軍に井伊家の軍兵木村と戦ひける時かくれたり敵敗北よ及びて長三郎走り付たるを助
右衛門見ておれに腰かけたるは能敵なり討取といへば長三郎動くずして死人の如くなる者討
て功名にあらずと答ふ菴原しゆれば長三郎あゆみより詞をかくれども只首とれとのみいひて
立あがらず長三郎 則突伏て首と取是木村重成なり長三郎を賞して五百石あたへらる此軍に
千石の賞をあたへらる、者わりければ長三郎憤りて立去けり將の首を取られとも其法をし

らざる故賞少しと直孝語られしとてかや長三郎は安藤帶刀の從者也又後井伊の家に歸り仕へ
て千石の祿をあたへられたり

川手蒲座山口は軍の場は死し遠山は敵の首を取て菴原よ見するとして立ながら死を懸坂と小溝の
中に倒れしが口の中に暖りありて百姓の家にかき入たりしが息出たすうりぬれ敵は逢
ふ事早かりしるども軍奉行の菴原が下知なき以前ゆゑにぬけがけとし八田を一番鎗よ定められ
東照宮御威狀を玉はりけり

金十郎は一番鎗を合するのみならず山口左馬介山口が弓頭飯塚太郎左衛門二人をも討取たり
といへり御威狀に黄金御馬を添て下さるもいへり

木村が首を御前に出すに髪よたきしめし奇南香の薫せしかと御威あり木村が冑は四方白にて鐵
形の立物打たり

安藤と伏見に召青江の御脇差と玉はる又一説よ 臺徳院殿長三郎よ黄金二十枚時服三ツ玉は
るきいへり
菴原が子の主税助北る敵と追かけて組討しけるに助右衛門へせよりていかに主税ころろしつか
にせよ爰にて見物するといひけり主税是力を得脇差を抜く刺通しよわる處よ從者はしり來り
遂に其首を取菴地修理西郷伊藤差をみて 東照宮に主税が幼年の武功を稱し申けり後に人の子

の敵にくみたるに援けざりしハ如何にと問けるに替原誰も子はかはゆきものにて候とのみ答へけり

直孝木村を軍する時中よ堤あり又藤堂高虎も同じく敵に向ふ處に久具因幡守高安筑後使ともて敵と味力の中の堤に候是をどらば味方勝申へしとく御旗本を進め給ふべしと申す 東照宮怒らせ給ひそれほどの事思慮なくて我先陣の大將つとまらるべきや敵堤とどらむすて、敵にあたへてこそ勝べけれ高虎とも覺えぬもの哉と仰有し處よ小栗又市へせ來り直孝只今敵にか、り堤の候に此堤をどらば勝んといさみ候と申 東照宮さぞあらん必定勝なりと仰られけり又矢尾にて藤堂が先陣敵に向ふ渡邊勘兵衛敵とせり合し時高虎馬を御旗本に乘來り御旗を寄られよと申もあへぬに横田勘右衛門馬上より大音あげ御旗を寄られよと申は何者ぞあれ追ちらし候へと罵りければ高虎馬を乗歸る是も激勵の術なるべし

東照宮 畠山入菴を召て關東の武者共軍になれて物いふ詞のおもしろきと仰有しかば入菴只今の一言横田ならでこそ感じ申けり一説に 東照宮の御旗本へ藤堂高虎乘來りて敵の大軍押出し候と申を横田甚右衛門聞もあへそ何の御下知を待とやあるとく切崩して討取候へと云 東照宮無禮なりと怒らせ給ひ高虎にはよく見切て味方よ手負討死なきやうよはかり候へと仰らる、を甚右衛門大音あげて敵を殺すに味方に手負死人なき事やあるとく切崩され候へと罵

る 東照宮横田推參なりと以の外に怒らせ給ふ高虎は我陣に乗歸る和泉は見ぬかき仰の後横田と御側近く召をければ人々いかにと手に汗を握る處に横田が耳よ御口を寄られさ、やのせ給ひてけり其後いかに仰けるぞと横田に問人ありしに和泉よ汝再三罵りたるハ一段然るべけれども一戦をこげよとは近き御慮有て仰られがたさとの事にてありしよと語りけるとかや

〔四百八十二〕 五月六日井伊家の十脇五右衛門今日の合戦は跡より段々よかし詰來れば大かたの事にては功名遂がたし若き人々力のかぎりばたらかれ候へといふ處に直孝の近習の十三彌といふ若年の士首二ツとりて脇よ見する脇もまた二ツとりけり翌七日三彌又首二ツとりて脇に見すれば脇もまた二ツとりたり後に老功の武名の聞は有人々あつたりたる處にて三彌何れも老功の人とて崇め其身も泰なる体をふるまひる、事ぞかし大坂の軍よ事替りたるも候はず老功とて崇め候ハ何の故やといふと脇聞て此度汝の功名のおとくなる事度かさなりたる者ぞといへば三彌さては子細もなし吾功名のおとさきはいと易き事なりといひけるぞや

〔四百八十四〕 増田兵太夫は長盛の子なり大坂冬の軍に城中よわると聞ば涙流し寄手の攻むみたる人々へば大によろこびけるを 東照宮聞し召誠よ長盛が子なりけり豊臣家の思を忘れざる志 尤なりと感じ仰られ夏の軍に御敵を蒙り城中に入り秀頼より玉りたる赤地の錦の

羽織を着若江の軍收軍の中に獨ふみ止り澤田但馬が從者と引組でくみきたる處よ藤堂高虎の士母衣の者鎌野平三郎はしりより討取其首と得たれども名をしらず刀を分捕したるが秀吉より長盛に玉はりたりし、の故兵太夫と申しられしとぞ

〔四百八十五〕 木村が一陣敗北しける中に青木七右衛門黒母衣かけ長屋平太夫は白母衣かけて直孝の兵の中にまぎれ入し、井伊家の赤色の物具ふたがひたればからの取 東照宮の御前に引まわる長屋は今福にて一番鎗を合せ青木はけふ西郡にて一番首を取たりと名乗申す其体ははれ剛の者よと見ゆしかば二人共たすけられ美濃にてかのく五百石の祿玉はりけり

井伊家のわかき物具は直政の時よりはじまれり甲斐の武田家の士大將山縣三郎兵衛昌景が一陣の軍兵皆一色に赤かりしと 東照宮御覽してこのませ給ひ直政に仰られて甲冑をはじめ旗指物鞍轡にいたるまでみち一色よ赤いろなり夫より後もうくのおとくなりしゆえ井伊の家よ新奉公する士われれば武具奉行軍令と見せて物具みな新赤色にして百石よ二十兩足具びつよ納め奉行の士受取て城中の庫に入置其價は祿の内より返しけり此故に井伊家の武備かぐることなし若去て他國にゆく士あれば奉行の士武具を返しあたへけるとなり井伊家の軍令とて赤いろの武具の事しるせる書も今世に傳はりけり

〔四百八十六〕 藤堂高虎の士大將渡邊勘兵衛了は

可は若き時阿閉淡路守に奉公し十七歳の時一日に首六ッ取たり阿閉の家にて剛の者といひる、士十幅一丈の鶴の丸を繪に書たる母衣をかくる者六七人有し了に此母衣を許されけり後中村一氏も奉公せしが小田原の北條を攻らる、時山中の城を俄に攻落すべき様と見て一氏と馳めて頼て打破り成合平左衛門に一氏の馬じるしを本丸のすみ矢倉にかし立させ中村式部少輔一番乗と叫はりけり秀吉錦の羽織を一氏に與へられしかば我けふの功名は汝故なりとて羽織了にあたへられし固く辭しければ羽織の片袖をあたへんといはれしをるれをも辭しければ蓮生院鹿毛といふ馬を了にわたへらる其後増田長盛に奉公せしが關ヶ原の時は大和の郡山の城も有開ヶ原の軍破れて郡山の城を受取んと筒井伊賀守打向ふ城代橋與兵衛徳順等了と共に城を守るに了の三の郭の持口とす大將あければ盜賊商家よ入て女わらべをなやます了五白計の兵を打連うち巡りて 盜を切殺し追ちらす或後盜賊城外の町家に火をかけんことせしを了出てあまざす討取しかをこれより 盜來らず敵おし寄ると聞えしるへ城外の商家を焼拂はんといふ了自焼は時ありはやまりて焼ば商賈騒ぎてうろたへんも不便なりとて止けり城兵雜人と合せて三千餘りなりしに士三十人下部八百計かけ落しけれども了は從たる者と一人も逃出す又城中の士百餘人金銀をわたへずは出奔せんといふ了大に怒りて城中の藏に有金銀の皆殿の物なり殿の仰なくていかでか出すべき且此城を墓所と思ひ定めたる身の金銀何

にかはせん出奔せんとの用意ならん錢一文もわかつべからずかゝる者に兵糧米を費さんより
 とく出奔せよと罵りて三の郭より妻子を木丸へ入れれば備巻儀右衛門もつゝいてしかしたり
 藤堂高虎本多正純郡山におし寄て此時長盛は高野にて殺されしなどいひふらす大坂よりはせ
 来る士卒を合せて九千餘人ありしを了下知して持口を配り日夜打巡りて怠を戒む凡將な
 くてたて籠るものは各相疑てこゝろくに成こと常なるに了が下知よりしづまりて城
 に將あるが如し長盛高田遠江山川半兵衛に書簡を持せ城庫の物を添て目録をしるし藤堂本
 多又渡し候へと命せられしをばさらばとて大手搦手の門の鑰と高田寄手の士にあたふか、れ
 ば奉行ともて門を守らせ本丸までも入んと騒がしかりければ了使とたて城中より守るべき
 門々を寄手より人を付られ候事はひが事よて候といへせ了下知して手あらく門の鑰と奪ひ返
 してけり城をわたせし時外郭の柳町より奈良の方大安寺をさしてしづかに兵とくり出すよ
 了が法令の嚴正なりしによりて一人も騒ぎし者なかりけるとぞ了は跡に残り鑰を取返しける
 時の寄手の人々に向ひさきのしわざ無禮に似て候へども武士の義理と申物に候若城中の庫の
 物一ツも失ひなん時は増出が士どもは盜として出奔したりと申されん事口惜く候て計ひきと
 いひけれども答ふる人なければ鑰了投出し返して大門を啓かせ殿して城を出大安寺よ到
 りそれよりみな人々分れ去けり長盛高野にて了が下知せし始終の有様を聞九千の軍兵馬も凡

八百匹もわらんによく下知したりとて深く悦び感状を了にあたへしと藤堂家よ仕へて祿二

萬石子の長兵衛にも三千石あたへられしとぞ

新に奉公しけれども世も高き者なれば高虎寵せらるゝ事大方ならず諸臣ども大に嫉恨とあ
 へり大坂五月六日の軍に了は先陣の中の手なり六日の朝道明寺よ軍を進めんやいかふと評定
 いまだ決せず了矢尾平野は兵を下知すべき地利よあらず候見て來らんとて猩々緋の羽織を着鹿
 毛なる馬に乗千塚より五六町もち出けるよ朝の物見堺與右衛門に逢いかにと問ば後藤又兵衛
 とればしくて軍と出しはや水野日向守と鐵炮を打合候といふ了聞て堺に士一人添しとく旗と寄
 られよと云遣し頼て片山まで兼行西の方をみれば八尾より若江まで大坂の軍おしつゝきしぐろ
 うで東方の先陣に目をかけ馬の鼻を揃へて進み來る了さてこゝろといひ馬を引返し道明寺をさし
 て進む味方を押止る藤堂仁右衛門何故かと問了あれを見られよ手に取ばとに近き敵を打捨て道
 明寺ふゆくやうやあるといへば仁右衛門も尤なりと同心しけり高虎何とて進む味方を押止る
 やと母衣の者ともて下知せらる了頼て高虎の前に参りしかく也と申せば高虎如何せばやと思
 慮の氣色なり了何の手だての候べきかゝり來る敵に辭退する事や候相がゝりにして打破の外
 道なしといへばさらば仁右衛門よよと下知せらる了聞て此處泥にて足入り陣と備ふべき地
 なし敵わひいまだ四十町もや候はん横堤は是より十町計も有べし横堤まで細なはての道四筋み

老候南に向ひたる味方と西向と押直し横堤まで進んでよそとて陣と整へ一軍せんと二筋の道と
 ば下知し給へ南二筋の道を押行味方は勘兵衛下知して横堤にて押とめ列と正し南北一ツに合せ
 て候はんよは必定味方の勝なるべしと云て馬を止るしは四五町ばかり後にひかへさせ細道を乘行
 て藤堂仁右衛門桑名彌兵衛等にかくといへを北より進む藤堂新七同玄蕃等一騎がけに馬を乗出
 し我先にと西郡萱根とさして進みゆくを了見てさらなる南の味方をふし止ても何の用よかた、ん
 どくか、られ候へど云捨て了は山土阿部村よ向ひけり高虎の士大將我もくど八尾道を西よ地
 藏堂と見てかけ行しは了去年故有て高虎ふいとま給はり候へど云し事の有しに今朝より殿の前
 に出て勝敗の理已一人して計りしにくさよ渡邊にまざる武功と立んとて了が詞を耳も聞人さ
 るなり長曾我部盛親は矢尾の堤森ある處にす、む所に朝霧のまざれより物色のさだかならぬと
 も南の方より紺地の白きもちの紋付たる旗さ、せて敵か、り来れば堤の上狭ければ旗を後の卑
 き所へおろして立ると敵ハ北るといひて仁右衛門先がけして馬に鎧を合してかけ行しかば桑名
 乗ついで一陣の下知せられ候身に一騎がけはひが事なりといへを仁右衛門ふり願て渡邊が己
 一人武勇にほころが口惜さに討死せよというて馬と乗はなし鎧を横たへ大音あげてか、りし
 を盛親が兵鎗の鎧を揃へ堤にかりしきたるが盛親間遠あるに一人も立あがるべからずと下知し
 近よとなりける時一同よ立上りぬい、くと聲をかけ鎧をならべてた、きたてければ仁右衛門も

こにて討死しつゝいか、りける藤堂が軍兵とつと崩れ冑の緒とじめたる士六十三騎歩卒三百
 餘人討れて一支もなく敗北しけり了は山土よて向ふ敵を追崩し南を見れば先陣やぶれて旗を捨
 我先にと逃る處は横さまにかけ向ひ盛親がみだれ足と追返し仁右衛門等が討れし地をふみしき
 たり盛親は矢尾一町ばかりの西に橋を後よあて、ひのへ居たり了いよく勇み切てか、らばや
 どは思へども先よ首取たる者どもみな旗本に行て了が左右三十騎計に過ずか、る處に母衣の士
 山岡兵部已下七八騎はせ来りければ了願て押寄て盛親が陣よ切てか、る山岡兵部矢倉長藏二人
 は南の方にかかはなれどもふほど戦ひてはれなる討死をしたりけり了が兵少ければ少し引退て
 畑の高くひき、地を便に兵を集め盛親と互に間近く睨み合てひのへ居たる處に高虎使をもて何
 ゆるよ引退ざるやと七度まで下知せらるる了聞も入らず此一陣にて強敵を切崩し候旗をだよ押詰
 られば逃る敵を追たて大利あるべしと答ふ高虎また使をたて今朝死すべし所を通れ面目なくて
 退かざるやとて引返せど下知せらるる了聞もあへずか、る廣き軍場よて勝も負も所々にて憐々
 にわかれ候味方もの主軍の道をしらず下知するわざもなくまばらおけして敵に切崩され多く
 の味方を捨殺し旗をも棄て敗れ候を殿には忠と思召候哉心持がたしかく申渡邊は今朝より敵よ
 くらふれば五分一又は三分一の軍兵にて毎度うち勝八尾にて味方をたすけ横台に敵よ破り候渡
 邊なくば味方は泥よ追入れ一人も残らずみな打れ候べし淺間しき味方の物ぬしの有様候盛

親わづかの兵にてひかへ居るを討もらざるを殿の弓箭の取なるべしとく旗本を寄玉へ盛親をたや
 すう討取申さんとて彌退く色いなりし盛に直孝軍よ打勝赤旗おし立勇み進んで押来りしか
 ば盛親の旗本色のさけるを了見て時こそよけれとどつと切てか、り退たてたり久寶寺より城兵
 も足とみだして敗北するとあまざしと鐵炮を打かけて追つむれと盛親が旗竿も悉くうち折れ
 たり了は三百余人の首をとり平野まで進でとりかためけれバ道明寺口より敗北きて城中より引入
 る敵道とふさかれ詮方なくためらひ居しかば了大に悦び高虎の許に使をたて敗軍の敵敵萬の路
 路を立切て候軍兵とだに賜はらば疲れ果氣おくれしたる敵を殘らず打破り大坂の城をば藤堂一
 手の武勇にて攻落し申べし疾軍勢を寄玉へ平野とかたく守り敵を打破らん事掌の中にありと
 云けれども高虎更に用ひず使をたて何とて引返さるやと怒らる、のみなりしかば力なく平野
 ふ火とかけ軍を返しけりこれも平野の煙にて城中に引入る敵を妨ぐるの術なり此時高虎兵をす
 めば眞田も毛利も城中に歸り入る事を得まじきにど世にいひしとぞ直孝高虎の陣所へ行れし
 かば高虎對面まけん先陣にくれたる者の候て同姓にて候物主のまた討死し口惜く候と語られ
 ければ直孝我敵も勝て北るを追候時むしろの指物として軍兵と下知せし士大將の候ひしに強敵
 を切なびけ軍兵を下知せし有様あはれ大剛れ物ぬしにて候其人はいかよと問れしに高虎物もい
 はず其時了向と脱て進み出むしろの指物とし候男と此勘兵衛にて候天の冥加にて今日の武功

と井伊殿見届給はり候と大音に申せば高虎いよ〜いかり憎まれしほどに了終に藤堂の家を去
 て京都にかもむき睡庵と號し寛永年中までをがらへ居たりしとたり
 〔四百八十七〕 大坂の軍五月六日、井伊直孝打勝たりしかを 東照宮より横田甚右衛門 台徳
 院殿よりは佐久間將監を使に命せられ直孝が陣所に行佐久間先に歸りて直孝今日の軍よ打勝候
 へ共川手主水とはじめとして討死多く明日の分陣如何候んと申す 東照宮聞し召問ぬ体にて
 はします所に横田歸りて直孝大利を得て明日も勝たる勢に乗て殘る敵をあまざす討取べしと
 勇み申と申せば 東照宮さずあらんと悦ばせ給ふ時横田と、み寄こ、に一つ思慮あるべく候直
 孝が軍兵過半手負死人も多しいかに心はやり候とも明日の先陣はくり換られ候へ直孝 畏り候
 はすども強て仰出され候へと申せば 東照宮我も左思ひつる事よとて加賀利信本多忠朝を先陣
 に命せられけり陣中の使者の心得有べき事にてころ

〔四百八十八〕 片桐丹後守は越前忠直に仕へしが大坂夏の陣よ勘氣を蒙る事のありしかば先陣
 に忍行てひかへ居たると本多伊豆守見て片桐は必討死すべしわはれ敵され候へかしと申せば忠
 直片桐呼べとて使番須田長右衛門先陣に乘行かくといへば片桐忠直の前に参り向を脱涙と流し
 繼で居たり忠直其時汝が日此の罪ゆるし候すと詞をかけらる片桐今の時又至りかゝる事こそ
 心得ぬといふ色顯れ忠直の方をきつとみて馬引寄せ打乗先陣よ向て軍始まると向首を得たり越

〔四百八十九〕 大坂五月七日の軍に水野隼人正が組の松平助十郎秀信今日の一番は他人に先を
かけさすべからずといふ水野丹宮口廣き事ないひそ誰か汝おとらんと争ふ助十郎各よく聞
れよ今度明堂に一番の馬の吾馬なり上田吉之丞の弟子よて駈と討印川までさばめたれば誰か先
と争ふ者の有べきといひしが果して一番に乘出し敵に向て討死したりけり

〔四百九十〕 安藤彦四郎重能は帯刀の子なり成瀬豊後守が組にて 盛徳院殿の御小性組なりし
に武士長生して諸方の事にあひ武功多く死すして世にわくるはさまで勝れたる勇士といふ難し
只 討死せんよる本意なれと常にいひけるが大坂五月七日に 一番首といひ彦四郎一番に
討死といは彦四郎と思ふべしといひてしなひのさし物を巻て井伊直孝の先陣に行菴原助右衛
門に向ひ是非あるれといへども助右衛門同心せ侍受たる箭先にいかにてかゝるべきといふ
彦四郎其箭先へかゝりてこそ勇士といふべけれといへども同心せず彦四郎さらそゝりて見
せんといふと押し止れとも少しもためらはず敵の中へかけ入て討死しけり帯刀馬上よさいを取軍
兵下知しける時從者彦四郎が屍を引のけんとするときみて犬にくはせよといひて乗めぐり北る
味方を立直せしが軍終りて後大に悲傷の色あらはれしとす
〔四百九十一〕 大坂冬の軍よ 東照宮本多出雲守忠朝は京口よ行て川水を見來れと仰らる忠朝

歸りて水の勢甚強く候と申す又井伊直孝に見て來れと仰られしに直孝歸りて水漲く渡りやす
けに候と申し召出雲は父にかこれり川水の女童もしる所也出雲に見せしむるに及ばず出
雲とやりしはあゝる有ての事なるぞ知ざりしよと仰られけり物見の詞は子細の有べきに心付さ
りしにや是よりて忠朝口をしさ印をも受ぬるかなどおもひて夏の軍よ必死を期して我と同一
枕に死んどもふ者は起請文をかけたといはれしに加藤忠左衛門大屋作左衛門築井次左衛門臼杵
七兵衛等起請文をかきたりけり小野勘解由の士の軍に出んに命をじむ人やあるとてあざ笑ひ
て打立けりかゝる所よ五月七日天王寺口の先陣と忠朝に仰出されければ忠朝大に悦はる、時小
野す、み出明日一の幸にて討死二よは一番鎗三よは高野に入んといふ忠朝打らなづきて居ら
れけり茶臼山下へ進んで毛利豊前守勝永に向ふ時小野かゝる足輕の並り様は 忽破るべしとい
ふ忠朝目にも聞入す小野口さばの黄なる殿の向を知り給ふと嘲。時加藤も進み出足輕の並居候
有様は軍よは見すは只大喜にて猪狩にはよからんわれに見ゆるは忠左衛門が足輕なり誠に戰
に向ふ有様也と打笑ふ忠朝にくき詞かなとて眉尖刀を提かゝられしかば小野只今討死して殿
に見せ申さんといふまゝに眞しぐらよませ行加藤は眉尖刀の轉まくた、おれは是も乗出す忠
朝は百里も名付たる馬にのり一文字に進む所に小野敵よ取まかれ鎗玉にあがりて討る、を見て
本多出雲守がつけ者共と大音わけて呼はりけるよ毛利に付られし秀頼の物頭雨森傳左衛門以

平七八人透間もなく、りければ忠朝持鎗つゝかざりしにより數鎗とれつゝ突伏く戦はれしを紺の羽織着たる足輕二間ばかりに詰奇鉄炮よて打忠朝の胸に中りしかども忠朝ちつともひるまず馬より飛下り其敵を只一太刀に切殺す口とり兼て持せられ鉄の筋がぬ入たる鼻をぢき左よ持有に刀提鐵七八人切伏多兵に取まぬ敵ハふ戦ひ精手廿餘ヶ所おひて討死せられしかば大屋は其屍の上に取付て切死にまたり藤井曰杵と始として皆同じく討死す忠朝の首は雨森取たり後家に仕へて六千石あたへらる

〔四百九十二〕 大坂夏の軍よ 東照宮は伏見にたはしまし井伊直孝は宇治の北六地藏より軍を出して大坂に打向ふ

東照宮は伏見船入の矢倉より行軍の有様と見物してたこしませしととなり宇治より伏見にかゝる道にて旗をはり立す直孝般野宮内を便にして旗奉行孕石備前廣瀬左馬助に何故ぞと問ふ二人承り旗の事は此二人にまかせられ候へと答へておし通る直孝怒りて又使を立昇非はり立よと下知すれども聞入す伏見と遇て旗をとり立たり此は宇治より伏見にゆくに 東照宮のおはします所に向ひ奉るが故にかくはしたりし也五月七日直孝御旗本の先陣として天王寺は東北にて大坂七組の敵に向ひて相戦ひ軍危かりしかば孕石廣瀬に向ひて我年七十五又取をす、々べき時な討死せんと思ふなりとて引退れよといへども廣瀬士の取は同じ事よ

孕石、捨殺し逃たりといはれん事こそ口惜けれとて二人共に旗竿に手とかけ討死しけり廣瀬をば青木の組の稻葉伊織討取り廣瀬は美濃が子孕石は主水が子にて共に甲斐の武田の家の士なり

〔四百九十三〕 廣田圖書は水野勝成の士にて大坂五月六日の軍に功有しかば明日は殿の馬前にて相はたらかんといへを勝成悦ばる明石掃部が陣と打破る時廣田鉄砲に玉薬をこみ一はなしと思ひて打たるにたち消しければ鉄砲をなけ捨て鎗を取梁瀬又右衛門といふ敵にわたし合せ突伏られしを勝成はしり寄梁瀬討取り後鉄砲を見しよ火ふたときらでありしとあり廣田人に語りて事の急なるに臨みては思ひの外にわはつるもの也我すでに先がけ殿敵多して自負せしむば殿前にて鎗脇を打んどおもひ設しにかくうろたへぬわつはれそべきと工みたる事のおくのおどくなればまして不意の事をや能思慮すべき事ぞとかたりけり

〔四百九十四〕 大坂五月七日毛利豊前守勝永は軍とかし出せしが住吉の松かげに白旗見ゆれを此駿河の大御所なるべし一文字と切てかゝり討死せんと志して兵とす、ひる所に白旗見ゆざりしかば長井傳兵衛水野伊右衛門に見て來れとてやりけるが 留有て乗歸り住吉の白旗は見ゆざといひけり此は 東照宮御旗に俄にまゐせ給ひ茶臼山の後にひかへさせ給ひける故とかや勝永は小倉の城主壹岐守が子なり勝永が子を式部といふ父子共に秀頼にしたがひ芦田矢倉に籠て自

害せり

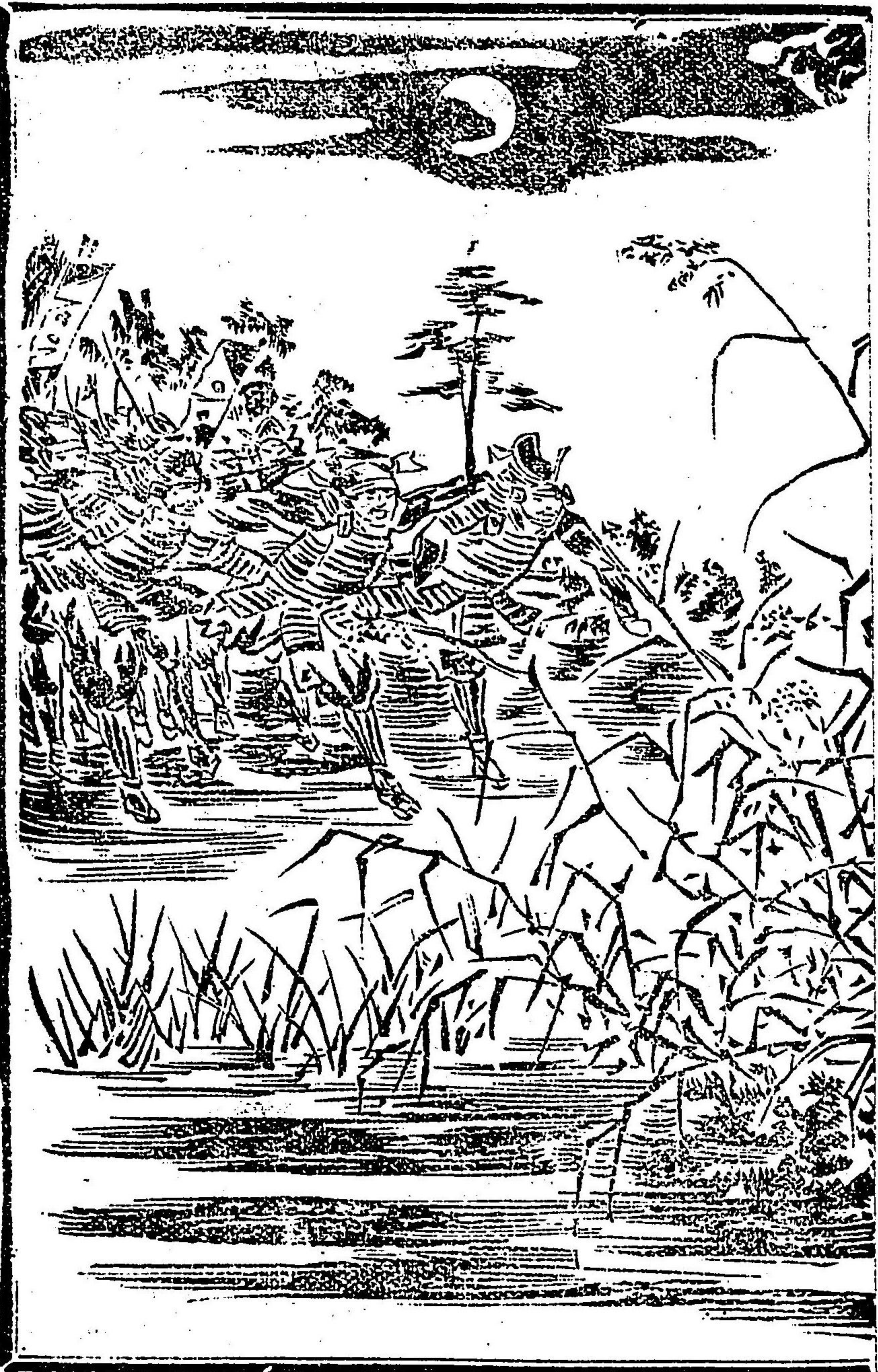
〔四百九十五〕 同日日秀頼は櫻門より打出て澗金を緋城にしたる物具着て太閤の時より傳へられし金の切さき二十本番染の吹貫十本代理の千本鎗を並べたて太平樂と名付たる七寸有し馬の馬引たてられし所より先陣皆敗北しけるを助えければ今は是までなり敵の中にかへ入討死せんと進まれしと速水時之令打て出たりとも勝利候まじ疾本丸に入せ給へとて引返すの、りければ士卒ちりくくに成て馬じるしを棄たりしよ伊藤武藏守ふくれて歸り入しよ是をみて朝鮮まで聞えし豊臣家の馬じるしを敵ひるひなば大坂城中にこの一人もなきと日本國中の物笑ひとなりんといふまゝに手づからふりかたけて城中千疊敷に歸り入けり

〔四百九十六〕 郡主馬其利は秀吉の臣なり石田權成を恣にせんとはかり人をなつけん爲に公用に金銀を出す事あれば必其半とわけて密に私よあたふ郡にもかゝる事有しにあらそふからば禍にあはんと思ひ辱なきより石田に謝して其金は太坂の庫より収め置けりそれより病を稱して出陣もせず後に旗奉行たりしかば大阪洛城の日千疊敷に歸りて床の上に旗と置去年の冬藤堂高虎天王寺にねし入し時速水時之と謀を合せ夜討すべきを寵臣に妨げられぬ住吉平野の陣所よ忍びを入れ火をかけて不意ふ一軍せんといひし謀も用ひられず運盡ぬると思へば口惜とて從者に此小脇差は黒田長政我に贈られし時用る事有て功を立んといひし詞あるゆゑなりよく長政よ

いつて返し候へと遺言し其子兵藏と、もに自害す行年七十一才とて秀吉の時より貞母衣ゆるされたり

〔四百九十七〕 大坂落城の日 興國公(池田利隆朝臣)は城の北に陣し給ふかねて下知なき前よ軍を進むべからずと仰出されしかば陣と整へて御下知とまつ所に寄手門々に押寄せ聞はしかを野村越中に見て來れと仰らる野村馬をはやめて行所に城より煙もは上りければ寄手攻入たりと思ひ先陣伊木長門池田出羽が陣に馬をかけよせ疾川を渡して攻入候へどるといひければ先陣即攻入て首六百餘を得しは野村が功なりけり

〔四百九十八〕 長曾我部益親は大坂の城落しかを落行て藪の中に潜り隠れりて其臣中内惣右衛門門飯を持行けるを蜂須賀の士長崎三郎右衛門が足輕もと土佐の人よて中内に見識居しかばかくと告て遂に二人ともからめられけり盛親とらはれとなりて後藤堂高虎と軍せしに井伊の赤旗に妨られ高虎が首を見て口をしきとて齒がみしけるとなり此は高虎使と直孝の許よやりて援を乞れしよ直孝も木村を切崩し追討になりて士卒ちりくくなれば詮方なく戦ひは一手ざりと答ふ高虎の使小侯清右衛門よ逢てけり木侯われに見ゆるは伊達政宗にや疾行て援を乞れよといひしかを便道遠と所よりうらたへ行武士や候歸りて軍にあはんとて馬を引返す木侯さらばとて亦はたをす、めけり



長曾我部
盛親殿中
活代三峰
湊賀三三
吉浦八

一説は盛親と生捕伏見に参り御立關に至る井伊直孝安藤對馬守土井大炊頭列坐し軍の事と問
 るに盛親申けるは六日の晩必死の軍をべしと存極めたるに赤旗の横合も來り候を見て疲
 れたりし軍兵ゆる打まけて候といふ格子の内に合徳院殿の御前に待臣二三人立て其かげより
 盛親と御覽有しに盛親も是を察しけるにや其方をきつと見て居たりけるとぞ中内は主君の此
 期及ぶまで附従ひたりし忠節を感せられ峰須賀に賜り御ゆるされを蒙りけり一説は長曾我
 部を生捕て繩二筋つけて白洲に引居たり 合徳院殿御側心士を以て數千の大將たる身自害と
 すべき事なるにははなかりと如何とぞ御尋あり盛親のるびれたる色もかく朝の軍に打勝た
 れども後の軍に赤備の軍兵よ打合て味方あまた討死し敗北せし事是非なき次第に候と申す又
 討死するの目害するか二つの 志もなかりと事返すくも不審なりと再び御尋仰出されしに
 長曾我部承り盛親も一方の大將たる身候へを某武者と同じくかるくしく討死すべきに候
 いずと申す再び兵を起して恥を雪ぐべき心言外にあられたりさて其後引出して警固し居た
 りしに飯をうづ高くもりて長曾我部にせゆ 盛親發後 士の中にとやしやかに見ゆる人を呼
 てむかしより名將もからめ捕るゝ事ためし多けし露はかりも恥もかみふ事とし然るにか
 るいやしき食物すゆる神義やあるとさうく首を刎てこそよけれと云ける時井伊掃部頭た
 へと打過これを見て法もなきふるまひなどもかなど大に怒御厨に下知していさぎよく料理を調

へさせ繩をさかせ座敷に長曾我部を招き入れいと懇に勞れを休め給へといはれしかば長曾
 我部是ころ禮義としりたる武將の道よと悦びて始終少しもゆるめずしきはなかりけるとぞ
 【四百九十九】 大坂落城の後大野道軒或作を生捕二條の城の駒寄くり付たるを立よりて見
 る者夥し皆いふ道軒は聞しよりも大男なりといふと聞てさすがに士たる者とも覺ぬ詞かな
 かねて我をかくいましめし如く汝達を一々からめんと思ひしに運命盡ぬれば口としき事なりと
 すこしもひろめる色なかりしとかや

【五百】 大坂落城の時渡邊内藏助紘は矢倉にて二男三男を刺殺し乳母に姉男を連來るべしとい
 ひけるよ乳母心得候白さかたびらを着せまゐらせ申さんといひて其場のがれ澁帯を包なわを
 もて堀下にさげ落し其身ものがれ得て彼子と市中の圃まかくみ置日敷經て逃去んとせしを關東
 の軍兵よとらへられぬいろくせめ問たれども渡邊に従へる士水谷清兵衛といふ者の妻にて我
 實子にまされなしとて其餘の事といはば彼子も僅六歳なりしかどもいかにせめられれども内
 藏助が子たる事をいはずさらば金二兩出さば藏くべしといひしかを乳母則舊郷渡邊より百姓
 に頼みしにさすが舊好を思ひ且亂母の忠義を感じ金二兩援けしかば則彼小兒を乞得て京都
 に趣き南禅寺の喝食となまぬ十八歳及ぶ時細川越中守忠興一柳十佐守末榮などばかりの方
 より還俗させられしかを程經て 文照院殿申府におはしませし時此事をなげきて遂に甲府に仕

へ渡邊權兵衛とて五百石賜りける内藏助は大野秀頼公の御命別儀なくおはさんやうどはかり
みよ時を待べしとて江州に落行けるが秀頼自害のよしを聞て立あがら腹を切て死したりけると
ぞ

〔五百一〕 大阪落城の日 奥國公の士齋藤職高黒母衣かけて西國道に落ゆく敵に追付すて討
取んとせしに彼敵ふり願て落武者首とられたりともさばかりの武功ともいふべからずいかよ助
けられんやといふ安藤忠孝にさ、せたる相印の腰指をあたへてとく落られよ見とがむる者わら
ば池田が内の齋藤織部といふ士の従者といははよと敵へければ 忝きよし謝して落行けり歸
陣の後齋藤が友來りて大阪よて落武者の中よ我ゆかりのもの、候がたすけ給ひて相じるしまで
あたへられし故のがれ出密に参りて斯と申せしといひけり齋藤後人に語りてわれ其時此武者と
討んは易しされども落武者の降参するを斬たりとも母衣かけたる我にいはばかりの功名とかす
べき今は却て奥深くればゆみだりに人數を殺すのみを武と思へるは大なるひが事よてころあれ
といひしとぞ

〔五百二〕 明石掃部頭全登大坂に籠りしが落城の後討死しけるや落行たるや定かならず明石が
士澤原孫太郎一説は孫を生捕て明石が行方を問る、よしらずといふさらをもとて拷問に及びけれ
ども更にいはずあまりにきびしく責られて涙を流まければ行方といふよこそあれといかよと

問ふよ澤原いひけるは關東は兩御所の運つよくおはしまし候を感じ奉りての事に候士たるは
どの者骨をきさざる、とも主君のゆくへを申べきや此度大坂軍に勝ば兩御所落行せ給ふべし其
時御邊たちとからめて今我をせめられ候おとくならば主君の行方をも白状をべき心なればこそ
かく我と責らる、ならぬともおもひてれば涙の流る、と申ければ人々詞なかりけり 東照宮
聞し召たぐひなき忠義の士なりよくいたはり候へとて御赦し有けるとぞ今細川の家よ其子孫あ
り又池田の家にもあり澤原は備前磐梨郡の村名なり孫太郎が一族此村より出たりといふ掃部が
居城の跡備前和氣郡和氣村の東の山上よあり

〔五百三〕 丹羽左平太は織田信雄の小姓なりしが後秀頼に仕へ大坂落城の時泉州貝塚まで落行
しに野伏道をさへぎり取さされければ丹羽我を殺さんどにや又甲冑を奪ひとらんとや着たるもの
刺れなば恥なり我既に日本國をみな敵にしたれば世にあらんとも思はず出家せん僧一人呼て給
はれといへば野伏僧をつれ來る丹羽さらをもといふまゝよ立よる体にて僧をひしと押へ刀を胸に
あて、人質にしければ野伏等もせんかたなくいづくまでも送り申さんといふ夫より紀州和哥山
よゆかりの人有けるに告やりて迎の人來て紀州又匿れ居たしが程きく敵を蒙りてけり
左平太長久手の軍よ小牧に残されしが朋輩の石黒八十郎よ年幼しとて旗をだに見ざるハ口
をし後の咎はありともいふより馬よのり長久手さしてあけゆく時石黒丹羽に向ひけふ

の敵は池田ぞかし池田の士も叔父の善内といふ母衣の士わり行あふならをいかにせんといふ
丹羽八々君の爲にいへども叔父を討んもいふなりをいひて後にいかけはなれしが軍既
に終りて落行武者有しに丹羽追付て馬より突落せしが母衣かけたる敵なれば名乗れといふに
石黒善内と答ふ丹羽聞てしかくのゆゑありとて落られよというて馬にかきのせたる處に高
木筑後守走來り何とて敵と落すとといふに丹羽子細を答ふ高木幼年のはたらきといひ其志を
感し後よ 東照宮よりのよしを申小牧よて信雄の陣所よわたらせ給ひ勝軍の祝酒宴のあり
けるよ左平太事を問せ給へば只今給事せし小性なりと答ふけふかゝる事の候と仰られしどか
や其後秀頼よ仕へて大坂の軍の前關東に使せしかばこれに乗て奉公せよとて馬を玉りけるど
なり

〔五百四〕 大坂冬の軍に諸軍に兵糧を給ふ凡三十萬人一日よ千五百石也遠國の兵よは一倍を増
玉りけり夏の軍に 東照宮松下淨慶よ召れ大坂のまかなひ支度膳米五升干鯛一枚味噌鯉ふし香
物少しばかり用意せよ其餘に及はずとぞ仰られけるされば厨の入用只長持一棹めて事足ぬとい
へり

〔五百五〕 大坂夏の軍に越前の士大將本多伊豆守富政が一陣ふ首百七十三取たりけれを我にま
される首數のあらしとといふ處に落合美作守我こそ増りたれといふ伊豆守何ゆゑとといへば落合

聞て本多には組に付られし士の祿凡七萬五千石に及べりかく申美作は一萬石の祿にて首四十八
取たり祿の多少にて士卒の多少ある事いふにや及ぶといへば 東照宮の使番諸星金行衛門柱
によりて居ねふりしが目をひらき落合の詞尤ことわりなりといひしつ本多詞なくてやみぬ
七萬五千石にて首級百七十三取たりとせば一萬石にては二十三陣にて其割合なり又一萬石
にて首級四十八得たりとせば七萬五千石にては三百六十にて其割合に當るべし故よ本多伊豆
守が七萬五千石よて首級百七十三取りて落合美作守が一萬石にて四十八得たるは二倍強の差
ありて落合の取得たる首數多きこと固より論なしと雖ども茲に又問はざるべからざるものわ
り何ぞや其取得たる首級の種類即ち上等首と下等首との分別をなさざるべからず司馬温公の
著せる七國象棋に云へることあり曰く凡を能く敵將を擒にする者ハ勝つ未だ擒にせずと雖と
も一國の吏士を獲て十よ過ぐる者は勝つ彼の獲る所の吏士未だ十に満たずと雖ども而るも此
に吏士を亡ふて已に十に過ぐる者は負く時に坐上獲ることの最も多き者は勝つ勝つ者は負る
者よ飲ましむ既し飲ましめて棋を飲め局を出すとき二將と擒にし或も諸の吏士を獲て三十
に滿つる者は弱たり弱たるは則ち諸國皆服す遍く坐にあるものに飲ましめて罷む一騎ハ
弓弩刀劍の二よ當り砲は三に當り礮は四に當り偏は五に當ると一境の遊戯尙ほ且つ然り況し
てや實戰とや其首級の如何により一個を以て二に當るとあり或は三に當り四に當るもあり又

は五ふ當り十ふ當り百に當り千ふ當るもあらん其多寡何んぞ唯頭數のみよらん又敵の首級を得ること多しと雖ども若し味方の擊死過當ければ何んぞ功とせん落合諸星には果して此等の諸點と併照して其多きを誇るる益し此等の諸點には思ひ至らざりしよきならん尤も其首數の上ふ二倍強も差あれば此等の諸點を併照すも落合の方其功上ならんとは雖ども萬一或は本多の方其功上なることなしとも保し難し本章落合の事遠く之を見れば大よ味ひありて稱賛しぬべきものゝ如しと雖ども深く考へ諸點を察すれを遽に以て稱賛する能はざるものありて存すれば評註者は敢て濫に稱賛の辭を出さざるなり

〔五百六〕 後藤又兵衛政次秀頼にまねかれて大坂城中ふありけるが夏の軍評定に政次國府越くらがり嶺に打て出地の利と據て軍するの外道なしといへば 則大和口の先陣して平野ふ打出し處に 東照宮より相國寺の瑠西堂と使よて關東の御味方に參らる播磨國を賜るべきよしなり 政次仰誠ふ忝しと申せとも御味方仕らん事思ひもより候はず今大坂の勢ひ強く關東ふやふく候は別あ存る旨も候べし今大坂の運かたひきて秀頼亡ん事近き候れを見て二心をいだかん事は弓矢取道にあらず候此よし申されよ是は物がたりにて候ほぎによく聞れよ今日本國よ弓取多しといへども政次にまざれる者有は覺はず候其故は去年より政次を頼み思召候は高麗まで攻られし豊國明神の嗣よて候また政次内通せば天下分めの軍たやすく破るべしと仰られ候

は徳川殿にておはしまし候天下の勝敗や政次一人の身にかけたるは思出ならずや死しても冥途の面目なり政次生て候は一日に破るべき大坂も十日は支へ候べし政次死したりと聞なば百日守るべき大坂も一日の中に破れ候ひなん政次とく討死するを徳川家の恩に報ふべき志と存る也といひけり

後藤は元黒田長政の士大將なり長政ある時物語の序に今我まかはりて軍兵を下知し大功と立べき者我士大將の中に誰ならんといはれしに菅政利人々各其器量有と申せども又兵衛お肩を並ぶべし者は候はずと答ふ長政あくまで勇將なりしは政次が武略と妬まれし故けしき悪く見たり政次豊前の小倉の城に有て隣國細川忠興と中あしかりければ實は小倉の防なり故有て政次が子隠岐追出されしをよび返し玉へと長政に申せども聞入られず怨る時政次が二男又市を長政誅せられしが博多の祇園の宮にて猿樂の有し時鼓とうてといはれしか行小倉にはかくとぬふ政次怒りて父子ともに出奔せけると忠興鐵砲二百ふ士を添て迎へよせられしかば長政と既に軍ふ及べく成しを江戸より和平せられ政次をばいづくにありとも送り候へとなりしかば忠興政次を餞して酒宴あり松井佐渡有吉頼母並び居たりしに忠興我黒田の家と不和なればこれより後の事ばかりがたし長政の軍だてよく知たるらんいかにして討勝候べきと問れば政次兩方に加勢もなく軍あらる國の大小と申必定甲斐守打勝なんされどもと

やすく勝べき計の一つ候甲州は人に越たる勇將にていつも先をかけられ候鐵炮にすぐれたる士五十人計擇みて鎗の合候時敵四人討取なば其中必甲州有べしと答へて出しをさばかり長政を恨みて出奔せしに今長政の武勇を譽あげつるすゝめしと感ぜられけり政次安藝に船ととめし時正則福島丹波をもてまねかれしかば三萬石の懸にて仕ふべしといふ正則いやく丹波を始として皆三萬石あたへまぬ政次に三萬石過分なりとて聞ず丹波今政次に三萬石あたへられば政次に三萬石也丹波も他の家に行ば四萬石なりと人申べきにて候是臣等が武名とあぐるにて候といへども正則同心なくて丹波行てかくと傳ふ此より前關ヶ原の軍は浮田秀家の兵七八十人亂れ足に成て正則の軍の前と落行し丹波ひき、地も有てしらず正則の旗本より告知せければ追かけたり此時正次丹波が前より來り引かくれたる敵ありなど追討さるやといふ處に首級多取來りしかば政次大に譽て歸りしが丹波は政次に教へられしと世にいひあへり丹波心に怒をふくみ居たりしかば此時かたり出し色と替て我より教へたりと世にいひふれられしやといひけるに政次打笑ひ器量の小さ人よ我より足下と武功相同じ我足下の下知と受べきや足下又我に教へられて功名すべきや人のいへばとて怒られけるこそをかしかれと答ふ丹波詞なくて歸り政次は我に大にまされり及べきにあらずと譽たりけり

按ずるに後藤又兵衛の名乗の諸書皆基次とあり然るは本書唯り政次とあるは心得ぬことや

なり是れ又眞田幸村と信仍と假名したるを一にして大石内藏之助を大星由良之助と云ふの類ならん更すくも卑屈の筆と謂ふべし

〔五百七〕 古田織部重勝は太閤の家人若き時より茶事をすきて千利休が門人よて此事好む人の重勝を一世の師匠とす元和元年夏兩御所京都と打立せ玉ふを待て天子を取まゐらせ二條の城と攻取り京中焼拂ふべしと大坂に心を合せし事あらひれて父子とも誅戮せられけり此織部正の古き珍器の全きをば好まざれば書畫やらの物もかしこを切こゝを裁多くそこなひてさて補綴りて用ひしと世に興ある事ともふ人多くこれ又効へり松平伊豆守信綱の父大河内金兵衛元綱人にかたりて此古田を必禍にかゝりて死すべきなりといひしは果してたがはざりければ人々いかでかくの相しけると問に元綱されば古の室器を聞はし物世の亂は失ひて今残れる處の物はみな神の護持にてこそあらめそれを己が目を悦ばしめんとて一人の好まかせることなひやぶる事神明必惡むへまと思ひしゆる其人の身も全うして終る事を待じとはいひたりきと答へしかば聞傳へて名言とせしとぞ

〔五百八〕 石川嘉右衛門重之次 山は清和源氏にて八幡太郎の第五男石川義時の子なり世々徳川家の臣として十六の時 東照宮の御旗本に召出され奉仕したり幼少より豪雄の人にて非常なりしかば七歳の時父此男は必日本第一と世にいはるべきにや若しからずは日本第一悍惡の人

となるべしと語られしとが大坂夏の陣に丈山傷寒を煩ひ重かりしに其母本多氏江戶より文して汝世々御旗本に仕へ奉り此軍に武功なくば又對面せしとがはげまされける丈山人によませて是を聞涙ぐみて物もいはず五月五日 東照宮既二條の城を打出させ給ひしを聞其日と病殊に重り前後を忘れて有しがしひてたすけおこされかおに播乘られて東寺を打過ける時御覽ありわやしませ玉ひ田上右京に仰有て問せ玉へを見て歸り石川嘉右衛門よて候と申を聞し召彼は病重くて死すべきと聞しにと仰あり丈山八幡に至て水を三酌すくひのみて胸の中の苦や頓にわすれけり其夜は 東照宮河内の星田よ御陣あり丈山を召ていと懇の御詞をかけさせ玉ふ六日に大坂に押よせ玉ひ扱がけを禁じ玉ふ處に七日の曉 丈山眞先にぬけおけして加賀利常の先陣に至り御使なりとてして大軍の中へ押扱岡山よて敵を討取たれども味方其首を奪んとせしかば打捨て黒門よ打入佐々十右衛門と名乗たる敵をうち取又敵一人打取て從者に首と取せ門を出れば馬に乗たる武者に行逢遠藤但馬守が士池田勝兵衛といふ者にて有しが丈山の功名を感るければ我の石川嘉右衛門なりと名乗て池田首一つ得たりといへば丈山其姓名を刀の鞘よ刻み付たり加賀の大軍おしつゝき來れを又御使なりと呼はりおし切て利常に行逢討取たる首を見せ申て打過たり其夜本多安房守丈山とゆかり有ければ筑前守利常と證にせよとす、むれども我利名の爲にするに非ず先祖をばづのしめざる志のみなりといへり此軍に御近習の士首と得たるは丈山と問

宮權左衛門豊島主膳と三人ばかりなり丈山御軍令ふそむきける故實に及ばず是より前丈山駿府よ有し時清見寺の僧説心禪理を聞たりしが出陣の時暇乞とて寺に至り此軍に御近習の士首を取たる人三人有と聞けなば其一人は必我なりとしられよといひたるが果してしかり 東照宮いまだ御旗を駿河よ返されざる中に妙心寺に隠れたり是より學文の志厚く日夜となく書を讀經史に通じ詩よ善せり丈山三十三の時とかや其後板倉内膳正重昌丈山の流落をいたみ淺野但馬守長晟にかたりしかば長晟賓客のもてあしよていと懇にせられしかば安藝よ行老母孝養の爲となり母終りて後寛永十三年五十四よて藝州を去て京師にかくれ居しよ板倉重宗京都に有て丈山をいたはる事大かたならす諸侯貴人の會する時大山と座上にまねきて此老は文武の道に達せる人なりと敬禮せらる其後比叡山の麓一乗寺に隱遯の地と設け詩仙堂を作りて詩人三十六人の像を壁に畫り書籍を友として閑居す 後光明帝御即位の時松平伊豆守信綱賀使として京都よまゐられしよ丈山と親戚たるゆゑたび／＼閑居を訪れけり承應元年七十歳に及て三州泉の郷は其故郷たるゆゑ歸るべき志あり板倉重宗よかくといへども許さまりまかば今よりは京都へ再び出じよらば其許へも參らじとて和哥あり

わたりらるるさなせみの小川は淺くとも老のなみそふかけもはづかし
後光明帝丈山が隸書によきと聞し召高木伊勢守守久勅命と傳へければ八卦の字を書て奉る 上

皇も隸書の大宇を書しめ酒肉を賜はる寛文十二年壬子五月廿三日一乗寺の閑居は終りたり九十歳となり其詩を覆書集と名付いせ世に行はる

一乗寺の閑居今は尼持たる寺になりぬされども詩仙堂は残り繪像も廢せず丈山の物具鎗又如意凡などもありといへり

〔更増〕 眞田幸村は世にも怖く稀なる大膽の企てとなし大坂冬陣の時關東數十萬の大軍中へ一人にて夜撃をなさんと或夜雜兵の鎧投げかけ陣笠に顔を深く隠し腰は村正の大太刀を佩ぎ手よは宿砂筒とて種ヶ島の鐵砲を提げて立出松屋町通り南へと足に任せて急ぎ寄手の本營を白山に向ふて行きけるに本多土佐守が下人挑灯を携へ用事ありげに鱧谷の方へ奔りしを幸村天の與へと悦んで前後を顧み像ねて用意の宿砂筒を取出し狙ひ淨めてズドンと放せば過たせ下人の胴を打貫たり下人は耐らず仰向に反り空を掴んで悶死しかば幸村ハツと傍へより挑灯吹消し懷中の割符を奪ひ取り逸足早く立退きろれより生玉の方へ赴き伊達政宗が陣に着きたりけり此方と見れば燎火を焚居けるに幸村立寄り如何と方々偕々寒きことにはあらずや某鱧谷へ用事ありて参りしに道よで提灯を吹き消し雜儀は候間少し火に熾まりたま許し給へと云ひながら手をさし伸して暫時爰に休息を夫れより提灯の火を點し挨拶なして立退んとするを役人共見咎めければ是れは本多の使にて只今歸り道にて候といふよ役人共も提灯に葵の紋ありける故難な

く爰と通しける幸村は夫れより井伊藤堂の陣々を其通りふして押通り馳て一心寺の門前に到り直ちに門内へ入らんとすれば陣屋の役人此夜の加納遠江守山村丹下にてありけるが幸村と見るとより何處へ参る者ぞと咎むれば幸村は例の手よて是れは本多が内の者にて候と云ひければ然らば割符ありやと問ひしに是れにて候と奮ひ取りし割符を出して預け置き終る爰を易々と通り抜け茶臼山の本陣へ忍び入り彼方此方と彷徨終に奥の方へと忍び入りけるが知る者更になかりける然るに其夜は徳川家康越前の寒鷹と賞罰あらんとて諸將を招き此度の勝算を祝しなごせられて酒宴を催され頻よ盃を傾け居けるが俄に圓房へ趣かんとせられければ大久保成瀬安藤等家康に尾して附従ひ來りしことを誠に危うき事なれ幸村は其れと見るより椽の下より鐵砲をソツと差向けアハハ一撃と思ひければ大勢の足音にて聲ち放つこと能はず餘儀なく復た椽の下へ這込家康の復來る廊下に屈み居る斯くといひ知らぬ家康の圓房を出て手と滑めんとなしければ成瀬隼人銀の湯桶にて盥水を注ぎ安藤帶刀手巾を差上げ大久保傍に扣へし所思ひも寄らぬ廊下の下より一聲の鐵砲鳴渡り其丸家康の左の耳元を照りければ何をか堪らん家康アツと云ひささ倒れければ附従ふ面々慌て駈り夫れ曲者なるぞ搦め取れと呼りて君を圍みて奥へ入れば大小名も是れへ驚き釜の湯の湧が如く上を下へと騒動家康は其儘一間に打臥しけるが能く容態を窺ふに差たる重傷にもあらぬと思ひも寄らぬこと故氣を失ひたるなれを皆々種々に介

抱いたしける斯くて陣中に曲者を搦め捕んど角々隅々まで嚴しく鑿穿あれど曲者と見ゆる者
いながらけるが廊下の下より異しの兵器を取來りて之を差出しけるに此時家康ハ稍々正氣づか
れわれしかば件の品を見るに短き鐵砲なるは因り眞田信之と召され如何に其方此品と見覺ぬ
ありやと尋ねければ信之之を見て大お駭き是れは兄昌幸が拵へし宿砂筒と申す鐵砲なりして此
品廊下の下にありし上は正しく幸村夜前此下に忍入りしに相違なしと身と慄はして申ければ家
康も亦大に驚きけるぞなん

〔五百九〕 上杉家に三寶寺何某といふ者下部の罪有て誅せしと其一族大に怒て死したる人を歸
し給はれと直江山城守よ訟へけり其下部の罪死お及をざる事にや有けん直江白銀二十枚あたへ
て路ととへとなだめけれども愈用ひず是非に論し給はれと直江を催促しけり直江さまへ
いへどもとかく聞入ず其時直江しからは訟の如くせんとて一族三人捕へさせ地獄に行て迎へ來
れとて書簡一通封じて使ひ付けとて首を刎せたり其書簡にしかくの子細候て三人迎ひに參
らせ候とく歸したまはり候へ慶長二年二月七日間魔王冥官披露直江山城守兼細とぞ書たりける
〔五百十〕 安藤帶刀の子を飛彈守直治といふ成瀬隼人正房成或時直治に紀州にてきたひたる刀
を乞得しが後に成瀬彼刀の事を語りて尾張にて死罪人の有しを試たるがころよく切れざり
き能出來たるは殘多し又またひ直させて給はり候へといふ安藤安き事なり紀州にて心よく切れ

たりきあやしき事よといひしと成瀬打笑ひ紀州よて心よう切れつるは尾州にて然らざるは尾張
の人骨堅き故ぞとたはふれしに安藤聞もあへすいやく尾張の士の腕の弱き故なり鉛刀にても
紀州にてはよくきれ候と答へたり

〔五百十一〕 土居但馬守數直執政たりし時金座の者とも相ばかりて金銀を入てきかへられな
ば日本國の金甚多くなるべし金の色の損するのみにて莫大の利なれども但馬守用ひられし但
馬守だよ此事を聞入られなば事行はるべしといひけるを數直に申す人あり免角の答なく打過
られしかば又人をして問せじよ但馬守是は邪なるわざなり金を以て天下の寶とぞるは純物な
るが故なり其實を悪くせんと思ひもよらぬ事なりといはれけるとぞ數直 大猷院殿の近習に
仕へ申されし比ゆる有て谷と蒙り引籠りて有しに 大猷院殿上京ましくけり數直密よ上京せ
られしを親族家人相止めけれども聞入ず京ま着てかたはらなる所にかくれ居けり或時まかく
の事と數直にはからすべしと仰出されしらば皆駭きて數直は江戸よりいかにと申ければ聞し
召尋ねて見よ居ざる事はあらじと仰られけるほどにまかしさかしかけるよ東の京よあぐれて
有しを順て召出して仰よ汝よくころ來りたれ來らよはよかりなんやとて命せられける事どもあ
り泰平の時といへども千里の行程たやすらざる事なりと思ひて後の答を願す忍びて上京有
しよ必かくあらんとしるしめされし明智の遠慮君臣水魚の遇季世に有がたためしなり此數直

は甲州武田家の士大將土屋宗藏昌恒が孫なり勝頼亡し時宗藏の子の二才にたりしを駿河の富士の裾野の寺に土屋が相知る僧有て隠して育けり 東照宮御狩の時寺に立よらせ給ひしに御茶とさへけて出けるを此子がつらたましひ唯者にあらず父は何者ぞと御尋あり住持の僧氏もなき者にて候とかくし申けれども再三詰り給へ心御敵をなしたる者の末にて候隠し願されておそれ存じひそかに育て候と 謹んで申ければ出家せんまは我に得させよと仰ありければ今はつゝみておしかりなんと思ひてこれは武田勝頼が供して天目山に死たりし土屋宗藏が妾腹の子にて候と申しければさる義士の子なりけるよ眼ざしのなみくならぬと思ひたるよ果してたがはざりけりとて召具せられ後民部少輔忠直といひしは此人なり 忠直は忠直の次男なり

〔五百十二〕 塚原卜傳 霧州塚原の人なり父と新左衛門といへり卜傳劍術を飲篠長意と稽古し伊勢の國司に仕へ劍術と以て名を得光源院殿の師たり其後上野の上泉伊勢守といふ劍術者あり(上泉を新藤流の妙手也)卜傳また上泉よも學たり卜傳が弟子の中は勝れたる者に一の太刀の極意を授くべしと人も思ひけるに彼弟子或時道のはとりよつなきたる馬の後と通りけるよ彼馬はねたりしにひらりと飛のきて身よ中らず見し人さすが小塚原が弟子の中にも勝れたるよと云ひしよ違はずとほめて卜傳に語けるに卜傳大に驚きてさては一の太刀をづくべき器にあらずといひけり諸人此事を不審して 試よとて類なきの馬を道のかたへよつなき卜傳を招てかたはら

よかくれて見居たりしお卜傳馬の後と除て通りしゆゑ馬はねんどもせず人々はかりしにたがひければ後にかくと語りさて彼弟子の早わざをおめ給ふを如何といひければ卜傳聞てされをよ馬のそぬるに飛のきたるはわざは利たるに似たれども馬はねぬものといふ事をわすれてうかと通りしはかこたりなり飛のきたるは仕合といふもの也劍術も時より下手にては仕合よて勝事あるべしそれを勝たりとも上手といふべからず只先よわすれず機よぬかぬをよしとするなり一の太刀の位よ及はざる事違なれば譽ざりきと答へしとぞ

〔五百十三〕 東照宮御病氣重きに及て 台徳院殿もあたらににおとします純帳のきはに松倉豊後守重正市橋下總守正總堀丹後守直倚桑山左馬助別所孫三郎と召れ此五人忠ある者なり且大坂大和口にて武功ありよく 將軍に仕へ奉れと仰られしのを皆涙を流して只とかくの詞なりけり時又別所は祿少けれども此後も取わけ忠あるべきものなり大和口にてやさしき言をいひたりと仰ければ別所泣沈みてけり此の大和口にて城兵引返すを返討ざりし時別所諸大將の前馬を乗廻し先年筑紫にて島津が退口と尾藤が幕はざりしと太閤怒られき只今追つくべき圖をそつす事無念なりかく申す孫三郎は馬一匹ゆゑ齒をかむばかりなりいかに人々かくは腰のぬけたるやと大音に呼ばる此事を聞召ての事なりけり

〔五百十四〕 雄延越前は最上義光の長臣祿一萬五千石なり最上の家亡て後流落しけるよもとよ

り家人に慈愛深かりし人にて士二十人附従ひ各乞食して養はんといふ土井大炊頭利勝五千石與へければ二十人の士に五千石皆あたへて各二百五十石なり其身ハ二十人のもと一日がたり養はれて一生を終れり越前死すれば二十人の士大に愁傷して一字を建立す今下總の古河城下乃難延寺これなり

〔五百十五〕 鳥丸光廣卿は常の居間に書物を繕きならべ四枚のふすま二枚ひらき机一脚に硯ありて三本入の扇子箱筆あり其間年月経ても人の入事なし故に座したるあきありて其外の塵満たり公宴参内の時も扇子箱に硯石を入れ手にさげ乗興入られけり此卿江戸に召れて三年おはしけり(高倉屋敷に有とかや)のくて歸京あるべきよし聞けるに兼て座敷の前に庫有しを留守におかれし雜掌いひけるは公久しく江戸よればして廣き所になき給ひ歸京の後此庫目前より有てあしかりなると壊ちたり庫は數十年諸家より贈りし物を積たるなり其物は書院よならべ詳に書記して家人に分ち與へけりかくて光廣卿歸京有て程経しかども庫の事はいひ出されし雜掌庭のさまの異なるよやといひしよげにも廣くなりぬとはいかにしたるやと問れしにしかくまたりと申す内の寶物いかによしたるを有しに昔くばり與へて候と申すそれは誠よかりけり汝は何を得たるやと問ればいや一種もとらずといへば無調法の事かなと打笑ひてとりわへもせられざりしとぞ君臣禪理を好まれし故なりとかや

〔五百十六〕 大猷院殿の御時中院内府通村公御不審の事ありて江戸南光坊にとちこもりて三年おとしまじけるが秋月と見て

ゆくかたに身をばさそはて夜なくの袖の露とふひさしの月と詠せられしと僧正感吟に堪ずして 大猷院殿又申されしかを三年の逗留旅情さびあらん今は歸京候へと仰出されて内府京都歸られけり

〔五百十七〕 本多能登守忠義或時近習の人に近きころ世にもてはやす書の事と問れしよ平家物語評判の事と申者ありそれは誰が著したるよやと問る由井正雪が作り候と答ふ忠義凡書籍は賢人君子の著す處なるゆゑふこそ崇む事よはあれ正雪は大惡逆の賊なりよも正しき事あらじ其書籍聞も穢はしく覺ゆ人よ以て言をすてずといふ事のあれどもかゝる凶賊の何條よき言のあるべき汝等よく心得よといはれけり

〔五百十九〕 蜂須賀阿波守至鎮古戦場の事跡と尋ね古き物のすたれしよ求められしに八島の軍に義經の士佐藤繼信を拜りける時最愛の大夫黒といふ馬を贈にせられし其鞍志波の寺に有しを彼寺の破壊したると修補して鞍を乞得たり其後年久しくなりて鞍と司る人くはしく其事の由と知らず他の鞍の中にまじへ置たり程経て上田半平安重とて聞ゆる馭法の上手あり其比たぐひなき惡馬の有て人々乗煩ひしよ上田此馬にはよ鞍置で乗たらをよかりなんといひしるばあ

またの鞍を出して見するに上田いとふるき鞍を取出して是こりて彼馬におかせけり上田とそ
ねむ者何條鞍と故あるべきいざみやとてあつまりけるに三浦次郎右衛門といふ鉄砲をあつかり
し人年老たるが此を見物に出て久しき名物の判官の鞍を見たるといひしかを其故と問て怒さ
けり悪馬ももどより乗得ければ上田が馭法いよく名高く成にけり

〔五百十九〕 紀伊國根來谷の法師はむかしより武勇を好む定まりたる法ありて第一の功名は
感状と玳瑁の鎗三本銅錢三十貫其次感状に鎗二本銅錢二十貫其次には感状に鎗一本銅錢十貫文
根來の内に大澤仁右衛門といふ者一番鎗と合す感状に鎗銅錢をも添てうけ得しが大坂にて秀頼
に従ひ城落て後九鬼の家には有しが大坂籠城の人禁錮せられしを土井利勝ひとかにやしなひ置れ
けり

〔五百二十〕 加賀利常ふ仕へし大音主馬助も若き人とおまたいかにか大音心はたけく候はんされ
ども今いひまゝ事叶ふまじ麒麟も老ぬればといふ事思ひ出され候といふ主馬助て五町十町走り
ても敵の真中よ只一人のけ出る事なり易き事にあらず早く走りたればとてさのみ益なき事なり
先にかける人ありて後につゝくをまたればよの老人もつゝくべし鎗あひは僅六七間に過す主馬
が如き老おどろへたる身も其時心剛ならばれくまじ五町十町はしる事は若き人のなし易き事
なれども六七間のきはに至りて箭玉いげしければ若きとて走られぬものなりといひしに皆詞な
かりけり

〔五百二十一〕 永田治兵衛は平生多病なりしを何の用にたつべきと人のいふと以て下部こそ
は健なるがよけれ士は義と勇とにありといふと人々せんかたなくといふ詞なかりとまた嘲
りけるに泉州榎井にて淡輪六郎兵衛が首取て旗本に行平生多病の男のゝるふるまひし候に無病
の人たち今日功名なく候やといふに答る人ありけり又上田主水は宗古といひまが石田に與し
て淺野幸長よあづけ置れしが茶の湯をもてあろびける故殿の國ころ大なれ一萬石の茶湯法師を
召置れたりと譏りけるに幸長聞て上田と脇差を與へ汝と誹る者ありと聞必大切の時に功名する
心得あれかしと詞をあけられしかは上田事と臨み刀に血を染申さんといひしとまた鼠の血なら
ではつけ得じといひけるが榎井にて目と驚かす軍して討取たる首と提す幸長の日出の王子の陣
よ至りて士ひしと幾らも並居たる處にて茶湯法師にかとられし人々よといひけるにとかくいふ
人なかりけり

榎井乃軍の大坂夏の事にて大野主馬大將にて塙團右衛門先陣して和泉に攻入けり岡部大學塙
が武功とろねみ抜がけして阿部野と和泉路にさして進み行四月二十八日夜明て國府の東の山
に烟のたつを岡部か士どもすこや相圖の火の見ゆるといひさみ蟻通明神の北より具塚さして
進み行淺野長晟は信達に陣せしよ大坂より大軍よすると聞榎井よ引返すを塙我行て敵の体見

て来らんとて唯一騎淡輪六郎兵衛といふ案内者と引具して馳行處に岡部を見つけ塙馬の上よりぬけがけしたりよな今朝よりの軍と聞くと罵る岡部敵なれば功名もなしといふ互に相罵りけるがあれなる安松と焼拂ひたらばよかりなん又蟻通の松原に伏兵あらん覺束なきに後陣のつゞきをまたんとて物見を出す長晟の士大將淺野左衛門佐安松に來りて龜田大隅よとく兵をあげられよといへり又塙が物見乘歸りて敵近く候といふと岡部聞て胃と取て着馬にもろ鏝を合せてかけ出す塙いかに後陣をまたれよといへども耳にも聞入らず怒て汝先を駈させんやどいひて是も馬を乗出す龜田の殿して引退く處も透問もなく追懸たり大隅は討死までよと思ひ定めて石橋によりて十文字の鎗を横たへ待かけたりしに淺野左衛門見て何とて軍したるくせんといふ事ごとて引退れよといふ上田主水は塙井の家の中にかくれ居て左衛門とやり過し後に残り居しよ輪與先かけてはせ入る處を永田治兵衛討取たりかくて大坂方はせよする處と上田主水鎗を提て故々相たゝかひ山掛三郎左衛門を引くみたり横井平左衛門横關新三郎かけよりて山掛を討とりぬ龜田を始として殿の者ども面もふらずあめさきで相戦ひしかば大坂方敗北し塙は田子助左衛門が射ける箭に痛手と蒙り十文字の鎗を取のべ田子が弓の弦を突切る八木新左衛門すかさず走り寄しかば家の壁にもたれて思ふほど幽きて終に討死す大野は貝塚にて先陣の戦を聞かけむかへは塙井の軍散じけり又一説に淺野但馬守

長晟紀州を打立五千の兵にて泉州市場よ着て大坂より四萬にて向ふと聞淺野左衛門敵いづくに向ふとも市場表にて一戦せんといふ龜田大隅後の勝こそ大事され四萬の敵を五千にて支へん事地利によるべし一里引退て蟻通明神の松原を前にあて、安松に先陣を押し出敵を引付八町なはてをくり引よ塙井よて戦いん此所松原ありて敵も見すかさず八町なはては双方深田にて一騎打なれば多兵かゝりがたし然らば一騎合の勝負にて必定味方の勝利なりといふ淺野聞て敵の旗をだに見ずして北ん事然るべからず龜田の引れよ我の引まじきといふ龜田我此所よて功名を遂すは討死せんと言して出陣したれば塙井に於て一番鎗を合するか討死か二ツの中を出すこ、よて一戦せられよ必敗軍なるべしといふ淺野怒て物前よ不吉の一言なりと罵りけるを淺野左近どりあつかひ所詮但馬守の下知にまかせよとて前田越前を以て事よしを申す長晟兩人の存る所尤なり龜田は度々武功ほされの物しなれば先陣五千の下知は龜田心のま、にせよと下知せらる前田歸りて斯といへば龜田涙を流し悦びけり軍兵と安松よ引とる處よ淺野左近同日向安井喜内田子助右衛門伊藤金右衛門等従ひけり安松の長瀧村よ陣す市場に残る淺野左衛門同大炊仙石因幡三不左衛門未明に安松まで兵を引取れども陣すべき所なく塙井よ入て半は河原に陣しけり大坂の軍は瓜生野にて勢揃し先陣塙田右衛門二陣岡部大學なりしが二人不和にて塙先に進み行四月廿九日泉州貝塚にて兵糧遣ふ大野主馬は酒宴し

て打立ず其時城は三百計の兵よて安松にはせ入火とくくる龜田は鎌通の北へ物見に出る所に
 淺野左衛門乘來り汝がはありし所甚感じ入たりといふ龜田物前の積り論ずる事は珍しからざ
 る事なりといふ旗本の旗色しきるなり直されよといへば左衛門心得たりとて乗戻るかゝる所
 に上田主水來りて今日の合戦いかはといふ龜田昨日計りし如く櫓井にて軍すべしとて旗本
 の旗色悪く見ゆるあり乗歸りて直されよといふ上田乗歸ると旗色ひしと直りたり龜田其
 後上田を感じけるハ此事をも龜田ハ南の町はづれに左の池の堤に鐵炮五十挺ふせ馬より下り
 立敵と待處に敵かけ來る龜田思ふほどに引付下知して鐵炮と持するに生死はしらず騎馬の兵
 三十騎をかりうち落す敵是にためらふひまに鐵炮に藥こみて一町ばかりも引取たりかくのお
 とく三度くり引にして櫓井の町に引取馬を立並べて休み居たりかゝる處に敵味方はしらす東
 の河原より歩立の弓の者とひきおたる大將馬よて乘來る龜田河原へ乗出し是は大坂にて誰の
 陣にてか候と問ふ岡部大學と名乗て馬上にて鎗たけに成し時大學馬と引返して北に向て引退
 く龜田さたなし返せと呼り一町ばかり追捨て櫓井に歸りあゝにて討死までよと獨言して石
 橋に腰かけ十文字の鎗ととり鐵砲の者をあつひるふちりくゝとなり唯三人残り止りぬ三人龜
 田が前よ來て腰ぬけども足まどひになり候落たるこそよけれとて少しもひるまず龜田大に賞
 する處に上田一騎乘來先よ鉄砲の音しけるよはやくも引とられたるよといふ龜田聞て我と御

邊と二人討死するならば屍の山をもなすべし但州公は琵琶がたけと越させ給ひ自害ありしと
 いふは賊なりや敵進み來るともまた一時のあらんといふ處に一騎は赤くよろひ一騎は二三間
 かくれたるが黒くよろひたる者かけ來る赤き物具は黒き出立は塙が手の者なり塙は龜田に
 向ひ塙が從者は上田に向ふ龜田立上り飛出て鎗組たり敵の鎗龜田が胃を二打三打うつ處と十
 文字の鎗にて胸板又左の脇を突てつき伏龜田が土菅野兵右衛門來り首をとる塙伏ながら菅野
 が足を切拂ふ菅野加右衛門助け來り塙が上に乗かゝり兵右衛門に首を取せぬ上田は鎗を打折
 無手と組たる處よ上田が手の者二人たすけ來りて敵より取上田は痛手かひけり龜田は猶進
 み出十文字の鎗を足にて踏直し居たる處よ又敵一騎かけ來り鎗と合を菅野加右衛門鎗にて脇
 つぼと突須田佐兵衛其首をとる差物に谷下吉左衛門と書たり此時敵一人來りて龜田に向ふを
 突拂ひたり大坂方まばらかけして先陣の大將討れしかば敗北しけり 東照宮と龜田が此日の
 軍と詞にほめさせ給ふといへり龜田は父の溝口半左衛門とて柴田勝家に仕ふ大隅若き時は半
 之丞といひて十六の時初陣なりしが柴田伊賀守に屬して越前白鬼戸女河原よて一本に白木
 戸馬上の敵と打取柴田父子感状を與へらる又越前九岡の城へ一揆押寄たる時も功名あり志
 津ヶ嶽の軍よもよい首取たり後淺野家へ仕へ小田原山中武藏忍岩槻の城功にも度々功名した
 りければ秀吉是と賞せらる文祿年中朝鮮蔚山にて敵六騎を馬上にて太刀打し一騎断て落し其

首を取れば幸長威状を興へらる慶長五年關州合渡にても功名し端龍寺二の丸先登し度
武勇譽れ高ありければ京都にて台徳院殿御前へ召出され龜田が働たくひまれなりとて御
腰物を賜はり上田も同じく賜物有て賞せられけり龜田後安藤東條の城主とあり一萬五千石を
幸長わたへらる子細有て淺野家を去高野山學侶花王院のもとに隠れ寛永十年八月十三日卒し
けるとや

〔五百二十一〕紀伊大納言頼宣卿の母君をば萬の方と申す駿河にて塙團右衛門は名高き大剛
の士也と聞てお子たちも太刀刀をまわらすは常の事なり大將の寶といふは士に過たるはなし
とて鏡鑿金とて毎年五百兩玉はりける中を二百兩分ちて塙が流落せし内は興へられぬ事ある時
の剛の者一人よてもいとほしき子よまぬらせんといはれしとかや

〔五百二十三〕奥平の長臣奥平源八一に父の惣同姓隼人を討し相與せる士多し源八幼くして
奥平の家を立去し一味の面々も皆立去て源八が成長を待居ける其中に一人の士妻は稻葉丹後
守正通の家の士の女にて有けるが父のもとに預け置し嘸て惣討へきに及びて妻のもとに行て
存る旨のあれば離別するなりいづ方にても嫁し候ひて親の苦勞も成給はざれといひければ彼妻
聞て年久敷隔なく過候ひしに俄にかく仰候は定めて故有べし然らずしていとま給はりては親に
向ひていかよいふべき詞も候はずといひければ今はつゝみがたくして誠にかくの子細にて

髪とらつに組したれば其時は討死するか又は公の咎よりて殺さるか二ツの間有べし御
身は年若き人の我死後に艱難すべければいたはしくてかくの如くいひつる也と語りければ彼妻
もとゆひの際より髪をふつとときり髻打すまじ給うて相見ゆるまで此髪はるひ申さじと誓言して
別れけるとなり其後惣討おほせて彼士も散々に働き助太刀して彼妻のもとも行て對面しけるよ
もとゆひの間より髪長く出てもとゆひは其まゝ有しとぞ

〔五百二十四〕越前忠直叛志ありと世に聞に比加賀の前田利常ハ隣國なれば軍の支度せられ
一は物具着て乗るべき馬を擇ぶよ加賀の領國の中二千疋にあまれる中にて富田越後が馬を擇出
そ鹿毛よて二寸五歩あくまで駿馬なり大庭に旗數百本立並べふせつたてつて金鼓を鳴し鉄砲
とらつに少しも驚かす名とは優婆塞とつけられけり今一匹とて擇をれしに似たる馬もなかりけ
る

凡大將の馬を擇ぶに心得有べきにや甲斐の武田の家にて米澤といひしもの奥州に行て馬を求
る時信玄一首の和哥を書て興へらる

上野の中のかんこそ大將の乗べき馬としれやものへふ

信玄五十疋の馬の中に軍に乘れし馬四疋栗毛中段とて只二疋あり甲斐山梨郡とし野といふ所
の百姓此疋足を養ひ置しを米澤見て又なき馬也と信玄も申て五十貫の地と興へて此馬と信玄

に奉りぬ今泰平久しくなりて馬を擇ぶの理を知る人なく益なき觀の美に黄金を費せ事には成ぬるなり是みな上り下りにいたるまで軍旅に明かならざる故なり

〔五百二十五〕 池田の長臣森寺秀勝は伊勢の赤堀郡萩の城主なりしが伊勢の國司に攻落されけり勝左衛門秀勝其比幼かりしを母抱きて落行尾州織田信秀のもとにかくれ居たり 護國公池田信輝の母君を養徳院といひしが江州より落されて清洲に來りしを勝左衛門瀧川一益も頼みて信長の乳母に出せしに信長 護國公も同年なれば遊び相手となりて年をわくれり故有て 護國公出奔し給ふ時森寺も同じく打つれて赤堀に匿れ居る事五年に及へりかくて信長星崎の城と攻らると聞て森寺商の体にもてなし清洲の城へ厨に行く物具を求むべき支度せばやと存れども金も銀も候はずあはれ少し計給はり候へど 護國公の母君に潜にいひければ我も金銀のあらむこそ此なりともと綾の小袖三ツ出して森寺よあたへらる森寺いとぞ出て銀錢六十も換たり古き物具と買たれども冑なければ甚にて染たる布を鉢巻よして星崎に向ひ給ひしかば信長悦て護國公をもとのおどくつらはれけり藤左衛門子を政右衛門といふすぐれたるあら者也政右衛門忠勝十八歳の時つれの所にて有しやらず 護國公の前に有し時稻葉伊豫守一鐵のもとより備前の 陶とてとくりを贈られけり政右衛門見て是は贖物なりあらぬ物とたばかりて豫州まで笑ひ候へし悪き奴にこそ候へあはれ伊豫守が目の前まで打碎きたらば 快く候へしとていふ 護

國公汝が詞無禮なり豫州の目の前まで碎くべくはくだいてみよとの詞を聞より座を立てとくりを懐に入伊豫守の方に行たりか、る事とせしらず對面せられしに政右衛門とくりを取出し備前にて焼たる物には候はず贖物なれば返し申すといひもあへず柱にあて、打碎きつと走出ければ一鐵それとめよと下知せられしよかけのびて歸りけり 護國公は政右衛門がつらたましひ一定伊豫守のもとにて打碎くべし危き事なりとて門内に待給ひし處に歸り來りしかくせししるし、此ありとてとくりのかけたる口と取出し見せ申て後申けるは凡君とある身は一言も謹むるべき事に候先に申せし詞は無禮なれを碎くべくはくだいて見よとばかりあひをかけられ若き男の骨をきざざる、とてさてやむべきを遁れ得て歸りしは 幸なり已後と謹み給へといひけり 政右衛門美濃の竹が鼻に居し比木全又藏といふ士ゆかり有て森寺かもとに居たり 又藏が父は五右衛門とて大剛の者ありしか或時野伏一揆しけるに木全山の中まわけ入しかばそれはいかにと問ふ中へんにあるまへ候と答ふほどなく一揆のうち通りける所を山の上よりどつとれめいて突てかへりしかば小勢と大軍なりと思ひ一揆さんごに敗北しけきば木全が鎗まで中へんよかまふるも世にいはれし人なり

政右衛門又藏に心と合せ同國高木向某を討んと計りけり又藏竹が鼻の竹林にかくれ待しに高木夜中に打過ける處と走り出て唯一鎗に突殺し從者共を追ちらしてけり高木が子二人父の仇報い

んと聞はしに政右衛門或年江戸に行時荒井に宿せしに敵道に待と聞て舞坂に行道の程三十間ば
 ありもへたて、凡八百人計待のけたりしに政右衛門しつくと乗通りしに敵更にとりあはねば
 政右衛門従者五六人にて馬を引返さ仇の前に乗行是に待たるは高木に候やかく申森寺と仇にて
 うたんとや唯今何とてうち候はぬぞやさらば参りあはんと大音にいへども物いふ人なし政右衛
 門あざ笑ひなせ討候はぬぞや此後我をうたうとは存もよら候はずと罵りて打過江戸に趣きけり
 高木の訟へて政右衛門を討んと申ければいづくもわれ討候へと許されしが又政右衛門にも
 きびしう防ぎをして仇にうたれざるもて勝にせよとの事なりければ常に鉄炮五挺に火繩に火
 をつけ弓十挺に箭と關ひさやはつしたる鎗五本士三十人うち連けり秀吉の時出仕しけるにもか
 くの如し刀をも殿中に携へよと許さる伏見の城を築かれし後諸大名出仕有しに政右衛門にけふ
 は出仕すべからず仇の必親ふべきといひしかども政右衛門くるしうも候えずとて出仕す秀吉
 の居間の次まで刀をいづも携へけれども其日は從者よもたせ置て廣間に仇の有ける中を打通り
 て事故なく退出しけり後慶長四年四月に参河にて病死したりけり
 「五百二十六」 國清公池田三左衛門 世と下らせ給ふ時伴玄札は寵臣なりしかば必殉死すべき
 者なりと人もいひけるを興國公武藏守利隆 朝臣 聞し召よと心を付よく侍臣も仰られけり御權にそま
 らせ給ふ日其次の間なりしふすまをひらきうれに入又開けるとあやしと行て見れに脇差とはや

腹に突立けるを抱かこし人多く重りておし留置かくと申ければ 興國公急き御出有て玄札にか
 にと仰られしかば玄札承り御恩深く蒙り候へり御供仕りなん 志にて候え見つけられしは口と
 しく候御ゆるされどもて 快く死出の道に赴き申へしと申上げるを聞し召さもあるべき事なり
 されども我 士の主には成がたきを見すて、先代の供えたらんよは人々思ふ様も玄札は先殿の
 志をも知り寵愛も遇たる身のよく、今の嗣は劣り果たる故供して死したるならんといはんに
 は今までの士一人も我に心服する者あらじ我は獨夫と成はてん事目前なり我を獨夫よしなして
 それを忠とも義とも思ひなんにいとく死して御供申へし強て我おし留むべきや我は汝が死す
 るよ依て士の主には成る事あたはじ只とく死ねよと仰られければ玄札涙と流し存よらぬ仰を承
 り誠に進退究り候と申ければ 興國公とく死して我を獨夫よしして先代への奉公とせよと再三仰
 られしかば玄札どかくいはで暫ありけるが仰の趣承り候ひぬ士ほどの者が刀を腹に突たてな
 からばて止べきには候はねとも只今の御詞によりて恥をしのびて人に後指とさ、れ候ともなが
 らへ罷在べしと申ければさては我士の主よなる事を得たり汝が忠義比類あるべからずよくいた
 はりてと仰られ内よ入らせ給ひけり

「五百二十七」 池田の家の大將番大膳景次は父と藤右衛門景元といふ尾張智多郡荒尾といふ
 所の人なり大坂冬の軍尼ヶ崎の城にて片桐が兵ども討れしを援はざるより二心ありと 東照

宮疑ひ思召よし聞はしかば其子細を申述んが爲使を参らすべきも誰かよく使せんと各使と擇び其姓名を書て出すべき旨 奥國公の仰により數百千の士半を過て大膳が姓名をじるして出しけり 公自ら書記させ給ふも同じければさらばとて西宮の陣所にて大膳を仰付らる

大膳 公の御前を退き出ける時長臣たちと始としていやが上小重りたる所と通らんとするも伊木長門大膳は向ひ今度の使は大事なりよく心得られしやとひしに大膳不才の身粗仰の旨は承り候ひぬ此をどいふまゝに懐より九すばかりの七首の氷のごとく見ゆるを拔出し至てわざ物にて候 大御所の御座近く参りて申候より外は存候はずといひければ長門 尤なり我行べしと思ひしよかくの如くなればいふべき事あるといひけり

二條の城に参りければ 東照宮の御前に召れて子細を糺させ給ふに一々道理明かよ申たりしかども猶聞し召入らるべき氣色あかりければ尼ヶ崎の地圖を取出し武藏守露塵ばかりも二心なきよしを申せしかば其時疑ひ思召ざるよし仰出されて退出しけり人々再三押返し諍ひ奉りて武藏守罪なきよしと申せし有様類少き者なりと感あへりしに 東照宮も其後大膳が事とゆかしき者なり取は豪傑とは大膳なるべしと仰あり

大膳はもみ罷りて容儀ゆ、しき人なりまかは退出しける時罷よくもいひたりと仰られ其座に有し人も御立關に出ておくり且しる人よなりたりとあり

番後祿千石と賜はり又後千石の祿を増賜はり芳烈公(松平新太郎光政朝臣)の時に至て 政を執たり寛永十三年七月六日病て死す

〔五百二十八〕 池田の家にて 政を執り四海よほまれ高き熊澤次郎八伯備了介を本姓野尻なり加藤嘉明の士野尻藤兵衛一利一子よて外 大 父熊澤半右衛門守久養うて嗣となす守久初は喜三郎といふ喜三郎父を平三郎とて尾張の人也 東照宮よ仕へ奉り三形原よて討死しけり守久其後福島正則に仕へ正則安藝備後と削られ信州川中島に流罪の時正則の江戸の屋敷をかこめてもし仰を背かば 忽討滅さんとなり正則の士大つた出奔をけるが士只七人残りといふなりし中よ半右衛門も留れり正則江戸と出川中島よ赴く時途にて殺さるべしといひふらす守久節をまもりて附從ひ信州に参りければ正則日比寵愛の淺かりし事を悔れぬ後水戸の威公に仕へけり一利は後編島よ仕へて島原の城攻よ武功あり延寶八年八月廿三日備前岡山に卒し善山に葬りぬ次郎八寛永十一年十六歳にて備前よ來り 芳烈公に仕ふ十三年の島原一揆乃亂起りし時公江戸にねはしまし仰と 奉りて岡山に歸らせ給ふ此と一揆猶落城せずを師と出されんが爲なり此時次郎八いまだ元服せざりし故江戸に留置れしが自ら元服してひうかに岡山に歸りたり十五年岡山を去て近江の桐原にかくれ居たり二十四の歳高島郡小川村にゆきて中江唯命を師とま道を問歸りて又高島にもく此時父野尻氏仕へを求め江戸よ赴く次郎八に母妹とありて東近江の人隠き所に殘しと

々めたりしに家甚食しくて江州の賤しき百姓の食するゆりのこ雑水を飯とし糠を食して魚肉
 酒茶の味とすらずやうく希子と着て暮をふせぐ事五年相しる人母妹のありて餓死せん事を
 はれむばかりなり中江王陽明の書を讀て其智の旨と次郎八に語り示す 芳烈公伯繼が王佐の才
 なる事をしらしめし京極主膳に就て復來り仕へなんやと度々問せ給ひければ正保二年再び備前
 に參りて仕へけり祿三千石を玉はり 政お執たり和氣郡八塔寺は備前美作廣播犬牙の如く入ま
 じりたる地にて次郎八請取口として和氣郡の中便宜の地に因て田と懇き 士數十人と士着とす此
 時伯繼を助右衛門と稱しけり公の參勤に従ひて江戸にゆく事度々に及べり世に名譽高く其道を
 慕ふ人多し紀伊大納言頼宜卿松平伊豆守信綱板倉周防守重宗久世大和守廣之板倉内膳正重矩松
 平日向守信之堀田筑前守正俊其餘の大名數をしらす 大猷院殿其人となりとふかく信し給ひ召
 て尋ね問るべき處に慶安四年かくれさせ給ひて謁見し奉らず承應三年備前大よ水出明曆元年飢
 饉の災あり次郎八日夜國中と巡り撫育に心を盡す伯繼日比儉にして家中婢女寡くいとなむ事
 少し唯客と愛して組の士朝夕となく來りて相語る伯繼水理を論る事妙を得國中水を通し沼を
 作り早魃の防をなすにみな馬上より打詠めて其利害と定め論するに數十年の後其官督中らざる
 はなじと云へり明曆二年和氣郡木谷の狩に山より倒れ落此より脚と腦めりかくて和氣郡寺口村
 は其跡地なれ蕃山と名を更て世を遷るゝことろざしあり

つくば山紫山しげ山しげれを思ひ入にこそはらざりけり

といふ和歌の心にて名付しといへり病より明曆三年祿を辭し京に赴く其道を慕ひて門人とな
 りし人々中院大納言通茂卿同通躬卿野々宮中納言家練卿野々宮中將定基朝臣清水谷大納言實業
 卿押小路三位公起卿久世中將定清朝臣久我右府廣通公油小路大納言隆貞卿中御門大納言資照卿
 伏原三位宣業卿を始としておまた伯繼と師とし貴ひ給へり此時所司代牧野佐渡守親成人の讒言
 を信じて伯繼と憎む又其才を妬む者あるによりて世ふさまいひふらず事どもありて寛文七
 年四十九にて大和の芳野に匿れ

「この春はよしの、山の山もりとなりてこりまれば花のころと」とよめるは芳野にての事なり
 又山城の鹿背山に引こもり又播磨の赤石に移り居延寶七年六十一歳にして大和の矢田山にかく
 れけり赤石わ松平日向守信之の領地たるが日向守領地を大和の郡山に移す故なり貞享四年八月
 常憲院殿の仰より下總の古河にゆく日向守領地を古河に移す故なり日向守深く伯繼と尊信せ
 られたり同年の冬封事を江戸に奉り政事と更正すべき旨と申すにより大よ旨よ忤ふ事ありて永
 くどぢめ置べきよし仰出けり此後人の來て物語するにもし國政の事に及べをかたはらざる筈と
 とり吹て一事もいふ事なし元祿四年八月十七日古河の城頼政郭に病死し城下の大堤村鮮延寺に
 葬りぬ歳七十三なり伯繼の學朱子王子よらば別に一種の學をなすといへども文學は短にして

政事の才其長せる處自著せし書見ねたれば愛に詳かにせず

〔五百二十九〕 會津中將保科正之は 臺徳院殿の第九男にておはせしが殊に豪氣あり近習の人に向ひて人々のたのしむ所を尋ねられしは小猶與五右衛門といへる者臣が樂む事二ツ有其一ツは家貧しくて客といふ事としらき天より命せられし貧をたのしむよしを申す其一ツと問るゝに是は憚る所の候とて云ずしひて問れしは謹んで申けるやう大名よ生れざるを天の冥加と存じたのしむ處なりと答へければ子の細を問るゝに大名は天性かしくおはし候ても臣下これを馬鹿にとりなほ候祿少き身の其師や朋友あしき事と戒め諫め候故に其身を省て馬鹿にならず候へども大名はさそなく候臣たる者さかく忤らひては身の爲よからじと存じて其主のよき事われは山の如くよほめ申いろゝの悪き習ひを付候ほどよいつとなく恣となりもて行われよりは一官の諫をも申がたく候いかよ聰明よても學問もなく教といふ事をしらす善事を辨へ給ふべきやうかきゆる馬鹿よなりはて候は口をしき事に候はずや臣大名よ生れざるを樂と存候は此子細は候と申せば中將つくゝと聞召てよくもいひたるかな尤至極せり今より馬鹿に成ざる思慮すべきよとて賞美のあまり即二百石の祿と増與へられけりそれより山崎嘉右衛門を尊信し學問を嗜れ後神公と諡せしは此中將の御事なり

〔五百三十〕 水戸中納言光國卿は頼房卿の第三の子 東照宮の御孫也寛永十年威公の嗣いまだ

定まらざりしかば 嚴有院殿の仰よて中山備前守信吉水戸よ至り光國卿三ツに成給ひしと見てかくと申上て嗣に定まりぬ正保二年史記の伯夷傳と讀て深く感ずる處なり是嗣は兄の頼重立給はん事なるにかく定まりつれば長子の方に家を譲るべき志此よりして起れり是より又學問を好み給ふの志篤し明暦三年より大日本史を撰び始めらる 神功皇后を帝紀を黜けて后に列し大友皇子を天子と定め南朝と正統と立らる皆此君の義烈なり寛文三年頼房卿卒去わり葬禮僧家の法を用ひず瑞龍山に葬り威公と諡し廟を水戸の城中お立られ祭祀の儀式と定め給ふ殉死すべき士ありしに自ら其家に至りて止めらるゝに其選正しき故に殉死をどゞまりしかば此事聞にて殉死天下一統停止の旨仰出されしは此君の志なり又兄の頼重卿の子松千代綱方としひて養嗣とせられん事を乞て若開入られずと世を遁るべき志なりしかん頼重卿許諾あり松千代の弟采女綱條をも引とり養ひ玉へり明朝の遺民朱之瑜といひし文學ある者清朝の粟と食せじとて日本に渡りしを筑後柳川の文學安東省若其俸祿の半と分て養ひ置しを召て師とし給へり綱方病によりて卒去有しかども弟綱條を養ひ置れし故に世嗣ふなし給ひぬ延寶元年孔子の堂を水戸に立給はん爲江戸駒込の屋敷にかりの設となし給ふ日本古よりの假字の文章を編て三十卷となしたるを 天聰に達し 後西院の帝名と扶桑拾葉と玉はり即獻じ奉り給ふ天和二年朝鮮の使臣江戸に來り三使進物の目録禮義と失せる故三條の疑問有しと答ふる詞なかりしとなり 後西院の帝の

黃門光
國西山
閑居圖



八九十四



八九十三

勅名により鳳正といへる御祝、銘と作られしるば、宸筆と下し給はりて賞美せさせ給ふ其御詞の中に備武兼文絶代名士といへる句有しを印に彫せられしとなり元禄三年領國と綱條卿にゆづり給ひ權中納言に任じ給ひしが程なく辭表を奉りて歌に

位山のぼるもくろし老の身はふもとの里に住よかりける

是より常陸の久慈郡太田郷の西山に引籠り給ひしに山莊の有さま萱ともて菅門垣よは葛はひかゝり只竹がき一重にて池に蓮、楠西山のほとりに桃數百株あれを川の流の橋を桃源橋と名つけ鹿をはなれ鶴をのほせ玉ふによくなつきけり瑞竜山に壽藏を設け衣冠を埋み碑陰の銘と自ら作り玉へり久慈郡小野中村旗樓寺に祠堂とたて頼義義家の神主と置せらる又攝州港川に楠正成の墓を修し碑を立て碑上に嗚呼忠臣楠公墓と自筆し陰に舜水の撰し讀をほらせられ又舜水の碑を瑞龍山に建られ其文集を輯して門人源光國と稱し給へり彰考館を作りて和漢の群書をあつめられし遠國他郷に學士を遣はし半番一行の反故をも見るに隨ひ拾取の給ひけるはせよ色々の書ども編集け有り中にも禮典類聚五卷、日本古來よりの寶典と稱すべしといへり寛文五年領國中の淫祠三千八百とぼらすて新地の寺院九百九十七除かれ多珂郡にて廣野ありしに馬を放ち牧とたま給へり地の利と盡と備に心盡され海參白魚昆布とひ沼か浦にまさる海蛤、蛤とをなち是より海物多く出づ山には漆楮多く植させ給ひけり元禄十三年西山お逝去あり義公と號

せしとなり

國初より己來の諸侯の中に會津の神公水戸乃義公備藩の 芳烈公三公のおとき、定よ非常の君と稱し奉るべし神公の事詳なる事をしらす義公の一世の事跡西山遺事に密にしるしたれば只一二の大なる事としるせり吾藩の 芳烈公の學校と作り賢才を招き禮と以て度となし玉へる異國をいは、備の康叔武公燕、昭王の如き君を并て 芳烈公は比倫すべき予別にしるせる物われべ此篇よは詳にせず

〔五百三十一〕 渡邊數馬弟源太夫が河台又五郎と討けるは寛永十一年十一月七日の事なりもと數馬は松平宮内少輔忠雄に仕へて忠雄備前岡山におはしける比寛永七年七月廿一日城の大手にてをどり興行ありけり其夜數馬は妻の父津田豊後が方へ行けるに河台又五郎數馬が宅よ來りこゝろ易かりまかを源太夫と物語しけるがいかなる故よや主従四人よて源太夫を切殺し又五郎は脇差の鞘を落して行方しはず成ぬ折節をどり見んとて群集しけるに數馬が下部岩佐兵衛頼以居しが外のさわぎを聞出けるに路次の内より刀を提たる者に出わひ何者なれば士の家に刀を抜て入しやと詞とかけたる所に徒目付の遠山才兵衛も來り合せ彼者を切とめけり 一説に歩行の土三村孫右衛門通りかゝり内のさわぎを聞走り入て是を聞又五郎と追かけんとする處に何者ともしらず玄關よ走り入ものわり孫右衛門を見て逃んとするを切伏たりあれり

又五郎が下人よひひ付て源太夫にどやめをさ、せんためよもせうたるなりと後お聞ぬしと也
 源太夫は深手負て又五郎相手なるよしひひて死しぬ豊後が方よ告ければ數馬も豊後も又五郎が
 父半右衛門方に行對面すべしとこへも門を固く鎖して入附ざりける中に長臣荒尾志摩忠雄の
 近習加藤主膳かけ來りて半左衛門は二人して受取ぬ忠雄半左衛門をば菅權之介に預られけり半
 右衛門初の安藤對馬守重信に奉公せしが故有て忠雄懇にせられしに半左衛門口論して相手を
 斬出奔して波山駒馬がもとに來りしを潜かくして謀をあたへられし身なれば又五郎と出して
 腹切すべきものと忠雄思はれしに半左衛門は由に其志に非ずして又五郎江戸へ行けるを安藤治
 右衛門かくし置れけり久世三四郎阿部四郎五郎兩人忠雄のもとに年久しく來れる人なれを治右
 衛門よかくといひ入れけるよ治右衛門申けるは半左衛門と渡されなば其ま、又五郎を出すべしと
 の事にて此言、兩人忠雄に告れども向も覺束なき体なれば兩人たまかに又五郎を請取出すべき
 どの起請文を忠雄に出すさらばとて半左衛門、江戸召下して取ふべしとの事に及て治右衛
 門朋輩ども中行あり仲間を除くべき故是非に及むと忠雄申す忠雄其勢く事と怒りて忠雄一
 族の人心合せおし寄て奪ひとらんと支度あり
 伊達政宗は論するまでもなしふみ潰して奪はるとより外なしといはれしとなり
 三家の御方和平の取斗ひ有けれどもいまだ事遂す半左衛門と池田備中守長幸のもとにありか、

る處に忠雄痘瘡を病て卒去あり弟の松平石見守輝澄同右近太夫輝興三家の御方に訴へ申旨あり
 けるよ長幸も卒去ありて半左衛門は松平阿波守忠英請取て阿州へ趣く道よて死す安藤と始め答
 を蒙り閉門仰付られけん寛永九年七月備前因幡國替を仰出さる此時數馬引退て備前の兒島よあ
 り又五郎がゆくへを尋れども知れば數馬が姉登荒木又右衛門大和の郡山に有けるが又五郎が伯
 父河合甚右衛門も同る郡山に有て暇を申て奈良に出けるゆゑ又五郎が行方尋ん爲に數馬又
 右衛門方よさしに又右衛門數馬一人しては危助太刀せんとて明る年の三月まで荒木がもと
 に止め置三月又右衛門暇を乞得て郡山と出にけり是は甚左衛門が悪口しけるによれりともいへ
 りさて數馬又右衛門は攝州丹生の山田に妻子をあづけ置四月は江戸へ赴き所々搜りけれども行
 方を知ず甚左衛門をば時々見かけまかども誠の仇にあらざれば打討けるを甚左衛門は嘲りける
 とかやゝて又丹生の山田に歸り明る寛文十一年 大猷院殿御上京により京都に赴き方々尋ね
 けれども行あせずまた丹生の山田に歸り其後又五郎有馬へ行と聞有馬にゆけども行あはず奈良
 よ甚左衛門が妻子ありければ十月朔日奈良へ行て潜にきくよ甚左衛門が方に又五郎かくれ居て
 十一月六日江戸に赴くよしなれば其夜おし寄へらとせしが奈良は商家の事なり途中にて討べし
 とて數馬又右衛門主従四人甚左衛門がほどりに立明しけり六日の朝先は甚左衛門中は又五郎の
 の跡に櫻井半兵衛是は又五郎が妹登なり弓鉄炮の上下二十人なり七八町ばかりもつゞきて行に

又五郎其日は伊賀の島が原といふ所に宿す四人見知れてはと裏の道もなき所をふみ破りて三町計も行過宿をからんとすれば怪しみて島が原へ心得られける人ころ四人宿をりつれと告遣はすりの由を又五郎が旅宿へしらせたり數馬も又右衛門も敵よさられじと夜深く出て山おもりして伊賀の上野小田町にしばしの宿とかり最期の酒もりして待かけたり着はなしやといへ是となりともとて鱒を三ツ出す智頭なと數馬目出度といひて主人に酒の價ととて金子二十兩ばかり投出し與ふれば驚うたり是を限なれば何のためにはせんといふ處に主人の女房かつをふしを出す數馬心の付たるよとていたゞきけり又右衛門着たる羽折を脱て主人に與へ庭に飛出てをせり上りくしたる有備すくやかある男のけふを限りと思ふけしきあらはれて只鬼なともかくあらんとみゑしと人後と語りけり七月の朝又五郎島が原を出て上野にかゝる又五郎は思ふ仇なれば數馬討しむべし甚左衛門は又右衛門立向ふべし半兵衛は又右衛門が若黨武右衛門數馬が若黨孫右衛門兩人かゝり合へしと相定の間近くなりければ又右衛門真先なる甚左衛門に詞をかけ飛か

一説に又右衛門いかよ甚左衛門日比のさうだぬきを見んといひも終らず一刀に切さし一馬より切て落す甚左衛門刀半抽かけしと二の太刀よりち留たり半兵衛は鎧の上手と聞えしかば鎧をさらせず馬より下んとする處と又右衛門一太刀切たりけれどもあそ手よてかり立たり

從者鎧かつとり半弓をも射かけ渡間なく切てかゝりしかば二人爰と最後と相働さける所に又右衛門かけ來りて多勢を切まく半兵衛に渡り合終に切伏たり此時又右衛門刀を打折けり其刀伊賀守金道が作りけるとぞ數馬又五郎と切合ける處に又右衛門は從者を追ちらしかけ寄く數馬よくせし助太刀はすまじきやかなひがたくはあらんと詞をかければ

一説に又五郎がうしろへまはるといへり
 數馬飛込で又五郎を討とめたりある處に藤堂高次の士彦坂嘉兵衛上野に在けるが數馬が親類なりまかばかけ來る其外上野の士あまた集り數馬又右衛門主従とも嘉兵衛方に引とりぬ又五那甚左衛門其場に死し半兵衛は息かゝり居けるを引受たれば程なく死す數馬十三所手負武右衛門痛手よて其皮半に死す孫右衛門十所かひたりくと藤堂家に聞ゆく三人は嘉兵衛方にしばらく有しが藤堂式部がもとに年月を送る式部死して藤堂出雲に預けらる寛永十五年六月江戸より仰下さる、旨ありて數馬又右衛門も藤堂家よ下し賜はりけりかくて江戸の彦坂平六郎數馬が一族たりしがゆゑ藤堂家に申乞て松平藤五郎光仲のにももらひ賜はりたり因幡へ趣くより同年八月七日上野を出る藤堂玄蕃弓五張組の騎士二十人玄蕃の騎士五人藤堂出雲外よ母衣の者組の騎士四十人彦坂嘉兵衛鉄砲頭三人鉄砲九十挺弓唄二人弓四張田中源兵衛歩行の士二十人引續て伏見因幡の屋敷にわくられしかを請取のために因幡の士横川治大夫父子鉄砲二十挺邊渡越中

鉄砲二十挺伊吹源太兵衛父子鉄富三十挺宮脇平太を衛門弓十挺伊賀の五八中二兵衛父子
 鐵砲二十挺松尾惣之衛門父子伊賀の各六人福田權兵衛歩士の十、宮脇徳兵衛田中六郎右衛
 門其外戸の者二十人出逢く九州に趣く伏見より川舟よ下り海上の船、備前、烈公、とよ
 し出し玉ひ松平輝澄の方より船を出し大小三艘幡州城越り陸路を經州主より馳走の士出
 迎ひて草深き所をあらせ道筋山々遠見を出し夜は簀をたかせ鳥取の城ま、三とま、よて引とら
 せられけん仇討ける時駿馬二十七又右衛門三河合武右衛門四、岩本孫右衛門三十八歳とぞ
 〔五百三十二〕 京極若狹守忠高雲州松江に有し時、出雲隠岐二州の主なり、其士に箕浦備後内藏
 兵庫多賀孫左衛門といへる者あり備後が末子與四郎といひしに容貌美麗よて兵庫か子八左衛門
 と情交淺らす孫左衛門が子孫兵衛斯ともしらず與四郎に心をかたりしに會て無二いひかは
 したる者ありと答うれせでにてはうはの空なり名を聞てやみなんとかさねていひしかを名を聞
 せもし其人に害やせんと密に入左衛門に告て孫兵衛備後が宅に時々來ること、幸なれとて或夜
 與四郎が部屋に呼入れ、懇よもてなし酔の後八左衛門出逢て孫兵衛をさし殺しとめを刺足の
 うちを割て屏を城下の瀬津川にすてたり夜中しる人なし瀬津川の下に屍れ流れ寄たる、見て誰
 がしわざともしられざると、自然に箕浦内藏に指さす人も有けれを孫左衛門物て辯據しとい
 へどもかゝる類の天命にて虚説なき物なり、兇議と遷られよ沙汰に及ばすは備後兵庫と相手なり

と、認に及ぶ忠高目付を以て密に聞ば果して實なり多賀が、認理なれば棄置がたけれども内藤
 箕浦兩人忠ある鷹臣なるも立退けとひそかに知せて箕浦父子内藤八左衛門雲州を出奔、けり
 孫兵衛に兩人の弟あり此時十三歳に十一歳なり兄の後父の名をもて孫右衛門といひ弟は忠大夫
 といへり忠高卒去刑部少輔忠知に六萬石玉をり播州立野へ所替あり多賀其比京極の家を出て兄
 の仇を討んとすされども幼かりし時の事故内藤を見知らず父孫右衛門が介抱し置ける浪人問
 市大夫思を報せん事此時なりとて附従ふ孫兵衛が妹の子三田右衛門八も相加れり備後は土井大
 炊頭に奉公しけるが年老て死す與四郎は二十にて病死す八右衛門は小笠原信濃守忠修に奉公し
 祿五百石與へられ仇あるゆゑ他所へ遣され勤勞もなく只あらん事快からず人なみの奉公を
 許され走は永く暇を玉はれといふによりて江戸の供の列に入られたり若仇に討れあきて小笠原
 家高天神にて走廻りよかりしもの、子其外徒の者六人内藤に自然の事わらば助けよとて附置れ
 る或時内藤土井大炊頭のもとへ使者にゆく多賀出て歸るさに途中に出迎ひたり八右衛門人數多
 く引つれ馬上にて來るを問あれころ内藤よとわしよ若打損じたらに馬上にて馳ぬけんも討り
 がたしとて孫右衛門市太、前より忠太夫右衛門八後よりかゝり其間近くなり孫右衛門笠笠を
 脱ぎはなしか八右衛門と詞をかけ頭を額へかけて切る忠太夫二尺七寸の刀をも、飛か、り切る
 きられてそりさまにふみ出したる鑑忠大夫が拳に當りて指の骨白く出たりとなんさて内藤落る

處を孫右衛門たのみかけて切忠大夫馬の下をくぐりて切とめたり孫右衛門始向ふより太刀付し
 かば内藤が徒者幾刀となく切られどもさのみ深手ならねば散々に切合たるを内藤が徒者薙刀を
 もて右の肩より腕かけて切しかを左の手に刀を取直したる處を薙刀にて袖口を左右へさし貫く
 孫右衛門が刀間近くありしかば薙刀を捨てたり薙刀はかせになりぬ敷ケ所の疵は蒙りつ遂に倒れ
 て立あおらず忠大夫右衛門八市大夫内藤が徒者あまた切伏せ追拂ひ忠大夫かけ寄り孫右衛門が
 頭と抱きいかにも問われと思ふ仇討おほせぬれば思ひかく事なしと息絶たり内藤を始として
 其場に七人一二町逃て倒れ死する者二人多賀兄弟三田間四人が手に掛く都て九人を切殺しけり
 忠大夫統三ヶ所三田間も手負ぬれども三人とも死す孫左衛門が面に編笠をかけ居たるにあたり
 の人出合奉行所へ連れて行き御法の帳面に記して討ざる趣を尋らる忠大夫もさより承り及び
 たる事ながら萬一それゆゑに事もれて討もらさん計りがたし本望遂なば何の身命のをしかる
 べき御法に背きたりとて刑罰にあふとも附届に及ぶべからずと必死に兄弟とも思ふ極めて候と
 少しも屈せぬ申述る又三田ハ近き親しみなり間の助刀刀はいかゞと問る問承り浪人なりしを多
 賀の恩以て年月を送りぬ孫兵衛殺されし時兩人の弟幼少にて仇を見知ず候ゆゑ手引して討せ
 候多賀の多年の恩を報い候へばいかに御符を蒙り候ともいとひ申さぬ志にて候と申述る何れ
 も申處尤至極せりとて歸されけり孫左衛門卅三歳忠大夫卅一歳右衛門八十八歳市太夫孫兵衛

死後廿一年の後寛永十八年辛巳江戸大炊殿橋の敵討と世にいへるを是なり其比土井大炊頭の邸
 に近きを以て一橋を大炊殿橋と云けるとなり多賀忠大夫後、難栖と号す右衛門八後茂左衛門と
 いひ老年に後茂入と稱ま正徳二年九十歳餘にて讃州丸龜に病死す此始終の忠大夫が物語りたる
 を書記しぬるを傳へてここに記るせり

(五百三十三) 大久保長門守 一本松平周の敵討の内所に奉公せし女中老ある時心得過ちし事有し
 を女の年寄大に怒り罵りて打擲に及びぬ中老親にもた、かれし事はなきものをと獨言して部屋
 に歸り文書く下女にもたせ親のもとにやりぬ二人の女房一人は残りあんどいふを大事のことい
 ひやる文なりとておして二人とも出しぬ道にてわやしき事上常に二人一度に出されし事も覺る
 ず顔色も只ならず有しとて文と披きみるにしかくの仔細にて自害するなりと誓のせたりさて
 ころ有べけれど一人のはしたものはとくゆられし我の歸りておしとむべしとて急ぎ歸り
 てみるにはや自害して有しかば夜の物打かけ小脇差の血を拭ひ我懐にさしてさあらぬ休にて
 年寄の部屋に行かたり申度事候只今部屋に來られよといひし程なく行へしといひければ歸
 りてはまた行敷度に及びしかば年寄來りて夜の物をあくればあけに染て中老は死してあり其時
 女房これは今日の事にてかくは自害に及びたる也主の仇よといひもあへず小脇差を抜て刺殺し
 けり兩人を殺したるならんとさへて亂し問る、にふところより文ととり出し證故はこれにて

候と始終を詳にいひ述べて主の仇を討留つ思ひかく事もなく候とてさわぐ色もなま長門守女
中と残らず並べて彼中老の下女の事いかと思ふにやと尋ねらるゝに忠義といひ景なげある事と
いひ驚き入たるよと口とろろへていひければいかせん各存る旨申候へとなりしか
をいかで存よりたる事の候べきと申すさらば此度の次第はむるに詞もなしといふべきなり年寄
死して事もかげぬれば 則年寄に取立て然るべからんとてよび出して賞せられけるとぞ

演劇にて鏡山と題して演ずるもの即ち是れなり聊かの事を云ふになん

〔五百三十四〕 松平筑前守忠之の士に林田左文といへるは戸田流劔術の妙を得たり足輕の卒二
十人預り居たりしに或時足輕六人人と殺して出奔す左文は折節馬に乗て有去が告來るゝ聞則馬
にて追付たり足輕これを見て立向ひ追つかれたりとは他國に参りて申すまじこれよりかへられ
候て然るべからんといふ六人敵對せばたやすく切脇べし今日まで頭たる者なれば切まじとの心
なるべし林田静に馬より下り六人同じく人と殺したれども 必其罪の中輕重あるべしさらば殘
らず罪にすべしとも思はれ我こゝに來るは其是非を糺し明かにせんとなりとて歩みよる處と
一人たをかられじというて刀を抽てかゝる林田刀の柄に手をもかけず足をも動さず卒爾なりあ
やまらずなどいひて間近くなる時無分別者かなといひく刀を抽やいなや手の下に斬倒し皆靜
りて能き敵せし故斬たるす敵せずば何とて切んやといふを又一一人斬てかゝれば愚なる者ども

哉死狂ひするかとてわざとめこしざりにしる相込ひ處を飛ちがへ一太刀斬伏たり皆氣を
ゆるの一度に斬らせじが爲にかくして二人斬倒しつ殘る三人ばかりは肩かゝと思ひて又
一人斬伏せ一人手負せ一人は蹴倒し手負せたる者蹴倒したる者とは其帯を以て縛り馬に打
乗せ先にたゞ歸りたり是は色の者なれば筑前一國の士多く林田が劔術の門人なり馬瓜源五右
衛門は鉄砲自發白中の妙く究めたる者にて武藝を好みしごとく林田が劔術を學ばず其故を問へ
ども打笑ひて答へず林田後符ありて死罪に行はれけり馬瓜親き友に林田は姦邪なり何事を仕
出さん計りがたしと思ひたりき劔術を學ばん事は我も好み望む處なりといへ共己の師弟とな
りて後難に臨て坐ながら見ては有べからず其姦邪にくみせむ士乃道にそむくべしおねてより交
を結ばざるにしかじと思ひたりしお愚西も千慮の一得たりとぞ語りける

〔五百三十五〕 青山内膳守宗俊の士に石井宇右衛門政春といふ者あり因幡守大坂御城代の時宇
右衛門も從へり赤堀遊園といふ醫ありて其從源右衛門を養子にしたるが石井にゆかり有て頼
みたりしかば心得たりとて大満のかたはらなる寺に借て常に宇右衛門がもとよ來り親しくした
りしよ年遅く赤堀鎗を弟子に教へてかたこなたせしよ源右衛門が鎗いまだ精練ならず人に教
へん甲覺東よしと石井いけるを赤堀川ひざるのみならず石井に立わはれよといふ石井汝がた
めよこそいへ老たる身の立あはんも無益よといへども赤堀怒りて止らざればいざとて立合ける

に手もなく石井勝たりしかば赤堀口としき事に思ひ延寶元年十一月十八日の夜宇右衛門が出た
 る隙に忍びて來りかくれ居てかけたる鎧を盗み出し宇右衛門が歸るを待て戸の内に入んとせし
 を突通す刀を抽て鎧とたくりけれども十文字の横手よか、り深手にて倒れ死す從者何者ぞとい
 ふを一太刀斬て源五右衛門わ逃去けり石井が嫡子三之丞は番にて有合中次男彦七郎は臥居たる
 が出んとすれども部屋の戸と源五右衛門かけ置たれば踏破て出けれども源五右衛門行方しらず
 なりぬ三之丞暇を申て彦七と共々青山の家と出源五右衛門が行方と尋れども更に何方にありと
 も聞わざりしかば源五右衛門が父遊閑も同意にてやあらん此者を討ば源五右衛門隠れ居じとて
 同年の冬江州大津にて遊閑と切殺しこれより京九條の橋伏見の京橋大津の町に札と建重忠の人
 を殺し逃走りたるは士の法に非る故大津まで父遊閑を殺せり汝が爲にも仇なれば逃めぐらん事
 を止よ首を刎べし赤堀源五右衛門へとて石井兄弟が姓名としるしけりされども源五右衛門出わ
 はねば所々を尋ねめぐれども見出さず美濃守原村の犬飼瀨兵衛が妻ハ三之丞彦七がをばなり是
 を便にして爰に有しに彦七は犬飼が一族にひつましからず遂に我一人仇をうたんとて室原村
 を出ふけり延寶八年の冬瀨兵衛の妻死して其翌年正月三之丞從者孫助を安藝へ使にやりて唯一
 人犬飼の家に行て湯のみしける處に源五右衛門忍び來り 戸の側より隠れ居て一刀に三之丞に
 深手を負せけり頃は天和元年正月廿八日の夜の事にてくらさはくらし二の太刀に三之丞が刀持

たる右の腕を打落す三之丞伏ながら脇差を抜て左の手にて赤堀が股を突きうらよて死しけり座
 敷に犬飼の甥の茂七といふ者來り居たるに赤堀飛かへりて一太刀斬たり犬飼出付て十文字の鎧
 をどり赤堀と突てかゝる赤堀わきなる堀よりとひて刀をさげ後、堀を破らんとするを犬飼見
 て鎧とどり直し後に廻らんとせ 透間へ飛出犬飼が眉間へ切る犬飼は老たれば重手よて倒れ
 しかば赤堀と討もらせり一族相集り松明を燈し追るくれども行方を知らず犬飼は赤堀が大坂にて
 宇右衛門へ聞打よしける時十文字の鎧にて突殺せしかと其鎧にて突殺さんと思ひけれども所狭
 くてものにさへられ討もらせり悔みけるぞ從者孫助その明る日踊りて此と聞齒がみして自
 害せんといひしをさまぐよいひなだのけり彦七も此由を聞彌 怒りもだはしが伊豫の親類の
 方へ行とて海上にて風あひ溺れしけり赤堀はそれより尾張に行伊勢の龜山板倉隱岐守の士清
 木安右衛門は親類とれべ忍びていたりしに頼て板倉に告て祿白五十石あてへて赤堀をねらふ者
 あるべしと其用心は甚厳なり他感より來る者は一夜の宿と禁制し見しらざる者へは城門の内
 に入れず赤堀名を改めて水之助と稱す宇右衛門が三男源藏友時四男半藏善政とて兩人皆幼少よ
 て安藝の松平安藝守の十田中左近右衛門石井九太夫迎へとり丹羽三太夫が許にて養育す三太夫
 が妻は石井家より嫁せし故なり我男の身せらば赤堀とさがし出し首を刎此鬱胸とはらすべきに
 爰の身年老て志を遂ざる事いふへ詞なし二人慈なく人となりてとく父の仇を討て黄泉の怨を

散せよと日夜よかたり聞せしのみ二人遊び戯る。心なくひたすら仇を討べき志一筋なり。従
 考孫助は石井家の恩を請し身なれば赤堀龜山にあり、聞てさましく身とやつし魚を賣り或は
 鏡とさとなりて龜山へ行けれど宿とるべきやうなく城中に入がたれば時々隙際ふた、ずみ
 けるを人あやしみ赤堀が用心細く嚴なり天和二年源藏龜山の有様を傳へ聞我既十五及べり
 龜山へ行て父の仇を報ゆべしといたずらま遠方に有て月日を過さん事の口をしきとて一族さま
 しくにたし止れども聞入ずしのびて廣島へ出る時思ふやう龜山の士いばかりかあらん殿の仰
 まて赤堀よ心と合すべし大運つよく父の仇は討たりともいかでかのがれ得ん萬死の中に一生も
 なき身なれば幼少より育のれし伯母は母の恩よりも深し人よ知せずして最後の盃せばやとて
 物持の序に近比身も壯になり酒も嗜みて候へども思ひ立志のわる身少まものみ候事もなしけ
 ん幸に外より來れる酒少したまはらんやとへを盃をいだすおしいたき、覺ゆる涙の
 落けるとおふる袂にぬくして還書を以婢女に授け置舟に乗て備前岡山に至り田上某かもと
 としはし居て天和三年大坂へ歸りて或は關坂の下に趣きて二年の時龜山に入べき謀をたくみけれ
 どして龜山に行又京へ歸りて或は關坂の下に趣きて二年の時龜山に入べき謀をたくみけれ
 ども中々思ひもよらざりしかば江戸に趣き隠岐守の屋敷の下部へ奉公せんとすれども此も屋敷の
 法嚴にて力及はず又龜山に行又常州上總下總までも其門を求めて奔走す其艱難誠にいふよ詞も

なめる水止まらぬして廣島へ出て七年過しぬ始は甚行路を行きやみけるか天の護りや有け九曜
 經て後は寒暑をも能堪へ雨露にたぢ濡れ風氣に胃さるれども藥をも服せず其身愈々健なり或
 の野山に打伏或は飢渴に及べども志したる一事は膽を大にしてちつともひるまらず半瀬が今も
 ばし成長してと一族にし止るをも願す元禄元年廣島を出て兄と一所より龜山に入ん謀を
 成すかくて板倉隠岐守卒去有てければ江戸の屋敷より取いらん手立せんとて半瀬江戸に趣き日
 備となりて屋敷に時々行けれど其便を得ず
 従者孫助は年老病重なりしかば藝州にゆけといへども何の面目有てか仇を討得ずして廣島に
 歸るべきといふ源藏汝辛苦に病付たりいまだ敵討べき時の至らぬや斯まで心を盡せども其
 甲斐なきこと口とまけれされども親族たちの見つき給ひるも一日の飯料米一升をかし價はす
 れば僅に一日四分にやわたるべき日々をせ廻り口に食し肌をおほはんとするに足ざるはいふ
 よや及ぶ草履の價も其中よりこそ出せ又手よりを求るにも費なきにあらざる艱難のあり
 こそまもこそまやかに安藝の一族にかたり聞せよとかきくとき語りければ廣島に行ぬ下部の
 身として年久ま命を塵芥より軽くしてつさまとひたる志をいたはりけるが終は病重くて
 元禄十年廣島にて死しけること
 關東江戸に趣きて半瀬が手たてに心合せ又上方に歸り兄弟往還誠は誠如し或時は僅の商

散せよと日夜まかたり聞せしかき二人遊び戯る。心なくひたすら仇を討べき志一筋なり従
 考孫助は石井家の恩を請し身なれば赤堀龜山にあり。聞てさましく身をやつし魚を賣り或は
 鏡とさきとなりて龜山へ行けれど宿とるべきやうなく城中に入れたれば時々隙際ふた、ずみ
 けるを人あやしむ赤堀が用心懸難なり。天和二年源藏龜山の有様を傳へ聞我既十五及べり
 龜山へ行て父の仇を報ゆべしといたずらま遠方に有て月日を過さん事の口をしきとて一族さま
 しくにたし止れども聞入ずしのびて廣島へ出る時思ふやう龜山の十いばかりかあらん殿の仰
 まて赤堀よ心と合すべしと運つよく父の仇は討たりともいかでかのがれ得ん萬死の中に一生も
 なき身なれば幼少より育れし伯母は母の思よりも深し人又知せずして最後の盃せばやとて
 物帝の序に近比身も壯になり酒も嗜みて候へども思ひ立志のある身は少まものみ候事もなしけ
 ふ。幸に外より來れる酒少したまはらんやとて盃をいだすふしいたきき。覺ゆる涙の
 落けるとおさふる袂にのくして遺書をば婢女に授け置舟に乗て備前岡山に至り田上某かもと
 にしぼし居て天和三年大坂の賑半藏へ十歳なりしをば廣島より有り断て源藏をれより旅人の体
 をして龜山に行又京へ歸りて或は關坂の下に趣きて二年か開龜山へ入べき謀をたくみけれど
 中々思ひもよらざりしかべ江戸に趣き隠岐守の屋敷の下部は奉公せんとすれども此も屋敷の
 法嚴にて力及ばず又龜山に行又常州上總下總までも其便と求めて奔走す其艱難誠にいふよ詞も

なかるべしとかくして廣島と出て七年過しぬ始に甚行路を行なやみけるか天の護にや有けん程
 經て後は寒暑をも能堪へ雨露にたち濡れ風氣に冒さるれども藥を服せず其身愈健なり或
 い野山に打伏或は飢渴に及べども志したる一事は膽を大にしてちつともひるまず半藏の今し
 ばし成長してと一族れし止るをも願す元禄元年廣島を出て兄と一所より龜山に入ん謀と
 なすかくて板倉隠岐守卒去有てければ江戸の屋敷より取いらん手立せんとて半藏江戸に趣き日
 備となりて屋敷に時々行けれども其便を得ず

從者孫助は年老病重なりしかば藝州にゆけといへども何の面目有てか仇を討得ずして廣島に
 歸るべきといふ源藏汝辛苦に病付たりいまだ敵討べき時の至らぬや斯まで心を盡せども其
 甲斐なきこそ口とまけれされども親族たちの見つき給へるも一日の飯料米一升どかし價にす
 れば僅に一日四分にやわたるべき日々せ廻り口に食し肌をおほはんとするに足ざるはいふ
 まや及ぶ草履の價も其中よりこそ出せ又手よりを求るにも費なきにあらずかゝる艱難のあり
 さまもこそまやかに安藝の一族にかたり聞せよどかきくとき語りければ廣島に行ぬ下部の
 身として年久ま命を塵芥より軽くしてつきまといたる志をいたはりけるが終は病重くて
 元禄十年廣島ひて死しけるぞ

源藏江戸に趣きて半藏が手だてに心と合せ又上方に歸り兄弟往還誠に織が如し或時は僅の商

となり又或は近江の茶うりとなり或は伊賀の山家の者といつたり詞づるひ身のふるまひを
 く似習いんとこころがけたりけりかくて元祿九年半藏板倉の士中井才右衛門のもとに下部
 となりて奉公する便と得て龜山よ平井歸りしかば半藏も供して龜山に人事と得たり源藏と上方
 に赴き伊勢に行通ひて人目と忍び半藏に逢て仇の有様を傳へ開平井病て死す平井と赤堀と親し
 みあれば其出ひよ來る道よて討んとはかりしよいかにか有けん赤堀來らで其手だても空しく成
 め其明の春半藏に暇をやりしかば又龜山の辻四郎兵衛がもと奉公す辻江戸よおもひく半藏江
 戸に供せんは志ああらすといへども龜山に居んには所の人請人頼むべき人なけれを辻が供し
 て又江戸よ趣く源藏目を病て久しく療養よ日と過せしうち半藏江戸より又龜山に歸り忍びて
 出逢て仇をうらやへども便と得ず半藏又江戸よ趣きしかば源藏も又江戸に行て町奉行川口攝津
 守のもとに参りて仇うつべき願の書を出す是元祿十一年十一月十六日なり半藏は何とて來らざ
 るやと問るゝに弟は所々志し候所を立めぐり候中に煩ひ出し候旨を申す仇討んと志し候は年久
 しく成ぬいかに今までは申出ざるやと問るゝに源藏聞て兄弟とも幼少にて敵の有家を存せず近
 頃承り出したる事の候て申出たるにて候又承り出さる前に申出んには外へ泄聞にて仇の彌
 かくれ候ひなん事を恐れての事に候といへば尤なりとて帳記してさて攝津守聞届られぬ江
 戸御城の下馬のもとよても見付たらば討とめよと許されしかば辱き由一禮して又松前伊豆

守の許に至りてければ攝津守よりいひ送られし故帳よ記してをく首尾よく仇討れ候へと色代す
 それより源藏は龜山よ歸り奉公せんと便りを求めけれどもたへ金銀を惜まず賄賂すとも他國
 より來る人の奉公すべき請にたつべき人は思ひもよらず況や一金の貯へなければ源藏もいかん
 ともす可やうなし元祿十三年源藏又江戸に趣きける處に周防守のもとに夏目八兵衛といふ者あ
 りもと上總の人なり下部を召置んとせしかば半藏たよりありと夏目に告て駿河の者にて候が伊
 勢の太神宮に参りたき志あり給金は給はらでも奉公せんとたばかりけれを夏目さらむとて源藏
 を下部よしたりけり半藏此時は下村一學といふ者に奉公し兄弟共に龜山に趣く是より兄弟日夜
 にかくれ忍びて心を合せ仇の伺ひけるが其後に石黒仁右衛門が下部よ至て實儀なる者あり源藏
 が心まめやかなるを見て甚心安かりしかば請人と頼みて事よくなりぬめて鈴木柴右衛門と
 りふ者お奉公しければ夏目此人ハ勝れたる者也と詞とそへたり半藏も下村よ仕ふる事なみく
 ならぬを主人いたはる事大方ならず其父に頼増れしは半藏を若黨にして刀よ衣服と添て與へ
 たり兄弟今は龜山にありて時を待處よ赤堀が常番の歸路を討べきと定めて元祿十四年五月にも
 成ぬ八日は赤堀が常番なれ午の刻ふ代りて歸る處を討んとせしにどく歸りて志と空しくすさら
 ば其明る朝の歸路よとて各用意したり源藏は殊よ下部のすべき事多く更にいとまなし宵に少
 の間暇を乞得て町よ出それより龜山の八幡宮は道のほとりなれば立寄て心しづかに着込と着神

前に向ひ今日必父の仇うたせ給へど伏見宮を出れば夜ハ明たりしかば二の丸に行空眼のとし
て半藏を待居たり半藏も出んとせし時主人の用ありてたらく成たる處に友達の來りければ着込
着る間もなく主人より囉ひたる刀はかけ備のくし置たる刀ととり飛出て二の丸にゆけば兄は半
藏を遁しと待居たるふ來りければこゝろの中に勇みけりかくて赤堀其日唯一人廣間より出て
歸りしかを兄弟打つて二の丸の外なる石坂門を打過ける時赤堀が後よりかけぬけて前に立ふ
さがり石井宇右衛門が子源藏半藏なりと詞をかけ源藏抜うち赤堀が眉間を切赤堀我刀の柄に
て請とめたれども二の太刀すかさず切付たる處は半藏かけ來り赤堀が頭にふかくと切付たふ
る、處とた、みかけて切たりしかば立もあがら老死したりけり源藏乗かゝり刺貫てとゞめを
さし從者とは追はらひつ兄弟は初赤堀が父と打たりしより仇を報ゆる次第しるし置たるを常に
各一通帯の中へ入たりしと取出し赤堀が袴にひさみけり所は長臣板倉空右衛門が宅のあたり
なり我もくんと馳あつまるべし年頃日頃思ひ暮せし赤堀とば討とめたり今は世に心にかゝる事
なし刀の目釘のつゝかんはせ切あひて尸の山をなし年久しく赤堀と誓固せられし恨をばらさん
と兄弟いひかはし追くる人を待せも更に來る人なし半藏其時愛よて切死せんより城外に出て追
手をまぢ死狂せんさらば京都にも聞ぬ旅人の往來に聞ぬて安藝の一族たちにも兄弟本意と違し
事を知るべきなれば城門とたばかりで遁れんといふより早く半藏先またちかけ出るを源藏うし

ろより詞をのけ汝が用の事急ぐと主人のいはれしごとくいそがれよといひく打連て城門を出
れば番人も聞咎めず黒門をのがれ出て京口に至り龜山の西のこの茶屋に至りければ追來る
人あければさては遁れ得ん事も難からしされども馬に乗て追來らんに兄弟走て息切たらんよは
思ふはせ切合れしと静に關川をわたり山に登りて見えたせども追來る人なけれを龜山の西南一
里半ばかり行て小家に立より草鞋を買もどめ津の城にゆく者なりとて道を問ひわらはを案内者
よして十町余りも過て椋本の松原見ゆればかば童をかへし又道を引たがへて北なる野よかりて
食物をしたゝめてゆくく小川を渡りしかば口噉て太神宮に向ひて幼少より思ひ入たる仇を尋
たる事の悉さし廣島を出しよりながらふべしとはゆめく存もよらざるに愛までのがれ出た
るは神の護と伏見伊賀の上野に出それより山城の笠置の道を問伏見よ趣き京に至り諸國の一
族のものと龜山にて仇打たるよし書しるしいたぐり岐曾路より江戸ふ趣き五月廿六日町奉行
保田越前守のものと行て仇討たる由を申せば尋問る事ども有て越前守自出て兄弟に始終詳
に聞いたをらる、事大かたならず懸懸給はりてそれより松前伊豆守のもとに至りしに過にし年
達たりし人よ出て悦びあへり青山の蘆州は屋敷に往て石井清太夫がもとにあり青山下野寺の禰
子筑後守此由を聞 即使を以て兄弟を引とられけり其後下野守の領地其頃濱松なりしかば遠州
よ至り兄弟ともに寵せられ源藏後重き職を命せられけり

〔五百三十六〕 隴州丸龜京極備中守高豐の弓足輕尼崎幸右衛門といふ者あり同じ弓足輕岩淵傳内といへる者幸右衛門が妻に心をかけ幸右衛門があらざる時さまくにいひたりしに中受ひくけしきもあしく耻らしめけるが又或夜來りしに肯はずして有し處も幸右衛門外より歸りて此よしを見傳内無禮者と怒りしは叶はじと思ひ刀をぬきて幸右衛門を一刀切て逃る女房は小女をいだき居しがそこに棄たる夫の脇差をぬいて傳内が逃るを追かけしかども迹のびしかば脇差を投つけたりしに傳内が右の肩より少し疵付ぬ冬の末夜にて雪のふりぬ終に行方を知らず女房立歸りみれば幸右衛門深手にて死したりしるばあけき悲しむ事大かたならず傳内は重罪の者として尋られしかども行へをしらず幸右衛門妻の妹なる關根元右衛門といふ者のかたよ月日とたぐれり只朝夕に夫の最後の有様口としく思ひつゝ歎きのあまりに病つき翌年二月に死しけり三歳になりける女口をばの養育にて十二歳ふなりて名と里やといふ元右衛門夫婦を實の父母なりと思ひ居けるに或時こまやかに父母の事ども語り聞せ汝が母は我爲小姉なるがせめて此子が男なりせば仇を討つ事も有べきよ口としやと明くれなげきて空しくなりぬと語りけるよ里や大に驚き今まで夢にもしらする事ども也御いたわりによりかやうよ人とありぬる事の忝きよしいひてさめくなくより外の事さして十六歳になりける時兩人に向ひ江戸より参りて奉公せらるる父母のために諸國の觀音より參詣せよと存る也萬一ツも仇うつべきあらはれみをも神佛に祈

らばやといふ兩人いろく止れども中々とまるべきにあらざれと京極家の侍村瀬藤馬といへるが江戸より趣くまたのみてさしそへ遣はす里やは江戸に趣き番町の永井源介といへる御旗本のもとに奉公に出る源介の劍術の弟子あまた日毎に來る里やが勤る有様殊外心をつけて奉公するに誠に珍しく思ひいかなる者の子にやと尋らるゝに里や詳に事の子細を語り父の仇を報い申さん志に候よし涙を流し答へければ源介つゝと聞て女なりともなせか父の仇を討さるべきまず我劍術の弟子とあれとて教へ試るに才氣有て思ひ入たる志なれば劍術もはとなく進みけり夫婦離いたはり愛せり二年に及て主人いへるは愛にのみ居たらんより主人をまた取換て仇と尋ねよかしとさまくぐに心と附たりしかばそれよりこ、かしこ奉公せしは既に十二年と過て主人七十人に及へり其後本庄ある坂部安兵衛といひし御旗本の家に奉公せしよ小泉文内とて五十餘なる男の有けるが平生酒のみにて壯年の事ども何くれと語り出し大言せしが若氣よて人の女房に心をかけたりし事より其夫を切て棄たりしが昨日のやうに思へども早く月日も過行けるよと物語せしを里や聞ていか様にも似たる事もあるよと思ひたしかに聞届ん物をと心の中心と思ひてそれは嘘なるべしといへばいひてか偽をいふべき今まで人にいひつる事はなげれども年月は過つ國の隔りぬ委き事いさ歸るべし我は元證州丸龜にて京極家の者なりとて有つる次第をいひて幸右衛門より子有つるが女なりと覺えたればふるる事もなしとて肌をぬけば里やが

母の投つけたりしと聞へし脇差の痕も見口の里やは只今愛ふて討なんど立わがらんせしじがも
 討そこをひたらさいか、すべさと思ひ返去て何となく其坐立其明の日永井のもとにゆきて
 かくく語りければ源介大に悦びて則りやを打連て京極家の村瀬が方に行告しらせたりけれ
 ば則備中守も申て 公に訴へたり坂部のもとも公より糺さるゝに彌紛るゝ事なかりければ
 文内を京極家おわたし給はりのまづ文内をを獄に入置鳥越の下屋敷に虎落をゆひ日を定め文内
 を獄より出して勝負の場を出されたり村瀬里やを連來りぬ肌への鎖の着込を着白ちりめんの
 鉢巻して一尺あまりの小脇指も二尺三寸の刀さし虎落の中へ入村瀬里やも用意せよといふ其時
 里やいかに文内汝が手も懸たりし尼崎幸右衛門が女なり今更出合たる事天道の冥加也と詞をか
 くれは文内おのれに語りおとされてふるさ事をあかしたるは無念なれども此刀にて父も子も手
 にかけんぞと三尺ばかりの刀を拙て切合けるが横に拂ふ刀にわばらと切れ一の太刀面おあたり
 びるも處と里やふみ込て乳の下まで切さげおしふせて靜首を切二十餘年の間志したる仇只
 今討て父母に手向候と僉使にいひたりしを感せざる者なし備中守も悦びて俸米かろき身の娘を
 れども孝行氣をげさばかりの士にむいのでか劣らんとて思女に付られけるとぞ
 此物語諸州にゆく人ありて問聞しに更に虛ならず尼崎が居たりし所は丸龜の風袋町といひし
 處とぞ

〔五百三十七〕 伊丹播磨守康勝の寛永年中御勘定頭三人を置れし時其第一に撰ばれ農とつとめ
 商を通じ民と俱に利と同一しけるはまされ高し其比商人の運上金を、公儲にさしげ奉り甲斐國よ
 り出るいな帝と一人しおきなふ者ありけり然るに又富る商人ありて内々告て今までの人の奉る
 處の金に一千兩まして運上を奉るべし某一人に紙商ふ事をゆるし玉ふべきよしと申す此事尤
 然るべしと議定ありしに播磨守一人其心得ずとて聞入す執政の大臣たちも此由を告て乞ふ
 事止す三年の後執政の人々播磨守にしかくの事請ふ者あり同職の人ゆるすべしといへども獨
 用ひられぬとさきく誠とや天下の富を以て見る時は千兩の金は少き也といへども是を以て國用
 を足すに資なしとはいふべからずいかにとありしに播磨守承り今より盜賊のふこらぬ道だに
 候ひなんにはいかにもゆるし申べしと答ふ人ういかなる子細かと問るゝに播磨守日本のもろこ
 しよりまさりたる物は紙にて候中にもは赤帝と申ものは貴賤一同に一日もあくて叶はぬ物にて
 候其價の賤しければこそ世のたすけとはなり候へ望み請ふ者今まで商人の奉りしより千兩の金
 をまじなん事此千兩はいづくより出すべき此紙を商ふに價を増てあさなふを又うを買てあきな
 ふ人いくらも候はんよこれらも同じく利を得て商はんよとせんよはこゝに加はりのしこに増て後
 よは價甚貴くなりなん凡一帖の紙價一二錢とまじたらんには富る人れ愛とするよは足す食
 賤の八一日に得る所の利誠にすくなく僅に一二錢を細めて妻子をも養ふかくあさまじき者とて

も今日までは、紙やらの物を常に用ひ來り價忽にましたればとて更に何物を以てか此に換べき然らば是らも又おのれがわれなふ物にてもわき其價をまして其得る處の利を以ては紙を買より外の事候へ凡一物の價増す時と萬物の價同じく貴くなる事皆定れる事なり價貴くなるに至て求んとしても得ざれば或は飢或は寒ゆるにも及ぶべし飢寒せまれば必死す死すれども守る處を失ひ候はぬ士より上つゝあたの事にこそ候へ下さまの人は飢て死し寒えて死す盗しても死す死は一定なり同じく死する命いかにもして一日も世にあらまほしく思ふは賤しきがならひなりさてこそ盜賊を起る事にてこそ候へこれは只農と商との事のやう候へとも士の召仕ふ奴婢等も物の價貴くして求得ねば盗も事同じかく盜の世は盛に成なん時は至つてはいかなる政事ともてこれをどめ賜はんやこれらの盜は貧より起る事にて候へよりも又民にゆるして利を争はしめ其利上は歸するやうよし給はんは天下其風靡き從ひてよき人々共に利を争ひ各其欲する所を得んと思はんこれらと盜せぬ盜人よて其禍盜するより増りてある候へ天下とたもたせ給へば天下の寶ことごとく御實なり且上の費をだよ省せ候ひなんには一年の中はつむ所の御實幾千万兩の事にてか候べきうれは僅千兩の金とまさんとして盜賊起り世の風みだうに成候はん事身の内を切て飢と救ふに腹に滿る時身終るといへるに同じかるべし大零物の價の貴くなりゆく事は國部に運上の多きが致す處なり某既に年老ぬ願て死し申べし相構へて

この後もかゝる事申す者ありとも人々よくこゝろを給へといひければ人々感じあへりけると云

伊丹康勝一國經濟の原理と説き得て妙なり其論風泰西經濟學者の口氣あり彌爾、霍塞的之を聞のば古昔東洋にも斯る經濟家ありしか思はざりきと舌と巻きて感ずらん青砥藤綱嘗て夜行しけるよ十錢即ち今の一厘と水中に遣せしるば乃ち炬と買ひ水と照して之を勞しけるに炬直五十錢即ち今の五厘を費しけるにぞ或人得る所失ふ所と償はばと云ひけるに藤綱の云ふやう五十錢吾失ふて八十錢得は誰か之を得る者ぞ我れ六十錢を取て以て世に益す亦大得ならずやと鼻蠢めかしつ、誇りし事一國經濟の美談として傳ふる所なれども此の事は決して經濟の利得となすこと能はず其人夫の勞力と云ひ炬と云ひ皆孰れも宜しく他の實用になるべきものを費したるなれば天下の爲めに取れても十錢を得んが爲めに全く五十錢の炬直を費し又其人夫の勞力を費したるにて其得る所失ふ所と償はざることを固よりのことにして一國を取りても一人に取りても更に差違なく損失たることを疑ひな一畢竟藤綱は天下の財産を唯貨幣のみと誤認し其他の物品の財産なることを知らざるに坐するのみ本章康勝の格言の如き藤綱の認見とは同日の談よあらず記中一商人の鼻紙一手の賣捌を願ひたしと云ふが如きは即ち今日の專賣特許おして而して今日に於ても亦許されざるものなり專賣特許條例第五條に曰く軍用よ

必要なるを認め又は廣く用おしむることを必要なりと認むる發明は農商務大臣よ於て專賣特許を與へず又は既と與へたるものと雖ども之を取消することあるべし云々と鼻紙の即ち廣く用おしむることと必要とするものなり況してや彼の商人の願ひし所の鼻紙は世既に公に用おられ公に知られたるものにして彼の人の發明に係はるものにあらざるに於てや如何ぞ專賣特許の權を與ふべきものならんや日本經濟家の鼻祖を青砥藤網ふあらず左りとて今日の田口卯吉氏を待て始めて之を知りしにもあらず即ち伊丹康勝其人鼻祖なり

〔五百二十八〕 佐藤五郎左衛門直方は學問にて世に聞えけり酒井忠清賓客のもてなしに禮せられて終りけり井伊掃部頭のもとにまねられていまだ掃部頭の前に出ざる中長臣と物語せし時直方が云大事を論なく候聊のわざも傳授ならひと申事の候て師に就て學び稽古と思慮とも盡して後ころ得るものなるよ日本人は大事の事に學ぶといふとなく傳授稽古といふ事もなく自己の料簡にて事を濟しぬるとあり各たちは存候にやと問ふ曾といか々と問ければされば國家の政にて候萬民の命よか、リ一言にても國の安危に候至極の大事ゆゑ聖人の教へおかれたる萬世の鏡ありといへども今の大名君臣ともこれに心つかず只自己の思慮にて思ふまゝに政をなすは危き事の至極なりと語りけり直方が論ことお格言といふべし予筆をこゝにとゞむるは意なきにあらす後の此書を讀む人これを察せられよとなり

〔五百三十九〕 長篠合戦に武田勝頼五月廿一日に人數を出す信長見給ひ敵も多勢なり三萬可有と宣ふ

家康公仰に此度の軍味方勝なり敵丸く打圍ときは六ヶ敷散て人數を多勢よ見するは勢を頼とする間大方勝ありと御意あり酒井左衛門尉承て尤なる義と奉感なり

〔五百四十〕 家康公被仰候は小身の武士着料の具足を威させ候とき胴籠手具外は鹿相にいたさせ候とも胃とは念と入る心得がよさを子細は討死ととげたるとき胃は首と一所に敵の手よわたるものなり然るときは死後の爲にては無かどの仰有候となり右の上意に付上田主水入道宗古物がたり致し候は士に討死を遂げ首に成たるときの義と心に掛たるがよきなり去に依てさかやき杯の後さがりなるは佗言つらになり見苦き間若き衆中必後高に刺たまへ明日は必一戦と知れたる前日は首を奇麗にいたす心得第一の由かたられし

〔五百四十一〕 家康公或とき上意に今とき人の頭をもするものども軍法だてをして床几に腰をかけさいいひを以て人數を差使ひ手ともよおさず口の先の下知をりあて軍に勝たる、もると心得るは大きな違なり一手の大將たるもの味方諸人のはんのくほはありを見て居て合戦などよ勝る、事よてまなしと被仰候となり

〔五百四十二〕 小幡景憲の物がたりに大坂陣のとき堀殊のほかふかくして攻がたきとき本多佐

渡守とかく金堀を入て堀ぬき可然と。家康公へ申上られければ尤なり然るべしとて仰付られける。土佐或は伯耆佐渡より呼上せよと詮議のとき佐渡守はわく右の國のもの不功たらんた。甲州の信玄金堀度々勝利ありとて甲州より金堀をよび已にほらせんとす。城内は此由を聞て甲州より金堀来て此城を堀くたくとて躍きけるなり。其内に和談に成けり何か五年や十年の内よて七十間など有堀をほりかたからん是にて敵の氣を奪ふ通理なり。遠州高天神の城より小原與八郎と申人籠城しける也へ早速金堀よて矢倉をほり落したるゆへ城をわけわたす敵城へ堀はめの矢倉の下まで堀付るなり是にてくづる、又くづれざるるときは鉄砲の薬を百貫目にても横切火繩にて付るなり我籠城へ敵ほらばそのときは必その堀方には伏かまり番あるなりまたほりくる方へ此方よりも或は三筋にても四すじにても堀かくるなり是にて大かた通なれを金繩妙に覺るなり又はやき物をもて候くる方ちんくくと云なり兩方よりほりあふとき互に分るなり是とき味方歸り此方より多くこゑを流す也。

〔五百四十三〕 野間左馬之進物がたりに田螺を折しきの片隅に三ツ又また隅に三ツよせて兩方へわけて一夜置くとき其合戦勝負のまけの方を追てみかちの方は進み出るとなり大坂陣の城中秀頼木村大野と稱して益の一方に三ツまた一方に關東方。家康公井伊藤堂と稱して三ツたにしと置一夜置くよかならず關東方の三ツの田にし内方の三ツのたにし追込たりとなり勝負の吉凶を兆ふと是よりよきはなしとなり武備志よも此光を出したり考ふべし。

吉凶の卜ひは野變人の所爲秀頼も秀頼なるが之と物知顔に語物る野間も野間又之を筆録たる。湯淺も湯淺なり嗚呼淺き慮なる野呂間の奇合笑ひに堪へたり。

〔五百四十四〕 老功の士の曰く古法は相言葉を夜々替ると云と大なる偽なりと心得べし。未々までのとゆへ中々毎夜かへがたし大坂陣のとき城内相詞の山關東方は鹿と唱へたるに一陣すむまで右の相言一ツ宛にて濟たる事なり是證據なり大坂落城のとき城中より女中大勢あちたるに焼とさへ云は寄手は助ると心得て銘々旄々を唱へて出たるとなり。

〔五百四十五〕 康公駿府よ於て御伽衆の中より大坂御陣以後去る五月七日若江村あわて井伊掃部頭家來三人よて敵一人を討とり三人相討と有之よ付掃部頭委細よ吟味相違候へを相討に極り今一人の申口相違よ付掃部頭不忠被致仕置候へと申付候よし申上られ候へはその義にはとかくの仰もなく何も聞へし惣じて物とに余計といふとあく切つめたるとくなるは宜しからず。就中武邊などの義と余計の有候が能なり子細は織田信長いまだ小身の節佐々成政と前田利長と兩人にて敵一人をつき倒し成政利長よ向ひりの方敵を追つき倒されたる義なれば首上られ候へとなり利長我らと敵を突倒したるといふ迄にて鎌合の義は御自分なれを首をその方揚られよと互に辭退仕候所へ柴田様六も馳つき左やうに兩人辭退の首ならば中にて我申請べしとて首と上

げ我ら高名の證據のため兩人も来り被申よきて三人同道にて信長の前へ出て糧六申候はこれ
兩人にて敵を突倒し首をとれ取まじきとて吟味合候所へ参りり、り首を某とりて参候と申候
へは信長公御聞なされ三人とも大に賞美いたされ候よまなり右二人ともに武邊に余計あるゆへ
なりと仰られ候なり

〔五百四十六〕 天正十年十月柴田因幡守退治に上杉景勝出馬にて候先手本條越前守村上出雲
雲守新津加治等初合戦出られ方上橋といふ所迄敗軍仕り候景勝旗本迄因幡守のりか、り大事に
をよぶ所を上杉義春後入道へ旗本前備にて罷あり候景勝の紺地日の丸の旗ととり三十間ほど先
へおしいたし義春手廻の士とも下馬いたさせ鎧とりて膝の上よをき芝居に折しき備へと立候
に付因幡守引返り引とり候ところを義春備と以て慕ひ追討仕候このとき宇佐美民部勝行は胃付
の首ニツまで高名してその身も手負て旗本へ来り勘當赦免のため景勝へ目見を願けれども父の
仇の未と思はれ目見とゆるされず 是は民部父駿河守定行景勝實父 民部はニツの首とも涙をな
がし罷あり候を上杉家の平林内藏助井上三郎兵衛落合清右衛門其場に有合せよく見て後にかた
り候此とき民部は義春手に付出陣仕候由

〔五百四十七〕 紀伊大納言頼宣卿は文武の賢將にて其行跡も凡人にあらず大阪冬御陣に二條の
城にて大阪表御手遣の御備定あり頼宣卿十三歳になり玉ふが進出玉ひ御先手を我らよ仰付ら

れ下され候やうにと御のぞみあり 家康公御感にて城強くして先手せめわぐみ候は、その方仰
付らるべしとて御機嫌なり五月七日大阪落城のとき御旗本後備にて尾張大納言義直卿と紀伊大
納言殿も御着陣以前合戦終り大阪落城なり茶臼山よて 家康公御前に頼宣卿御出有て今日御先
手にて無之ゆへ手に合不申無念至極に候と頻に御落涙なされ松平右衛門大夫正久申候は今日御
手に御あひなされず候とも御せきさされまじく候御一代よわかよふのと幾度も御座あるべくと
諫まいらする頼宣卿聞し召され右衛門をはつたと御にらみ候へて我ら十三歳の時が又有べきか
と御申 家康公聞しめされ御涙と御浮へ御感悦にたへす常陸殿その言が金言にて候との御稱美
なされけると石川榮入もれがたり也

〔五百四十八〕 高麗都南大門合戦大明季如松三十万騎にてきたる小早川隆景一組二万との合戦
なり初め李如松は吳惟忠張世爵等十万余り山海關と出鴨綠江とわたり朝鮮に入小西攝津守行長
大將にて大村新八松浦刑部卿法印宗對島守等二万八千にて楯籠る平壤城をせめ破り小西と追て
朝鮮の都さして推來り朝鮮の人馳加りて三十万騎なり大友義統も桐山城にありしが聞逃きて落
る小早川隆景は開城府にあり都より五里を阻てその間大河あり其とき黒田長政久留米秀包も
白川と襄陽にあり小西大友も去の城にとまらる隆景は開城府に踏止り大明勢三十万を引うけ一
戦して相果へく踏止り玉ひけるを惣大將備前中納言秀家卿石田治部少輔三成増田右衛門尉長盛

大谷刑部少輔吉隆より飛脚をもつて早々都へ引とらるべく候大河間に阻り難義仕と候間此表へ一所につばみ然るべくと申越され候へども隆景は我日本より渡海の初より再び日本歸朝の心なし本朝大半納り國家無事なれば疊の上にて病死せんかとは是のみ心よか、りしに幸よ此陣出来何よりもつて満足なり隆景年五十八死しても惜からず大明の三十万よか、り合切先より火花をちらして合戦し討死と遂にと老後の思ひ出これに過す我たとひ討れたりとも日本の御弱にも成べからず大明三十万を此所ふて待受べしとて少も動じ玉はざりけれを大谷刑部少輔只一騎開城府へ來り隆景對面し貴殿の御心底古の名將勇士も此上過べからず但し貴殿二万をありにて三十万の圍を受けて徒に討死せられんと本意なきなり速か、り王城よか、り物軍と立備御身物軍の先手よて快く合戦し死を善道に守り玉は、り迎も死せん命忠義ともに全からん早く都へ引入玉はるべきむね諒けるよ隆景心ふくし左候は、り何時よても先手は隆景一組申請候間他の望許容有べからずと刑部被請合候は、り王城へ引とり申べく候大谷とのだんり我ら請人よ立候よし申され候に付白川に有し黒田長政へ此旨申遣し早々開城府へ引入申へしと告遣しければ長政も久留米秀包も小西行長大友義統に道にて文祿二年正月十五日に開城府迄引とり申され候に付隆景大谷黒田久留米小西大友同道にて川を渡り王城へ引入候隆景は右の所存也へ都へ入らず南大門の外碧蹄館に陣とり居られ候同月廿六日大明廿万騎夜乃内よ河とわたり都表へ推語候其夜の廻

り番は隆景相備立花左近宗茂なり家老十時傳右衛門五百余にて曉打廻口に出るよ大明季如松が大軍と鬨紛にはたと行わひ立花が勢駈ちらして引取候を大明勢追かけしよば十時傳右衛門返し合せ五百余散々に相た、かひ残らず打死する雜兵四五人走のへりて此旨告る立花左近宗茂則隆景并に毛利七郎兵衛元康久留米秀包高橋筑紫へ告知す隆景則王城へ注進備前中納言秀家卿三奉行何れも追々に南大門口へ馳來る夜はや明けけるに遙に見わたる大門季如松の愛去と一里ばかり備り段々に立て只今掛らん氣色なりうり乃勢淵江の湖の漲來るがとし先手二里余よ廣がり勢子並を立跡も先もみち旗よて夥しき共中々なり秀家卿三奉行よ大敵と野合の合戦いか、なれば都へ引籠り防然るべしとありしを立花左近眼といからし太刀に手をかけ大音上げかやうの大軍に籠城して叶、かからずとも角もあれ野合戦にさわめ然るべしと申されける依之合戦にきこまり候諸大將先陣をのぞまるに隆景眼に角を立我先陣たること最前よりの約束なり他の望あるべからずとて隆景そなへを配られる先陣栗屋四郎兵衛大將にて村上彈正野島掃部等三千なり三の先は井上五郎兵衛大將にて佐世石見守吉見大藏大輔等三千なり三番は隆景旗本一萬にて備立花左近久留米秀包毛利元康六千は奇兵として隆景の右の方三町ばかりよ引退てそなへけり其日の合戦火花とちらし粟屋井上押立られ候を立花左近横鎧と入れ大將季如松が旗本と突崩せしかを隆景も正面より切かけ候に付大明廿萬物敗軍になり首數三萬八千余隆景一組へ討とり候隆

景立花手柄申モ中々疎かり此とき立花左近と甲付の首二ツ直取の高名にて鞍の鹽手に付木刀鐮本五六寸のつて鞘へ不入と帯己も馬も朱になりて先手よりしづしづと参られけるに粟屋四郎兵衛備の前と打過とて具備の組頭村上彈正野島掃部を呼かけ立花申けるは今日は立られまじき所を推立られ候とありけるを大將粟屋四郎兵衛聞もあへず立らるゝとも立られ返すとも返したり我備は今日の合戦の花になりたると返答する聞も粟屋を譽さるはなし扱立花左近は隆景の旗本へ参られけるに立花自身の高名二ツまで較べ付られたるを見て隆景取あへず立花見と候と譽られ候へば左近聞玉ひ毎事仕まるとの返答なりよき自讃の言となりと其場にて聞人かたられける此とき合戦未始らざる時分黒田長政只一騎歩待七八人にて隆景旗本へ見廻られ候隆景見て長政は幸の所へ御こし候粟屋四郎兵衛井上五郎兵衛を先手ふ申付候物馴ぬ者どもにて心元なく候貴殿先手へ越され毎事御指圖下され候へと申され候長政喜悅の色見へ畏り候とて先手へ越さる頃ハ正月廿六日辰刻なり朝鮮は寒國にて寒事不斜長政は大綿帽子と着し甲は郎等に持せられしが隆景の先手へ出るると綿帽子を脱甲を取て着られしに隠なき例の水牛の甲なり牛水の角本ノ薰皮よて結び付られたり扱甲の緒をしめ先手へ出られ候へを隆景旗本數千の士卒ども長政先手へ御こま候うへと今日の軍に勝たりと惣軍勢勇みたるひとなり長政の年を問へばろのとき廿五歳なりろのよわひにて如此人に懞思れ候は中々凡人にてはあるまじきなり長政常に宣ひ

こは立物指物は海老は子にして差たる斗にては働恥か馬にのり立行ときよぬけて落るものあり立物ノ穴をあけ受子も穴をあけ草にて結付べしとなり自分大水牛の立ものもふすへ草にてゆひ付られたるを其とき見たる人のたりき

有名なる隆景背向陣は即ち此の南大門の役として其事は既も過卷に見たり稍々其記する所を異にすと雖ども豈に亦重複の濫輯ならずや

〔五百四十九〕 伏見にて越前黃門秀康卿御屋敷へ於國といふかぶき女を召てのぶきおどらせ御見物あり水精の珠數をゑりにかけ舞たるを御覽なされ水精は見苦しとて御具足の上に御あけ成され候珊瑚珠の珠數と下され候於國が舞を御覽なされ御落涙有之御意ふは天下に幾萬の女あれども一人の女と天下に評せられ候は此女也或ハ天下一人の男に成と叶はずあの女にさへ劣りたるは無念なりと仰られける

何巻にてありつるの开は確も記憶せずと雖ども本章の事は既に過卷に見えたることを疑ひあも吏すくも重複の濫輯を謂ふべし

〔五百五十〕 津田長門入道道慶物がたり日根野織部が唐冠の甲の立もの鐘鬼耳二尺五寸脇立なり但右の耳の立物は半分より折掛たるやうにする太刀打に構ゆへなり

〔五百五十一〕 島原落城の砌り本丸の堀下へ着者なし鉄砲稠しかりけるに絶筋浪人平塚勘兵衛



越前秀康
於國哥舞
妓御覽
圖

越前秀康
於國哥舞
妓御覽
圖

重近只一人押て塀際へ付尾藤金左衛門湖紅の大吹貫をさして掛付平塚と共に塀下へ付面もふ
らす塀を乗どころを内より鍵長刀までさんくんに突るの内尾藤が口に突込るれにてよむること
ろを又真中と鍵にて突抜終討死平塚勘兵衛も尾藤と同じくのり掛候を鎧よて突落され已に討
死と見へける細川除印内乃内美庄右衛門掛合塀の内より平塚を突伏居る敵をつきたとし平塚
の助る平塚また起上り塀下へ付その働さ比類なし但し平塚勘兵衛重近は秀吉公御いとま平塚因
幡守吉就が甥なり乃美庄右衛門は小早川隆景家老兵部大夫宗勝が孫なり何も逸物の末孫ゆへと
沙汰なり

〔五百五十二〕大坂落城のとき細川玄蕃頭興元鎧を合すると申上る後に家康公仰には鎧合すな
と云と左やうに節々ある物にあらす此茶臼山の北に見へたる勝曼院の山は佐久間不干筒井順慶
荒木攝津守村重籠りて大阪の門跡建如上人より攻候とさ本の鎧合たると聞及びたり其外上方に
ての鎧は聞及ぶよそのとき勝曼院の鎧は昔より言傳ふる杉なりの鎧と聞召たりと仰られ候佐久
間備前守罷り出上意の通に御座候同姓不干手にて其日は兩度鎧御坐候天正六年五月三日の合戦
よて御坐候俄朝は茶臼山の西に見候難波の具敷塚の合戦にて不干が與力佐久間久右衛門同英之
助梶原彌三郎水野源太郎水岡小三郎六人鎧と合候その晩勝曼院の山よて不干が内忠水亦市江原
彌介浮見藤介長瀬彌五右衛門四本鎧合申し候長瀬は只今小右衛門と申加賀にまかり有候と申上

る家康公聞し召扱々利常は能兵を抱持候と御意成長瀬小右衛門は黒母衣銀の牛の舌の出し
にて勝曼にて鎧を合する後門跡降参し大坂城衆寄手小屋見物に出る長瀬が印銀の牛の舌の黒
母衣を見村日外鎧を合たる母衣爰にありとて小屋前に人多く寄て見たると也

〔五百五十三〕福島左衛門太夫正則の内伊藤伊右衛門武田勝頼を討奉りし士なり伊右衛門が咄
とて津田幸菫かたられけるは甲州滅亡のとき勝頼御父子のしれず瀧川左近一益先手よて國中を
尋ぬる田野の奥天目山の麓は落人の男女五六十人隠れこれあるよしにて押寄たるに皆々兵糧を
つかへ働事不自由なり何の手もかく討取然所へ瀧川旗本より早飛脚有之勝頼公信州高遠へと
りこめ候間早々その本より罷歸べしと告るゆへ是まで來たる證據に首とも馬に付歸るべし府
中へ歸たれば勝頼公高遠へ籠たるも風説にて沙汰なし田野にて取たる首ともはみな溝堀へ捨る
然る所に地下の夫ども其溝の前よて皆頭巾をとり頭を地に付一禮して通るみなく見て己らは
溝堀へ何とていんざんにするやと笑ふ百姓ども申候はあの堀中に屋形勝頼公御父子の御首御座
候數十代の御主と存禮仕候とてなく皆々驚て其首どもを取上勝頼公御首と云を城介殿御座の
間の床かんなかけよのせ置殘の首どもも庭よおき城介殿宣ひける勝頼の首と瀧川内にては誰
かとりつらん同くは一益が甥瀧川義太夫が取たるならば其聞へも可然と仰られまづ瀧川義太夫
をめし奥の口へ召され勝頼の首と御見せ是は汝がとりたる首かと御尋義太夫よく見て是は拙者

とり候首にては無之と申則庭へ召され四十計の首と御見せ候へばその内首一ツ義太夫とり出し
是は私のとり候首とてゑり出す 則 土屋惣藏が首なり義太夫を御戻しなされ伊藤伊右衛門を召
庭の首と御見せ此内に汝が取候首は有かと御たづね伊右衛門 則 延らず見て申上候は比内
には私とり候首は無之と申上る御座の間へ召勝頼の首を御見せ候へば伊右衛門見て私とり候は
此首と申城介殿汝がとりたる證據はいかにと御尋首の切口に私のり候馬栗毛粕毛の毛血まじり
とり付有之候田野より鹽手とくへり付道にてすれ候に付如此と申上る御覽候實も栗毛の馬の
毛付たりその時城介殿御意には汝は冥加ふ叶たり勝頼の首をとりたりと被仰となり近年の書物
どもを見るに事々しく働いて討死し玉ふ様に書たるもあれども我其ときと小平治とて瀧川方に
居て伊東伊右衛門とは傍輩なればまのあたり見たるよ左様よてあ 勝頼は鎧櫃に腰をかけ太刀
よて防た、のひ玉へども飢疲玉ひ何の働もあく伊右衛門が討取ると板倉周防守重宗宅にて津
田幸菴物かたりたり

本章も亦前巻既に見る所唯少しく詳略の差あるのみ一にして敢て異なる所なし重復の濫輯
極ると謂ふべし

〔五百五十四〕 塙國右衛門重之峰須賀阿波守至鎮手へ夜討のとき木村喜左衛門畑角太夫牧野湖
太屋右馬介四人鎧を合するこの内田屋右馬介持道具長刀之圖國右衛門は長岡監物御宿越前守に

向て田屋が手前鎧を合するとは申上られ間じくと云族ありいかと問御宿が曰く鎧も櫛の柄長
刀も櫛の柄なれば同じとなり長刀は鎧より短けれバ櫛つよき働なりと僉義して濟せり木村喜
左衛門落城のとき討死角太夫ハ稻葉美濃守正則へ抱る牧湖太は本多中務忠刻へ奉公田屋右馬介
は五郎左衛門と名をかへ紀伊大納言頼宣卿へ召出され五郎左衛門後は田屋半右衛門と云ふ
本章も亦々重複の紀事にして笑止の外他事なし嗚呼是れにても書と編むと云ふべきか豈に其
れ然らんや故に宜しく廢棄すべきなれと稽々筆勢の異なる所もあれば可笑ながらも其儘之
と存しぬ前後若干の重複紀事皆然り

〔五百五十五〕 天正十五年四月一日筑前岩出城守居之 秀吉公一時責に仰付られ候御先手蒲
生氏郷前田利家なりりの二番備は羽柴三河守小將秀康佐々陸奥守水野忠重なり山半分御上りの
とき落城の間御上り候と御無用利家氏郷より申し来る秀康御年十四歳なり手に御逢無之とて無
念よ御召落涙なされ候を佐々成政深く感じとすが家康の御子にて候今日手に御逢無之とて御せ
きをされ候て落涙なされ候我にも様々諫申候よし 家康公も似申候と登申候とき秀吉公仰に
は左やうにてなし秀康は我養子なれを武勇の心人は皆々秀吉に似たるゆへなりと仰られしとな
り

〔五百五十六〕 越後浪人大井田監物以後越前實門家康公に御使番よて奉公仕るうら仁の筆記に

曰越後國は代々上杉家領候處に永正十年六月廿日上杉顯定と家老長尾爲景と妻有庄長森原にて一戰候顯定討死し爲景則上杉鹿流上條の上杉定實を婿にとり我子長尾六郎を定實の養子分にして顯定の跡に立上杉と繼する爲景八男位王長尾景虎後号謙信その性尋常替り利根聰明にして大膽なるゆへ爲景氣違ひ出家にせんとて下越後椽原淨安寺へ遣す後見金津新兵衛供して下越後へをもむく米山越なり米山は上り四里下り四里なり猿王嶽に八歳あれば歩侍の背に負れて山を上る米山の畔に草葺堂あり米山寺といふ所の堂の椽に休て破籠とり出し猿王にも參せ供の侍ども中食る乳母夫の本條美作守も供なり猿王幼ければ堂の椽に廻り遊び居られし米山は大山にて味たじの藥師城よりは頭城府内を目の下に見をろす所なり猿王は故郷府内の方とながめ涙ぐみて繼母の讒言よて涙入ると無念なり成人して本望を遂む此筋にて一戰すべし殊ふ此山は府内を目の下に見たらし能陣場なりと宣ふ本庄美作守金津新兵衛舌よふるひ感涙と流しるの言を思れ玉ふなど悦と限りなし是則天文六年五月猿王八歳のときなり九年の間猿王淨安寺よて學問せられけれども出家の心なし天文十四年四月長尾爲景宇佐美駿河守定行兩旗よて越中へとりかへられ候松倉城主唐人兵庫山下左馬介こもり候と宇佐美駿河守三千にてとりつめ責落し山下左馬介の外二百余人討果し松倉城ののり取直にうの城に罷あり候爲景は八千余よて放生津の城へとりかへり候この城には徳大寺大納言實規卿の外公家衆九人籠られ候るの子細はそのころ京都

大亂にて諸公家衆みな摸寄々々に國々へ落らる、徳大寺殿を越中國島山尾張守尙慶の外孫ゆへ其便ふて越中へ御越候四月九日爲景は城をせめ落し徳大寺實規を始公家九人上下七百余打果し城をのつとり候所へ島山留主居推名神保遊佐郡瀆等加筋の一揆どもをかたらひ後卷に出候加筋は一向宗一揆よて候偽て降參仕と申道を作りおとし穴をかまへ引入れ候爲景加州へ押候とき推名神保遊佐等加州へ揆よこり合候爲景人數ととし穴へかへり大かたうたれ爲景も討死惣敗軍にて士卒散々よなり越後へ引退ら候宇佐美駿河守定行は十一日ふみ止り敗軍を集め堅固な板倉をひき拂ひ越後へ歸陣する越中勢めと付んと存候へども宇佐美の武勇よをそれて一人も付す爲景討死すれどもその子上杉六郎國を治て別條なし此時猿王の十六歳なり爲景討死と聞忌中の追善惡よ沙汰し三年過は義兵を上越後を打平へきと工夫とめぐらし宇佐美駿河守をかたらひ候に駿河守も猿王の器量只者よあきを見うけ一味仕り候天文十六年猿王十八歳元服して長尾平三景虎と名のり同四月九日三年忌を吊ひ終て義兵を上椽尾城にたて籠る宇佐美駿河守本條美作守馳加へり候兄上杉六郎これを聞て妹婿長尾越前守政宗よ七千余付て椽尾の城へ取かへり候景虎矢倉に上り寄手を遠見して今宵寄手は引とるべきものいろあり其退口へ突て出んと申され候宇佐美駿河守申候へ長途を寄來り候敵いかに空く引とるべく候哉突出候所いかと異見する景虎の白晝より寄手を見るよ軍兵計よて小荷駄なし長陣の敵にてなしと思ふなり突て出よとて

夜半に切て出る景虎の積のおどく政景退口へ切て掛り候間政景勢惣敗軍になり候景虎勝よりの
 て追打にして國中へ討て出る宇佐美本條も押續て打て出柿崎の下濱陣と取是により兄上杉六
 郎八千よて米山を越て出向ひ候景虎一戦とどり組候とき坂織部 後号 鬼小島度々介吉江織部をば
 じめさんくくに戦ひ候所へ宇佐美駿河守慶をとり横入よか、り本條美作守は備なりと静々とか
 り候とき六郎打負敗軍仕米山へか、り府内へ退 申候景虎しづく真先は追討に進み申さる
 米山東坂本にて景虎申され候い何といたし候やとのほかねむ候間しばらく休打立べくと小家
 へ入てねふり申され駿河守これを見てこれいかななる御にて候や今敵を追立候とは竹を破が
 ごとく其勢 失へからずと米山を追越候は、頭城郡へ打出府内の城とのりどるべく候早打立ん
 と催候へと景虎は眠しとて高野かいて臥申され候駿河守様々異見すれども不聞臥し申され候
 故了簡もなし運の極めと云扱景虎は上杉六郎人敷米山峠と三分二はと越たると思ふ恥分早貝と
 吹せ景虎打立米山へ追上り候如 案 六郎は下り坂に 趣 候所追付六郎人敷龜坂より被追落死
 するもの敷を不知後、宇佐美諸人よ向て今日景虎米山坂よて逃を不追して眠候を各合點致され
 候やと尋皆々合點仕らすと云宇佐美が曰府内勢米山へ逃上るとき是と追て若敵に返られ候とき
 は上手に敵と受て進せば返事必定なり景虎その段を積り眠る真似して登坂と敵に登せ濟ま下り
 に趣候とき追打玉ふ我若年より數十度のと逢しとて其積りなきに景虎十八歳にてこの智慧

は軍神の化身かと存候と申候景虎を府内城とせめかとし六郎に腹切らせ其のち申され候は主君
 の跡をつぎたる兄をころし候上は國と取望なしとて府内を出高野山へ 趣 申され候關の山迄出
 候とき上杉家老りの談合して曰景虎なくば越後に重りなく我儘になり他人の手へ越後を取らる
 べくとて追かけ引留る景虎居給はずと越後はたれか治べく候や上杉代々の骨折水になり候はん
 と心外なりと達て異見する景虎さらば以來とも我ら下知を背まじくと起請文を宿老中いたされ
 候は、歸へしと云其とき上杉家臣廿六人己來とも御意次第仕べくと起請文を書きこよて立
 歸春日山の城に入上杉宣實の上條に居玉ふと申合越後を治られ長尾越前守政景を引付上州平井
 の城に管領上杉憲政へ隨ひ申さるに付扱年頃不義ある者野心多き頭を上るもの大身とも十六人
 林泉寺ひて切服申付る然れども前の起請文あるゆへに餘人とかく言とならず景虎越をふみ静め
 これ皆宇佐美駿河守に相談して如此 謙信は上杉を繼たる兄を殺し子孫を立てると天道に背とて
 十八歳に出家して不識菴心光謙信と號す廿八歳にて上杉憲政の讓りを請上杉政虎と號す永祿三
 年五月上落して公方光源院義輝公より一字拜領し輝虎と改む菊桐澤瀉瓜の紋の幕網代の興文の
 裏書御免にて關東管領よ成越後佐渡東上野越中能登飛驒加賀迄手をうけられ候と凡人にては有
 べからずと云云

本章も亦同じく重複の濫輯豈に呆然として驚愕かざるを得んや餘り敷多き重複に評註者は之

れが評文の體格を變ふるに苦しむなり此の如くなれば之を拾遺と名すけんより寧ろ拾重と號したる方適當ならん

〔五百五十七〕 天正十八年秀吉卿北條家を退治として小田原へ發向の前方 家康公も頓て御出陣の前駿府近邊花盛の候を御覽遊よし御城中御矢倉の諸方能みへ候所へ御上りなされ御老中御供よて御菓子御酒等下されそは後御咄の次でに各へいつぎ尋候はん存ながら取紛候先年長久手一戦のとき晝の合戦は我ら勝にて小牧の要害へ取入居候處秀吉の二重堀の陣場より一戦の心掛よて馳來られ候へども日暮に及び小牧城攻は明日の義と有て其夜龍泉寺川原に野陣を張居られ候處を夜軍仕かけ候は、然るべき由各す、められ候へども我ら不用して其夜中に小牧の陣所へ引とり候その夜仕かけ候は、大間と必ず打留申べきと有心ふて候か左様候は、勝利は疑なまど存られ候やと御尋につき忠勝申上られ候は直政康政は晝御一戦にも逢候へとも私には小牧の御留主よ居申一入夜軍望しく存候大間を打どめ候處までは心付申さばと申上らる井伊柳原も申され候は龍泉寺表へさし遣し候伊賀甲賀の罷歸り上方勢の夜守夜合戦の備もなく無法の陣取と申候よ付御仕掛候はば御勝利と存奉り候秀吉を是非打とり候處までは考申さずよし申上られ候 權現様御聞あそばされ各左様有べくと兼て存る處なりその節夜軍にかゝらば必勝へしとは思ひ候然ながら太閤を打もらし候は、さんぐのとも思ひ候右趣と用ひざるなり其

子細は秀吉は一度天下一統の大功を立んと含まれ候然るに長久手十萬の勢味方織田合てもわづか三萬に不及これにて戦陣も舉なるに晝の一戦かつと十分の仕合なり又夜軍に勝て秀吉を打洩し候は、至極の負をいさごとり天下の望より先徳川家を潰すなりとの所存いで候は、無益の義ありと存らる其心人ゆへ此度も北條を押たをし夫より出羽奥州まで手に入天下一統の功立べりとの心掛と相見べくと仰られ候何れも感心奉りしとなり

青山伯卿六雄八將論中織田信長の論至極の妙論にて天下と取る者は城抜くべくして必ずしも抜かず國取るべくして必ずまで取らず彼我の勢いと審かにし利害の源を究む云々と云ふの趣き今本章徳川家康の言ふ當て、亦適するものあり初戦に打勝て又次戦に勝利を得べき機ありと覺りつ、遠き慮りありて之を爲さるものへ是れぞ即ち英雄の英雄たる所以の心算にて山陽外史も亦徳川の天下を取る大坂よあらずして關原にあり關原にあらざして小牧にありと云ふ所以あり英雄の心算窺ひ知るべからざるものあり

〔五百五十八〕 朝鮮の役に黒田長政後藤又兵衛尉基次を物見につかわさる基次やがて馳向ふ處に其道よ一ツの河ありてその河を打わたり敵陣の近所まで行んとせしが日本の馬の沓川上より流れ來るを見て早川上の味方の勢の川をわたりしと推量し川邊より直よ引返して長政の前に飯味方の人々の内早川をこへ玉ふと存るなりうれゆへ敵陣近く參りて物見仕るにも及はず立か

へり候いそぎ打立せ玉ふべしと進めしかば長政大に喜び玉以後藤基次が武勇の功者なると今に
 だめざるとながら心早き物見の仕様かき出かしたりいや打立と云玉ひけり基次是より前にも朝
 鮮よて長政の先手山の端を廻りけるが敵と出合せ戦ひしがそのときこのこへを揚る後藤聞て先
 手のたゝかひ味方打負たりといふ長政き、玉ひ山のたゝかひを汝爰に有ながら味方の負しとは
 何を以て知ぞと尋ねらる基次承りさん候味方のときごへ次第よ近く聞ゆるは一定負けて引と覺
 へ候勝軍ならば向へ進て関を上るも遠くなるものお候と申もあへず味方敗軍の兵ども朱になり
 て追々さたれば又兵衛がさつする處神の如しと感せらる又其後に敵の陣みへさる所なりしに逃
 向ふに馬控れびたゝしく見ゆるいかに軍の勝負は何とか有らんと宣へば基次かしてまり敵が
 打負け引と見へ候其故はす、ひ敵の武まほこりは此方へかゝりて黒みてみへ北る敵の武者はこ
 りは向の方へのりて遠きゆへに白く見ゆるものに候遠きは色うときゆへに白く近きは色の
 濃うがゆへに黒し是は白みて見ゆるによつて敵の敗北とみへ候と申すその言少しもたがはず敵
 の勢敗軍にれよびけり晋州の城攻には別して先登よす、み勇をふるへり加藤清正も後藤が武勇
 を大に感じられけりそれより戦功を尽しければ黒田長政筑前入國の後嘉摩郡大隈の城におひて
 一萬八千石の采を玉はりける猶また後の大坂の役その勇戦と見つべし
 朝鮮平安道の役川上より日本蹈の漂流來りしを見て味方の既に打渡りたることを推知しぬる

者過卷よは毛屋主水とわり然るに今茲には後藤基次とわり孰れか異なるを知らず湯淺元禎場
 所と隔て異説を記して之れが辨をなさるはチト愚なることなり開は倍て置きつ本章
 三個の推察は泰西論事矩の風ありて日本智囊を編纂するの好材料なるべし
 【五百五十九】 加藤の家にては足輕具足は不着冑ばかりかふり冑の脇立は長二尺に白き練一幅
 の小しなへと兩本立る清正の物語に他家よは具足と着せ冑は不着或は張抜の笠をふるると
 見へたり身に皮具足を着ても頭に向へるふらさるとさはこたへがたきものなり冑を着れば具足
 は不着してもこたへよき物なりと被中となり

【五百六十】 同家にて大小身とも騎馬の一尺三寸或は一尺五寸の鐵砲を馬上に持ち陣前にて
 打放し鎗を初るとなり清正家中の老人後に咄せまは馬上に火繩何とも難持者なりといへり
 【五百六十一】 藤堂高虎の家中は足輕中間まで冑を着金の桃形の冑に一枚鍔は鳥毛の引廻しを
 付け胴の古は金の銀近年替り胴中を三分一金する中間は中白筋の羽織なり物頭は不殘冑の押
 付よ白熊付る白き髪を下けたる如く胴より下へかゝり見事なるよし

【五百六十二】 同家士桐庄右衛門は伊賀の武繼組なり刺物を横に斜にさす是とおいね刺とい
 ふ右へ斜にさす時は太刀よさわるゆへに左の方へ斜にさすなり此士の三本藤よ鉛子十七中ある
 とあり此士刺物の柄と打柄にして請筒待請合足をつよく丈夫にする此意は或城乗のとき石垣屏

高く登りがたかりしと下人石垣の上へはやく登り庄右衛門が刺物を取て引揚へ一巻に場をのりたるもへに以來此の事となり此士元來池田伊豫守秀雄の家士なり又此十頼富の露をこしの穴を廣くする此意は頼富を苦しめ食するに頼富の透よりとどがひに落つたりたるを指を入れて掃之に宜しとなり又氣も散じのたゞ宜しとなり梅原は江戸淺草知樂院伯父なり

〔五百六十三〕 讃仍源英公の家士西尾右兵衛半人るとき有馬の役に寺澤家の備をかる狸の羽織に朱熊の頭刺物をさす此十の喉に鉛子あたりたるに頼富を掛ざるもへ柔よして弱くわたりたるゆへにかの皮に玉留り死脱るるの鉛子後まで留りたるくして有しとれり其鉛子年々下へ下りたるとなり右のゆへに一生頼富を川ひきとなり

〔五百六十四〕 戸川肥後守の父戸川平右衛門家士高麗陣の砲馬場重助と云もの南天門の棟へ上り内へ見れを一人もなしとき味方をかへりみ招て同家士完耳太郎兵衛續て上り大門の一番のり完耳太郎兵衛と名のる之に依て重助功を空くす加様のとき武功有べきとなり

〔三百六十五〕 同役清正家來矢木八右衛門と云者晋陽の城攻のとき具足の綿纏に矢と射付られ取て抜けれども矢柄計抜て根は止りけれどもその場急なるゆへに其ま、城への入込さてその夜陣屋へ歸矢の根を抜けれども肉に喰しめて披ざるゆへ手負を足に附付けて矢の根を鉄鉋を以て漸々抜たりとなり或老功の者云しは矢根を當坐に抜ざるも肉に喰しぬ不拔物といへり

〔五百六十六〕 大猷院横日光山の様子圖にて御覽可被遊と書師參り委しく圖するといへどもしかど均わかず北條新藏(後安房守氏長)をつかはされ候節一覽仕り歸りて御庭の砂よて山の圖を仕り御目にかけしころ則安房守と奉行は仰付られ御普請出來の由なり

〔五百六十七〕 慶長五庚子年關原一戰九月十五日其前日晝前より大御所は赤坂へ御着陣被遊い晝時分に石田三成方より島左近浦生備中大將にて杭瀬川をこへ川田誘引をかけ其口中村一學陣取の際なり竹田五郎兵衛二千石取三間計の鳥毛の棒のさしものふて陣所の堀をはねこへ治部が勢へつけ合三八鎗付候を鉄砲にて打倒し竹田が討れしを見て中村が兵ども柵へ踏破 争て掛出しし野一色頼母金の三弊 數内匠推つゝさか、り候治部方よは水野庄次郎 後號淺香 林半介 治部 番)伊前頼母などあれこれ五百余進み備前勢には明石掃部 宇喜田家老 本多對馬守兩大將に稻葉 助の函不破内匠等八百餘出候石田が物頭嶋左近浦生備中伏兵を木戸一色村の敷に伏置てひきい

により中村が勢星をしらす進み申さる處と打立射立しと兩方たへ鎗初りし中村が内成合平左衛門一番やり仕討死仕りし首は猪尾甚太夫とり中村勢敗軍仕の家老野一色頼母鳥毛二の團子の馬印をとりて川の東におし立一足も引まじくひさてく何れも敗軍見苦しくし、り敷内匠千石取中の脇を引て通り候内匠に何とて返し不申やと頼母言をかけし内匠より手負ひゆへ返し不申いと斷川を西へのり渡りし服部小膳高屋九兵衛いづれも弓鉄砲のもの頭どもにて覺の

兵にて候へども押立てられて崩れ申候野一色頼母の金の三弊のさしものにて馬とひき返し敷度た
 かひ候を治部少輔が内海北市郎右衛門鉄砲にて打申し候頼母砲にあたり馬より落則討死す
 の組子松村清助頼母が死體の綿纏をとりて引ずり退きいへども治部人敷付立候ゆへ頼母表帯を
 切刀脇差をかりとりて退申候あとも頼母首は富村と申兵とり申候治部方多勢追重りゆへ中村
 家人中村新介河毛新八同次郎原田梅津天野堀口等二十八人討死仕り候甘利左兵衛は川中まで立
 合防た、かひ候鎗手二ヶ所負退きかね候を石田が兵ども追付候吉田左太夫返合追拂て甘利を
 しりぞけ候中村並の陣も有馬玄蕃頭豊氏にて候此合戦見て有馬が兵どもも數十人柵をこへて
 進申稻次右近鳥毛半月さしもの岡本五郎右衛門眞先に進て川をのり渡し治部方の勢中村敗軍を
 追來候出合頃よいたし候稻次右近馬岸へのり上候と金の制札の頭上立物の兜着て横山監物と
 名のりか、り候右近と互に馬上よてわたり合すの、ち馬より下立組打になり右近下になり申を
 右近郎等岸又左衛門監物が鎧の綿纏とりて引かへし候へば右近上になり候監物若黨かけ付右近
 が兜の鍔より付引仰候と右近ふり放さんと頭をふる處へ右近が若黨かけ付監物郎等を切候へ
 ば右近が兜と放し抜合防合申候しかる所へ堀尾信濃守忠氏の母衣の衆一人かけきたり敵味方と
 も辨へず右近が若黨と味方討にいたし首を取引返し候その内に右近は監物が首をとり立上り監
 物が若黨をも切ふせその首ととり二ツまで高名し若黨が首を鞍の鹽手に付監物首を奪付て手

は提馬と静々と歩せ中村が陣中を通りけるに見る人衆ぬものはなし其場過て備前秀家の家老明
 石掃部三百余よて池尻より福田繩手へ廻りか、り來り候中村一學人數亂候と矢野助之進の團
 も只一騎にて取て返し大勢の敵へ立向候林文太夫赤母衣金のも返し合傍輩の梅田大藏が深手負
 て退かね候と助退申候助の進屹と見付て梅田を助退候はんより此大勢の敵と防候へと言葉と
 かけられ文太夫は梅田をすて、馬に聲とかけのり出し助の進も馬を踏立二騎連て掛入と明石掃
 部浦生備中が人數崩申候兩人勝に乗て追打候赤坂の御本陣より大御所御遠見なされ大事の合
 戦と明日よあ、へ無益の軍いたし人數を損じ申候早々引揚げ連て戻り候へどとくしく御腹立
 なり渡邊忠左工門重綱金手桶を遺されいへども敵味方くひとめわかれかね候大御所殊の外
 御怒りなされ井伊直政織金の蠅取の馬印本多内記忠朝雲守を御さしそへなされ遣され候直政
 忠朝は中村の陣へ駈入早々引上申べき旨申渡いとき矢の助の進林文太夫敵を追立し戦申候直
 政のり付何とてみだるく仕候早々引上候へど下知いたされ候助之進文太夫ふり返りこの所をば
 此兩人は御任せ候へ兵部殿内記殿は有馬玄蕃手へ御下知候へと申し捨切か、り遂に大垣方を
 きり崩し夫より敵味方入交りせり合候このとき治部少輔が兵水野庄次郎昭の皮の羽織銀の大釘
 の立物の兜にてのり來り中村母衣のものを梅田大藏が手負て引兼候と首をとり大柿へのりかへり
 三成惲矢倉居候下へ參り水野庄次郎よて御坐候高名仕候間御勘當御免下され候へと叫り候治

部少輔いかに心得たり高名も見届候間先手ノ頼候早々参引取くれ候へと申候に付又庄次郎の
先手へ参候この有馬ノ播頭も田中兵部も中村一學を助て多勢にてあり候ゆへ秀家内稻葉助之
丞金切さる治部が使番林半助柴り下り殿仕候明石掃部も堤も傳乘上馬に輪をかけ殿仕
候二目村の敵の下にて中村勢有馬勢ひしと付處よて牧野傳藏が兵せも又備前勢少々踏留り候丹
羽道監と石黒藤兵衛立こたへたり見事に候かくて日も暮か、り井伊直政弊をとりて中村有馬が
勢と引上て歸られ候

一説中村が軍士等太垣勢に掛留られ未堤の下に有けるを 大御所本多中務太輔忠勝と召て
其方急ぎ馳越中村が手の者を引めぐべしと仰られ忠勝頭て御前を退き騎兵と足輕を相供して
株瀬川にいたり中村が兵士を引とらせ忠勝は後殿して退きけるに秀家三成兩家の兵士猶もひ
留んと勇みけれども本多が繰引の列伍亂れざる故にさすがひら付よもあせす扣へけるが秀家
の軍士稻葉助之丞命切サキ枝釣三成家人林半助白しなへ兩人諸共に先達く進み來忠勝が備に
近付て兩人ともよ輪をかくる 大御所これを御覽あつて武者ふり見おとなりと仰られしとか
のや右の品實録なりとて借求見し故に爰に記す然るときは井伊氏このときの殿は相違なるに
や猶またたづねて可二書取一か
此とき 大御所の赤坂岡山の本陣より御見物なり井伊直政人數ノ舉様中々足手をつかふ様は下

知して引とり候能き見物なりと人々申し候秀長三成人數も漫々としたな引大垣城へ引入その勢の
内に白しなひさしたる武者一騎のり下り見こども殿仕候 大御所白しなひ見こども候と度々
仰せられ候此とき中村が方究竟の兵士三十六騎討死殊に一學家老野一色頼母討死仕る味方へ討
とり申候首と有馬玄蕃頭内稻次右近が討取候横山監物主従二人の首討る此とき右近は御本陣
へ参候を 大御所御覽なされ鳥毛の半月へ先刻この陣下へ通り敵に向候さ高名仕候やたれが者
と御尋あり有馬法印御傍よ居られ同氏玄蕃家人と申上る則首帳に付申稻次申候は我より先に首
一ツ持來りて候仁有候やと云筆者申候は中々堀尾信州の母衣のもの首一ツ持來りて帳に付候と
いふ稻次 承り夫は我家人ノ味方討に仕候その御張とけし候へて下されと申則 大御所御聞な
され何事を申やと御たづね被成候筆者承り右近が申候通りを申上候へ斯様の打交り軍には味
方討にても高名よなり候例もあれば首張消申問敷と仰られ候このとき堀尾信州方へ聞へ母衣十
走の兵せも敵味方見分するたへ者母衣仲間には不三罷成一候その儘御借可し有候は、俣とさま
上候と訴訟仕り候堀尾帯刀吉晴さ、尤に候とてかの者の纒をは召上仲間とはづれ加増をなし
弓廿八預り候よし有馬玄蕃は稻次右近高名を感じ本地五百石れ上に六千石加増と遣 家老に致
され候後年肥前島原にて八十五才にて討死仕候

〔五百六十八〕 上杉浪人門田造酒之丞は淺野采女(正)彈正次男左京大夫弟(正)則に奉公かの門田

がものたりに日本條越前守重長は越後本條城主大剛一の大將上杉にては一二を論ずる程の武
 勇なり永祿十一年本條越前守逆心するにより輝虎直よ出馬なり飼付川を阻く本條も出向ひ一戰
 あり輝虎先手の上杉彌五郎兼春二の先の直江山城守兼續三番を景勝十四歳鉄上野介栗林肥前守
 介介へなり四番は謙信旗本なり上杉彌五郎自身川へのり入られ故毛義興十郎のり込一備一度お
 のり入候本條重長八敵も川へ打入れ川中にて鎗と合敵烈た、かひ候所へ三の備景勝手脇へ押込
 鎗を錫杖持して勝た、と聲をかけ二千計眞黒となりて川上へ打入本條が前へ押廻し候よ付
 本條重長敗軍なり重長乗下り、殿して退所へ上彌五郎乗付重長に組んと志し甲され候重
 長小高き所へ馬を乗上扇をひらき彌五郎殿さそがにて見ごとに候去ながら最早御引とり候へ深
 入めされ候は越度ととり玉ふべまど云彌五郎本條よ組とならずして引かへす此本條は大力にて
 大勇度々の軍功數をしらず國境なるもへ最上義光と取わひ庄内とそぎ牛切とり天正六年謙信逝
 去のとき景勝へ使を立上杉御家譜代の者にて候輝虎公ひおろこり御意に違ひ弓矢よまかり成候
 上杉御家恨無之候間歸參仕度とて景勝へしたかひ上杉三郎方を攻めたがへ夫より今に恙なく奉
 公するなり最上殿と干安にて本條戦のときに甲と切わるこの刀正宗あり後秀吉公御代は伏見御
 普請に付本條重長在京し勝手つまりかの刀を賣る本阿彌とり次、家康公へ被召上本條正宗と云
 候は紀伊大納言殿へ進せられけるなり又甘糟備後守は上田住人にて是も小身より武邊にて成立

謙信秘藏の兵にて後は大身に取立られ景勝家にて本條重長と牛角の兵なり景勝會津へ參られ
 白石城主として五万石下され候福島城は本條重長梁川の城は須田大炊なり關が原御陣なり關が
 原御軍のとき甘糟備後會津にしむらく罷有候あとして甥の登坂式部逆身し政宗へ白石城とわた
 し候式部も政宗へ行夫より景勝無興して甘糟備後守を遠のけ旨もかけず備後守も日陰者の様に
 なり罷り有候、家康公聞し召及びたる大剛名譽の兵なる故に御望に思召し畠山下總守義直
 に仰遣わす景勝目見を惡由早々立退御旗本へまいり候へ二萬石にて召出さるべしと仰遣はされ
 京よて下總守方へ備後守と呼て上意の趣と申わたす本多上野介正純書狀までみせ候へば備後
 守頭を地よ付景勝目見惡は拙者の不調法にて少も恨御坐なく候たさへ何様に至され候とも譜代
 の主に候間御免下され候へ上意へ有がたく存じ奉り候旨涙を流し申候その段達三上聞候へばそ
 の忠義信の所よて猶ねまき兵也と仰せられ候畠山は逢候と何としてもれ聞へ景勝いよ、不
 興して我にくれ畠山方へ行と言語同断とていよ、甘糟はれしみ申され候備後守死去子共に
 は跡式申付られず津輕へ浪人仕なり右兩人の外に太剛のもの主大將分のもの多し千坂對馬守こ
 れは上杉四家老の一ツなり見おとなる士にて何方へ大事の使に越候ても一かと埒明べき仁体な
 り分別者なり岩井備中守は謙信小姓立よて見おとなる男武邊度々あり分別辨舌兼備そり名高き
 兵にて殊よ茶湯者あり安田上野介は小男なり手疵あるゆへ少足を引眼さじ光ありて何者が見及

ても剛の者といはぬ人なし中々す、さく氣高き士なり杉原常陸は武邊かさ有て平人にわらず分
別了見大よして軍功數度あり糸くつてのさしものとさす直江山城守は大男よて百人にもすぐれた
るもつたいて學問詩歌の達者才智武道兼たる兵なり恐くは天下の御仕置にか、り候どもわだ
むまじさ仁体なり島津下々齊是口戰功武功肩を並ぶる人なし其外能士多くありしかども今は以
やのこらす死に果て二代三代に及たりと門田ものがたりなり

〔五百六十九〕 丹羽五郎左衛門長重の咄に鴨野口にて我等も仕寄を付る景勝出て我らも仕寄を
付申べし先是なる流に橋と丈夫に懸より申付引込直江をはじめ手ぬるさ人かなと思ふ氣色にて
橋もかけず景勝また出何とて橋へがけぬすと被申西條治部申は只今よても橋へかけ申べしとて
即叱よかけ申候景勝見て本の社寄場とばさし置脇よ土俵とひき鉄砲をかけて貝次第に土俵を
持參れど下知せられ大坂方始は用心しけるがこの休と見て上杉は軍のそべをしらぬかばかく
敷はわらじとて引入景勝衆も主の下知を受ぬ顔に景勝は油断を見すまし貝を吹立と即時に本仕
寄場へ土俵をひたくくに持寄仕寄を即叱に付る前の土俵置たるの仕寄道になり明日大阪方仕寄
防出是と見て肝と消し興をさましける由

〔五百七十〕 柳原の人黒田彦左衛門と云兵なり大阪落城のとき五月七日赤母衣かけたる敵と
突ふせのりの、り首をどらんとつかまつり候を傍輩の三枝勘兵衛のり付て彦左衛門その首は相

討とと云彦左衛門はそれを見て首をも不取打捨てその身は鎗提先へゆく三枝これを見て又言葉
とかけ彦左衛門相討ずくと呼はれども彌問ぬふりに先へ通りまた敵を突倒能首とり初槍た
るをば三枝打とり諸遠州は病死もへ館林へ久世三四郎坂部三十郎と遣され今度手柄高名の御除
味あり三枝勘兵衛中候の我ら取候首は黒田彦左衛門鎗付たる首にて候相討とと呼かけ候へども
そのま、捨て通り候もへひたど相打とと呼候へども開付先へまへり候ゆへあどにて此首を取
候といふ三四郎三十郎かの黒田とよび是と聞は中々不覺と答三枝は黒田に向ふてその方敵を鎗
付候を見て相討と言葉をかくるよその方は其突伏たる敵とて先へ通るよ付跡より相討とと四
五度呼かけ候へども見かへりもせず參候に付是非なく彼敵の首と取候といふ彦左衛門は猶覺へ
候はずと坐を立さりぬこの時 兩御所様上聞に達し御感淺からざり

〔五百七十一〕 淺野左衛門家人永田治兵衛は病者にてかけをしるを自由ならず若も内々は
あの病者よて何の役にも立べからずとわらふ永田己を傳聞人足はかど達者次第侍は剛の者
のみ役に立無病又病者よよるべからずといふ榎井よて大坂方淡輪六郎兵衛を討取其首をもぎ付
よして持參し病者よ劣たる息災人と自來 嘸たる人とわらひかへしたりといふ淡輪六郎兵衛墓
石塔榎井よあり甥の淡輪新兵衛立たりと聞其時の一帯の吟味は榎井一戦のとき龜田大隅守惣手
の殿してあどよりのく上田主水は先へのいて榎井の町中のうらよ隠居る龜田をやり過してあ

とにて家より出て町中にてまたへ大坂勢と鎧を合一番鎧なり龜田は河原の敵を追はらひ町へかけ入鎧と合すると淺野右近土井大炊頭一咄候を聞たる人物かたりけり

〔五百七十二〕 信玄豆州莚山へどりつめ燒團のとき莚山城の押へ山縣三郎兵衛をさしおき玉ふは城中より備を出し追合ありその節山縣同心辻彌兵衛鎧下の高名して膝の口をのぶかよ射られ其矢を不抜してとりたる首をもち來り大將の山縣前に畏り居る山縣大に嘖て味方の引とらざる前に戻りたるとて塲を追たり

〔五百七十二〕 三州吉田の城せり合よ山縣内見科孕石はこぼれ者を討廣瀬は人は討されども身衆へ付けるが故に信玄別して廣瀬と召御喉輪をはずして當坐の引出ものよ給りけると也

〔五百七十四〕 池田勝入公攝州花熊城を攻らるゝとき森寺清右衛門池田刑部八田八三右衛門後守父など城の堀際に付て居たるに城兵突て出て寄手崩けるに八田氏跡にのこり伏て敵引入んとするを付んと思ひ居るに先の方に森寺氏城屏の腕木よこり付ふらさざりて鎧を持居たり古老の兵のするとなるゆへ能とならんと思ひ森寺氏より五六間もあさ乃方に同じく腕木にぶらさざり居るに城兵敵と追ひらひ城に入るるとき腕木にあるを不知して引入るを森寺氏腕木より飛下て鎧と取て敵を追かけ鎧を合せ一番の功となれり八田氏も同じく飛下り鎧取て敵と追廻三番の功となれりとなり

〔三百七十五〕 輝政公武將の重寶とすべきは領分の百姓と譜代の士と鎧と三品ありそれを如何と云ふに百姓は田畑を作りて我上下の諸卒をやしなふ是れ一ツの重寶なり譜代の士たとへ氣に不應して扶持を放すといへども敵國にて彼者を實に扶持放たると不思議して間も入るゝかと思ふて疑ふゆへに敵國に逗留するをあたはずして終には我國へ歸て我兵となるゆへこれ二ツの重寶なり又目に見ゆる相圖耳に聞ゆる相圖は敵の耳目にかゝるとゆへにたやすく敵國よてなしがたし鶏鳴は唯もそれ相圖すと知らざるゆへに即ち敵國の鶏鳴よて一番鳥よて人衆と起し二番鳥にて食し三番鳥にて打立とぞ、相圖と究て敵もりの相圖を知らざるの徳ありこの三ツの重寶なり是を三の重寶と立しと宣ふなり

〔五百七十六〕 尾州小牧合戦 家康公御勝利己に首實檢甲筋の先方廣瀬郷左衛門が云く我古主武田信玄大合戦勝利を得ては必引上げよき塲或身方の城へとり入て二の目と討れざるを第一とすと言上同國の士三科傳右衛門が曰く遠からず去年六月江北越前の境樺江城にて佐久間盛政が中川清秀父子と討てろの威を振ふといへども引取遅くして柳が瀬の敗軍今こゝ也と言上依之御人數小牧山へ雲の如く玉ふとなり

〔五百七十七〕 小牧山御本陣に御旗御馬じらし或は張立或は隠し玉ふ上方の勢旗に心つかず味方の人氣と敵と見えせずして長久手表へ悉く敵と釣出し敵よ先手を捨させ旗本を討破る御備

なり此合戦は公後々まで御自諒あり

〔五百七十八〕 福島正則が原の役越のとき出陣の日往じ日なり或人諫ふ曰占之趣出て再無二歸事と候へば他の日に定められよと云正則聞て實吉日あり我此度の戦功名第一と被言働を遂大國に被封て行か運尽なば討死と思極たり然れば何ぞ再びよの地と歸らんや日を替ると有へからずとて出陣せられしを果して働功拔群なるが故に勢備二万五十二萬石と被封たり

〔五百七十九〕 同役正則尾越の渡と越て秀信の兵と追とき城兵一騎後れて引行所を正則の士吉村亦右衛門馬を馳て追之己に追付んとせしが幅二尺斗の溝にのりかゝりたり吉村が馬曲り此所おいたり狂烈尻込て不進長尾半右衛門は遙めとより馳來りけるがかの溝と濯こしめの武者と討とれり戰場にてハ曲馬は專撰むべきとなるを吉村心を用ると疎かゆへあたら高名を失へり

〔五百八十〕 同役岐阜落城のとき黒山肥前守長政藤堂和泉守高虎田中兵部太輔長胤生駒雅樂頭吉正幸山伊賀守等に城早く落ちし故手不台とと憤りさらば大垣の城を賣んとて進み行このとき石田三成浮山秀家島津義弘小西行長その勢二萬斗岐阜の落城せしとと不聞後援のため軍を發す呂久郷戸の邊にて行合ふ田中先登して三成が兵と討三成が先鋒敗したり義弘このとき三成へ軍使と遣して先陣少敗したれども後陣猶戦よあまりあり敵は勝を貪て部曲亂たり此處にの

りて横さまに突ば大利あらん疾く兵を遣められよといへども三成不聽して岐阜已に陥り候へば是の責たる勢續き可來今少し利有ども畢竟の勝よあらず異穴をのたくして變を見候いんとて軍とかへすこのとき西黨大に敗して郷戸赤坂迄二里の間追討よ達者おびたし義弘の言に従て横よつかば東黨の敗走必然たらん惜き圖を失へり

〔五百八十一〕 同役長胤郷戸を渡らんとするとき中間の中よ水練をよくする者わり是をして瀧附せしむ大雨の後水増りて淺瀬をしらす諸人渡り兼ねる所への中間川へ飛入り或は浮或は沈て甚深しとみへけるが歸て淺く候といふ長胤先に汝かわたりし体は深かりし体なるが今淺しと云は如何と被尋ければかの者答て淺き体と見候ハ他の備より先と争ひ渡り候はんぞわざと深き体と仕候といふ長胤則淺き通りを渡りて先登の功ありあの中間は此功よよりて郷戸三郎左衛門と號し士の列よ入られけるが後よ細川家よつかへて病死せり

中間淺き瀬と深しと見せたる其心ころ深けれ

〔五百八十二〕 同役 源君赤坂に御着陣有浮田秀家勢州より大垣の城にきたり三成よ對し今日東國より上りたる諸軍の陣營と見るふ營法不嚴軍令不整淺間なる体なりかれが敗刑に乗じ今夜軍を發し營を取らば必利あらんこれ彼が銳氣を奪ひ味方の勇と益の謀ならんと勸けれども三成不果して止ぬ能圖とはづし利を見て不取態度也

〔五百八十三〕 同役十五日の未明赤坂の惣勢關が原へ打出辰上刻内府公野上村西海道の南桃栗原と云山の御旗を立らる御旗本組段々の御備關が原町東の端まで十二町程あり御先は則福島左衛門太夫同刑部少輔京極侍從藤堂佐渡守有馬玄蕃頭山内對馬守田中兵部少輔二番備黑田甲斐守竹中丹後守三番備下野守忠吉卿井伊兵部少輔本多中務太輔酒井左衛門公御馬先ハ御承姓組段々の備五の字の御使番五色の御母衣組御馬じるし金銀の半月切さき金の扇子は大久保彦左衛門御馬の先に進たり今日未明小雨降霧ふかく物色見へがたし漸己の刻初に天明たり既に御旗本より武者二騎のり出し敵みかた備の虚實考へのり戻るこれ 則會部江法齋森勘解由なり 井左衛門與平藤兵衛己上 筑前中納言陣松尾山と内府公御旗本その間三十町に足らず石田三成陣と公の四騎物見出たり 御旗本との間三十五町と敵方東軍の旗先を見かけて 則藤小川を打こし小關村の西巽へ向て段々に備へしむ備前中納言大谷刑部少輔平塚因幡守戸田武藏守同内記等は山中峠に人數を立しが引下し谷川と打こへ關が原の北の方へ押出し西の山を後よして足輕をかけ鉄砲を打立矢を發すこの手よわたる東方福島左衛門太夫同刑部少輔藤堂佐渡守黒田甲斐守京極侍從北の山より押下し靜にかゝり合戦敵身方ひしと取むすひ地煙を立攻た、かふさる程に宇喜田秀家無二の西方太閤の御ときより五大老のとの一人今日の長將なれば八千の人數五千先手三千旗本にして福島先手へ平かゝりにかゝり面をふらず突立追くづし二の手より秀家采配とより正則とも討とり

天下の面目に備よと息をもつがす突かゝるときに正則下り立芝居よかりじき鎧を持つるへせもの
 途も敵ハ前後一ツに成たりみかた勝べき圖こゝなり正則こゝにありと下知し給へば福島勢守かへすと見る内に惣返しとあへし勇のゝる宇喜田勢と旗本とも追くづすこのとき秀家千の備なりとも二の味方用ひ玉は、勝軍なるべしと云りこの戦ひ半に名島秀秋となへより大谷刑部備へつきかゝる 則吉隆馬上に自害毛利秀元戰場にて東方へ返此色を見て諸手の敵崩色付まど云へり

〔五百八十四〕 同役よ 家康公御合戦はり御詮議石田が陣場小池村柵より東にて討とる首は高名ろの品輕重あり柵を西へのりこへて捕首は追首なり南宮山の敵は追手の敗北を開てのこらず退散なり

〔五百八十五〕 同役翌十六日江州佐和山へ向はるべしと五字の衆諸手仰渡さる處に申の下刻より大雨このとき山中村御本陣大雨に付物軍小屋々々支宅の火を焼とと得ず御旗本より惣勢へ生米喰へからず少の内水に米を浸して喰べしとなり不破關川の洪水に敵味方の死骸流るゝと夥し
 〔五百八十六〕 同役 家康公牧方表に御旗を立られ今度討とり来る敵の首御實檢あり公甲冑を召拔身の御長刀を持せられ牧方前野御牀儿に御腰とかけられ御張射まで大阪の方よ向はせられ御前に御旗七本金の扇子の御馬じるし御鐵砲百下火なむに火付御弓百張矢とばけ御槍百本拔身

御右に井伊本多大久保酒井榊原御譜代の諸將伺公少一上りて秀忠公初奉り御一門方御左は池田三左衛門福島左衛門大夫ろ乃外今度忠節の大小名毛氈をしき張肘よて伺公す外様の大名は馬じるし立し所は具足櫃を引付々々伺公す扱諸の首曲物に入上を絹よて包みその絹をかり取て曲物の蓋を明て首と出さずろの次は桶に入たる首六ツ七ツれく其外誰々の手へ討とると鼻をかき並たり然るときに公さて首實檢あるべきやと池田福嶋兩將へ上意御受には御時宜く御座なさせられ候旨申上る其時立上り玉ひ長刀と御杖に御つきにて御張肘にて左の御脇を御眼じりにて上覽その時前後左右大小名一同は頭を地に付玉ふ各頭を上て張肘よて伺公御足柏子を左より御ふとさて右と御ふみ又左にて御脇納なさせらる鯨波を曳々くと長く御わけ諸軍一同にか、と聲と上げ奉るさて御長刀を御脇よりそと受取奉り秀忠公へ渡進上仕る秀忠公御で御頂戴ありりのうち御長刀持人に御渡しさて御蓋ありとしが

〔五百八十七〕 備前少將光政の士上泉治部左衛門義郷は上泉主水が甥にて大坂兩度の役にも武功あり老年の頃池田信濃守政言二子也上泉に具足箱に利方よき制法有や聞置て家中の士にも言聞せんと尋られければ上泉答て笈にも仕膳にも仕候が有來るよろい篋を用んよいか様よても害なく候關が原大坂兩度の役天下諸軍馳集り候に種々の品有て是ど利有と申とは承はらず候重き害有て輕きに利有候へどもこれとも軍行は定法有て左のみ遠路を押とまければ必要とす

るに不足筈は山林繁茂の地に利わりと申候へども具足箱さへ持行に不自由なる地へ大人数と押入て何の益有べきや只有にまかせて用よと被令然べく覺へ候と成り

〔五百八十八〕 瀧川左近將監一益武藏野合戦に擊負て退口に極暑の頃あれば馬甚疲て遍身汗にひたれり川を乗渡すとき水と飼ものあり水を不飼者あり水を飼もの、馬は十町斗りよて皆行仆れたれども不飼もの、馬は別條なかりしと也

〔五百八十九〕 相圖の旗といふとあり甲陽家よ於ては萩原常陸守と云大剛の武士伊勢浦の獵をなすに山上に於て相圖をなしその相圖に依て魚を捕るを見て是に依て工夫をなして相圖の證據旗と云とを爲せり則信虎の世に駿河今川の家臣福嶋といふ武功の士甲州と取て我國ふせんとて駿遠の人数大軍と以て甲筋へ押入己に武田滅亡せんとせしとき常陸守件の證據旗の相圖を以て軍に勝敵の大將福島をも討取りたりとなり是小庵によつて大利を得たりとなり

〔五百九十〕 武田信玄新田足利へ燒働し玉ふとき敵城の高みく、旗を置て敵の出る出ざるをの旗の相圖よよつて知その虚實をはかつて敵の宿城を燒働し玉ひしとなり

〔五百九十一〕 信州高遠の城に保科彈正廿九騎にて籠城のとき小笠原一萬の人数と以て攻之このとき彈正郷民を大勢かりて見せ勢となしそれに旗も多くもたせて見せ旗となし又山上に相圖の旗を置き敵の押來るとき半途にして相圖の旗と振て石弓とかとし敵の人数をしきりて終に廿

七騎を以て勝利を得たり

〔五百九十二〕 上杉景勝最上義元を合戦直江兼繼長谷堂口を引揚清口左馬助勝路直江に向て曰く夜に入て人數引取候は、大敗軍に成べく候今夜ハ堅固の地に陣取明朝引取玉へと申ければ直江も最と同じ一里計引取て小高き所の野山左り半道計り行く先は大山爰こそ能所なれとて陣と取夜の明るを待謙信家の軍法懸り引と云てだてにて引取しのは上杉の諸軍無き悉米澤へ引取けるこの時の陣取直江下知にて山より半道前陣取つ、山へか、らざることを 家康公後々々で御稱美ありけるとかや

〔五百九十三〕 美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鉄砲追合有けるに輝政公と西國方との追合の間に敵ありてうれへたよりて敵より鐵砲と放しかくるゆへ此敵の敵と追はらひ此方へ取て竹と切拂ひさはりなきやうにすると可なりとて山脇源太夫竹村伊豆八田豊後この三人の番頭に仰付られ三人とも組鐵砲を運て出張し敵を追拂ひ敵を切はらひて三備とも引退んとするとき敵喰留たるるとき八田氏殿後にて追かくる敵と追拂んと足輕に鐵砲を打するに急なる場ゆへしかく打がたしよのとき豊後長臣柏原空右衛門足輕の中にたしめるもの三人をまねき鐵砲よ玉薬とつかせ追ひ來り敵中へ空右衛門とりうへく十四五程鉛子を放し馬上の三人程にみてそれにて辟易して敵引退たるとなり柏原も引退とて右の玉薬と込たる足輕の居處

を見るに砂の中をほりてうの中に居て玉薬を込たるとなり穴をほりたる體を柏原と不見急なるときによく堀てはいりて玉薬を込たると笑たるとなり柏原は柏原市右衛門先祖なり輝政公より播磨の御普請場よて御褒美に段子の羽織と被下となりその謂れは天下普請のとき黒田殿の兼と口論し齒と少しとられながら相手と切たし利と得て金銀と以て入齒をしたるとあり此とを仰出されるの入齒の者かと有て御はふび被下しとなり

〔五百九十四〕 甲州家山形同心の士長坂重左衛門後に井伊家に仕へたるとき上泉義郷と武話ゆりしに重左衛門が曰惣して戰場よてたがひに銳將先に進て利ある戦地を取んと欲るとき我方に其地利の場をとりたるときは其場をとるや否や銳卒に一放づ、さほひととりて鉛子と放さすべし不然ときはたとへ能場をとりて勝を得たりといへども銳將の功を先賞するとなし其場ととりたるまで也其場と此方へ取るやいなや銳子を放するときは銳將の功いちじると此徳と可三考知となり

〔五百九十五〕 信玄小田原發向のとき小田原の蓮池に於てとひ大貳と云根來法師の第一番鎗よさしつゝ進んで旗本衆の二番やりはいやなりと云て捨て刀をぬきて敵へ切か、り首をとりたると云ふと是向ふ渡りなり

〔五百九十六〕 輝政公關原合戦の前岐阜の城攻のとき合渡の川向に岐阜勢出て此方よりわたる

を待かけたるに池田の御人數敵を見て進みかゝり切崩さんといさみけると趣政公兵機をたくましくせんためよ押へてかゝらせたまはず見つくろはせたまふに御貝吹貝吹右衛門武功ありたる者よて最早進み貝を吹可然と申上げ合渡の川へ三里だけふみこみ貝と水にて通しかゝり貝を大貝にて吹立ると池田の諸軍一同に川をわたりて其勢にて御勝利なり貝吹右衛門は武藤伊勢右衛門先祖なり貝吹右衛門中村勘齋(中村源右衛門先祖なり)など高録の貝役なり趣政公右御合戦以後毎年元朝ふ表へ御出ありて始て御言をかけらるゝは貝吹右衛門なり表へ御出ふくもん目出度と吹右衛門へ御言をかけらるゝとき吹右衛門五百八十年御目出度おさりますると御返答申上ると御吉例あり右の合渡の合戦のときよ吹たる大貝は大概長さ一尺五六寸計もありて息よわきもの吹るゝ貝よわらず一はいと吹たる福田市太夫若盛のときまでなり右の御合戦御勝利以後關ヶ原御一戰 東照君御利運にて趣政公段々數國を封せられ播磨備前淡路三ヶ國の大守となり百萬石の俸祿を得玉ふゆへにこの大貝と指て三ヶ國百萬石を吹出したる御貝とて寶器となりたるものなり

〔五百九十七〕 朝鮮陣のとき甲冑兵器損諸軍難義なりしに後々は銘々漆と以て茸補せしとなり漆にて塗ても風呂ききゆへに乾ずとなりがたく難義せしよ作意なる人ありて塗物と置たる廻り馬糞と集め置たれば一夜宛に干たると也

〔五百九十八〕 馬は人氣あるやはめとりあしき氣つよき馬ならでは戰場長陣のこたへがたしいかやうよ氣つよく惡相ある馬も長陣にてはねこの如くなるとなり松永彈正久秀の乗たる馬と八田豊後求て大坂陣のころ乗たるに人氣ありてはめがたきを吉介といふ異相の馬取ありて轡と持てかゝると前足とあげて喰んと口を明ておゝるとき轡をはませて牽出せしとなり此馬大坂陣以後この馬を駿州の嶋田へ買駄馬となりたるに其以後四五年も小荷駄にて荷を付て若馬の如くよありとなりこれ氣性つよき馬なるゆへ此の如くこたへたるとなり八田正久大坂陣のとき十八歳なりしに兄久次若きものなるゆへ下部なれども度々戰場に出て事よ達たる者ありとて右の馬取の吉介と正久の馬取となし付られたるに大阪夏陣落城のとき崩口に兜付の首と取られたるよ敵と鎗付て突伏せ首を取られけるに吉介云はやく敵の分量知れがたしと云て正久は同心に無之を右の敵の刀と取たるとなり件の刀高田の刀にて朱鞘なりしとなり初鎗合のとき正久の鎗の太刀打と敵刀を以て切拂ひたるとき刃とれたるやまたいろの初より折れたるよや右の分捕の大刀打の處大豆粒はぞ刃をれたりとなり兜は小田原蓋の金さびにて終不見能き蓋なりと云り然れども池田利隆の手よて兜付の首三ツならでは無之もへに兜と付て御旗本へ還せしゆへ八田家よこれなしとなり

〔五百九十九〕 行軍のとき大將諸軍を巡り見玉ふと古法なり關が原合戦の行軍のとき池田趣政